

た。それを月の世界にある、大木の根元へ結付けて、そ
ろく下へ降りて来た。すると、今度は、途中で風が吹
き出した。サア大變。此方はぶら下つてる所を、風に吹
かれるのだからたまらない。南へ吹かれる時は、濠太刺
利亞の方へ來、北へ吹き返へされる時には、サイベリヤ
へ落ちさうに成つて、ごうくしまひに繩が途中から切
れて、私は地の上へ落ちたが、其落ちた勢ひで、三哩半地
の下へメリ込んで仕舞た。これに一時は氣を失つたが、
間も無く氣が付いたから、直ぐ斧でもつて、地の中へ段
々を付けて、三哩半程昇つて來て、土耳其の王様へ銀の



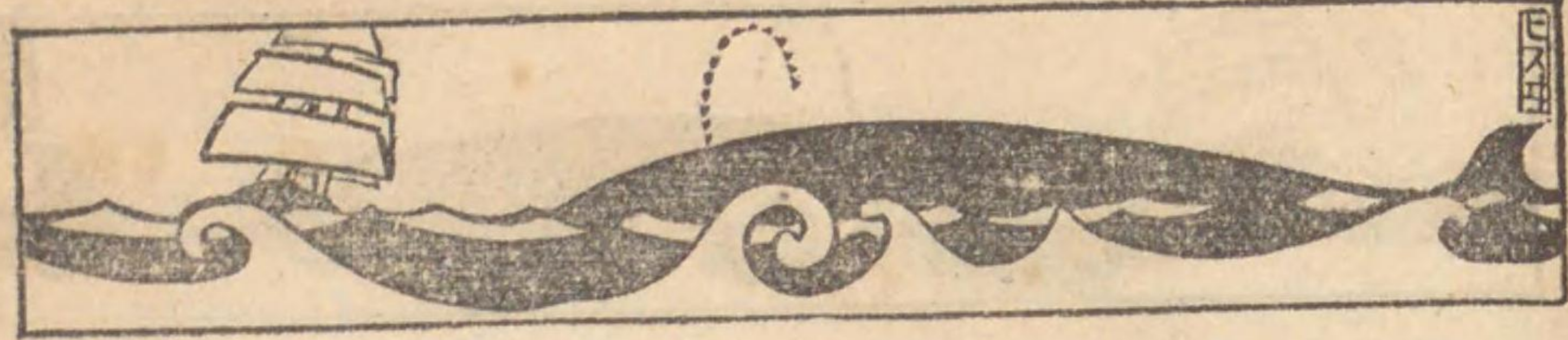
斧を返へしたが、その時は、大變御褒美を貰つた。これ
は前の時のお話。」
さて其時一寸月の世界を見たが、實はよく見物しなか
つたから、何うかしてもう一度行かうと思ひながら、や
がて土耳其から歸つて來て、例の肝腎の豆は無し、何うし
たものだらうと思つて居るに、丁度好い運が向て來た。
それは私の親類の中から、一人私のやうな物好きが出て
來たので、是が或時「ガリバー」の話を読んだ所が、小人
島へ行つたり、大人國へ行つたり、色々なことをしたの
が、羨ましくてたまらないので、丁度自分の所に船があ



るから、其船へ一所に乗つて、一つ冒険旅行をやらうぢやないかご、私を誘ひに來たから、

「それは宜い。私も閑で困つてる所だから、それぢや直に出かけやう、」

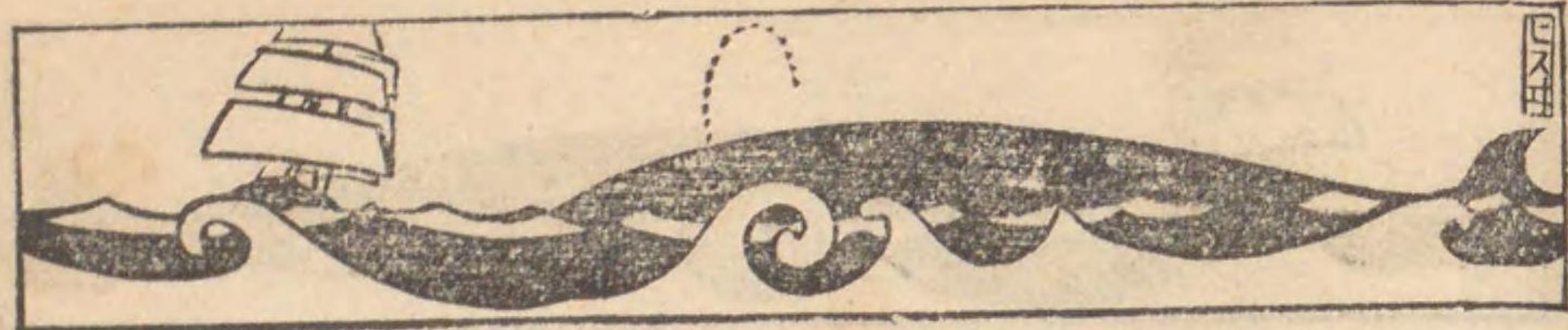
ご、これから道連になつて、唯だ二人で小さな帆前船に乗組み、あても無くまづ海へ出掛けた。出掛けてから彼是れ一週間程経つご、非常な暴風が吹いて來た。さうして何處ごもなしに、ドン／＼吹かれたと思ふご、俄に海の中に龍卷きが始まつた。其龍卷きに卷込まれた儘で、船がグル／＼上の方へ昇つて仕舞つた。三里程上へ昇つ



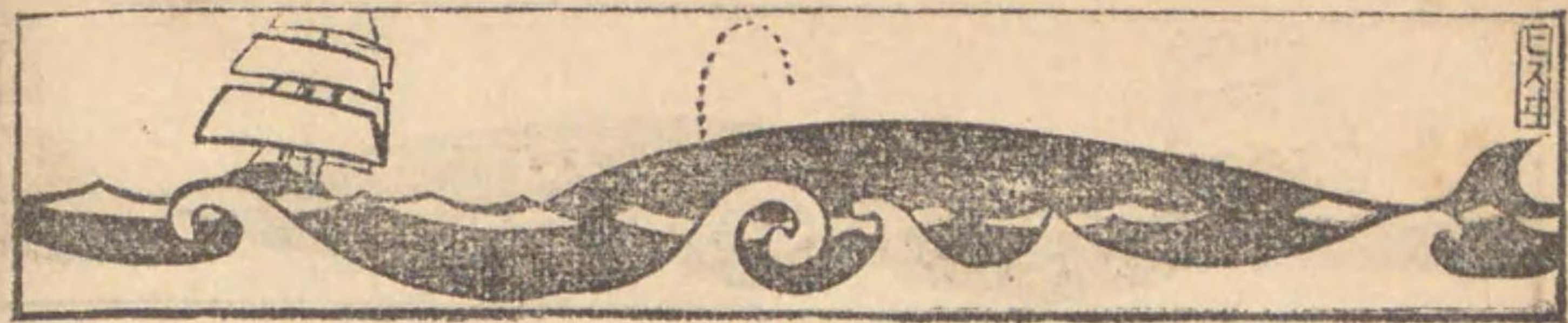
たらう。二人ごも、何うも目が廻つて、此勢ひで下へ落こされたら、船も身體も粉微塵になつて仕舞ふ。こいつは大變な事に成つたご、生きた心地もなくて居るご、今度は風が吹いて來て、船は西へ西へご飛んで行くので、暫くは夢中であつたが、やゝ半晌程過ぎて、船が止まつたやうに思つたから、全體何處だらうご目を開いて見るご、銀色の山に銀色の水、銀色の野原、銀色の家……何うもまぶしくて堪らないが、何うも見たところがあるやうだと思つて、なほ能く見るご、遙か下の方に梅干のやうな黒い物がある。即ちそれは地球なのだ。それぢやア又



月の世界へ来たのか、これはうまいことをした。来たい
 くと思つて居た月の世界へ、好い鹽梅に来る事ができ
 たから、私はうれしくて溜らない。友達を連れて直ぐ上へ
 昇つた。此前は大層急いだから、今度は寛りご月の世界
 の様子を見物しやう。それには兎も角も月の世界の王様
 の處へ行つて、それから色々見せて貰ふが宜からうと云
 ふので、月の王様の處へ出かけて行つた。處が丁度其時
 は、月の世界と太陽との間に、戦争が始まつて居てから
 に、王様は戦争で大變お忙しい。然らば序に見て行かう
 と、是から戦争を見に行つたが、さて此戦争がまた妙だ。

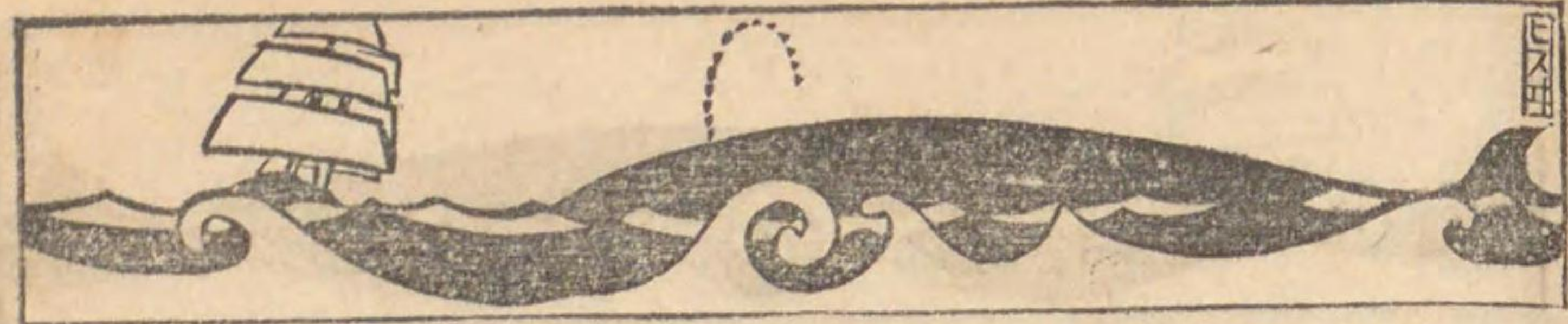


地球の戦争ならば、大砲を持出すとか、鐵砲を持出すと
 か、槍薙刀とか、ソんな古い物はもう無いけれども、兎
 に角さう云ふ武器がある、所が月の世界では、そんな武
 器は少しもない。その代りに長い大根。この大根が投槍
 の代りで、それをポン／＼両方から抛げるご、中てられ
 た者は直ぐ死んで仕舞ふ。それにあてられるごいけない
 から、又一枚づゝ楯を持つて居るが、其楯は何だご云ふ
 ご、これは大きな椎茸だ。この椎茸の楯を持つて、大根
 の槍で戦争をする。妙な戦争もあればあるものだご、私
 は暫く山で見て居るご、その大根にあたつて死ぬ者が、

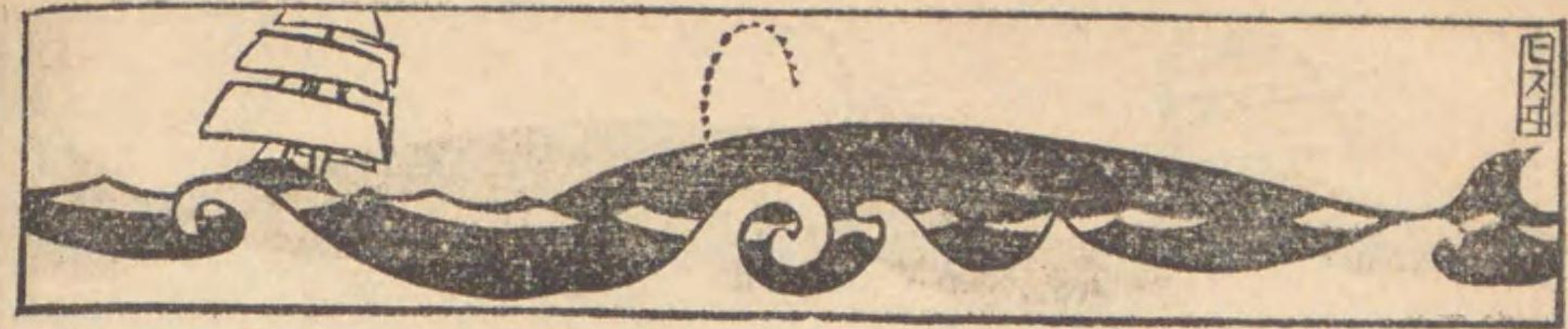


敵にも味方にも大變あるが、そのまた死ぬのが可笑しい。バタ／＼倒れて死ぬのではなくて、その場で直ぐ消えて仕舞ふ。さうするに又向ふへ湧いて出る。何うも餘程おもしろい。

斯云ふさ月の世界の人間は、餘程小さな豆粒のやうに思はれるが、なか／＼さう云ふわけでない。何れも三丈六尺の大男。其上に人間の身體が可笑しい。首が身體の一番上にあるのではなく、何時でも右の脇の下に附着て居る。しかも其首が始終取外しが出来るので。戦争の間は大抵首なしで戦つて居る。首を怪我するに往けないか



ら、首だけを家へ仕舞つて置くのだ。そんなら首は要らないか云ふに、さうでもない。學校へ行くに、何か談判をするに、少し智慧の要る考事のある時は、首ばかりで出懸けて行つて、手足は家に寝轉んで居る。誠に調法なものだ。それにまた其眼球が可笑しい。赤いのに青いのに黄いのに、斯う三つあるのだが、私の行つた時には、丁度青い眼の流行る時で、皆青い眼をいれて居た。而も其眼が潰れるに、直ぐ眼球屋へ行つて買つて来る。さう云ふ風に、何だか餘程奇妙不可思議だが、全體其三丈六尺の大きな人間が、初め何うして生れるか云ふに、



決して阿母さんのお腹からは出ない。そんなら木の股からか云ふこ、又さうでも無い。月の世界の人間は、木の股ではない。木の枝に實るので、山へ行くこ人間の木こ云ふのが澤山生へて居る。其の木に肉色の大きな實なる。胡桃を百倍した位な大きな實で、堅い皮が付いて居るが、それが熟して来れば赤くなる。宜い加減熟した時分に、それを取つて大きな釜の中に入れて、グラ〜こよく煮るのだ。さうするこ廻りの堅い處が、段々柔くなつて来て、パツと割れたと思ふこ、オギヤアこ云ふ聲がして、もう人間の子が生れて居る。それが普通の人間



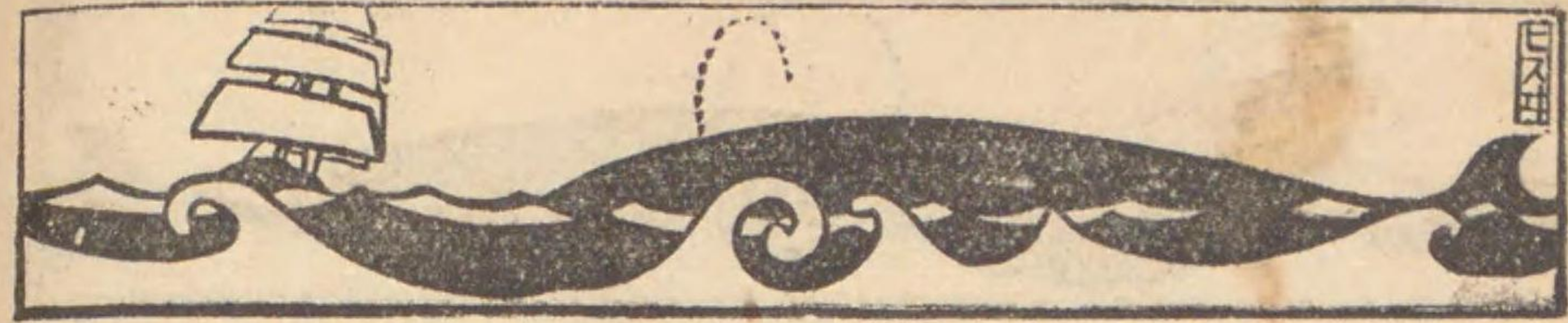
なら、赤ン坊こか白ン坊こか云つて、生れた時は裸體の者だが、是れはさうでない。軍人はチャンと洋刀を提げて、軍服を着て飛び出す。學者は本を持って飛出す。商人は算盤を持ち、大工は金鎚をもつてをどり出すこ、かう云ふ風に、生れながらにして、ちやんこもう極つて居る。だから學校なぞへ入る世話はない。それから、月の世界の人間は、御飯を食べるのが又不思議で、年にたつた十二遍より食べない。何うして十二遍食べるかこ云ふこ、先づ正月の元日に、お腹の右の方の穴をあけ、其處から御飯を注込み、二月一日になると、それを左の穴から出



して、又かはりに新しいのを注込む。一月に一度づゝ食
べるのだが、それも口で食べるのではない、お腹へ只さ
して置くので、さうすればお腹が減らないと云ふ。餘程
何うも不思議な國だ。けれども何しろ先方は三丈六尺も
あるのだから、物を言はうと思つても、なか／＼思ふや
うに届かない。愚圖々々して居るゝ食物にされて、御腹
の中へ抛り込まれさうで、ごうも危険でたまらないから、
好い加減にして行かうぢやないかと、連の者を誘つたけ
れども、何うも唯ぢやア歸ることが出来ない。何うした
ものだらう、何うか宜い鹽梅に鳥でも飛んで來れば、そ



れに乗ることが出来ると思つて、毎日々々鳥の來るのを
待つて居たが、生憎鳥も何も來ない。
さうするに、或日のここで、大暴風が吹いて來た。非
常な暴風で、木の葉でも木の枝でも、フウ／＼吹き飛ば
されるから、斯う云ふ時に飛んで往つたらば、うまく地球
へ歸ることが出來やうと、今度は高い木の頂邊へ登つて、
風が一番強く吹いて來たら、その弾みに飛ばうと云ふ積
りで、木の枝に掴つて、一生懸命我慢して居るに、ゴオ
ーツと云ふ恐ろしい音がして、強さうな風が吹いて來た
から、手を放すと巧くブウ／＼飛んだ。暫くの間はフワ



くフワく、宙を彷徨つて居た様だつたが、私の狙ひが宜かつたと思へて、丁度私の家の門の前へ、ズドンと二人共降つて来たから、これで初めて二人共、無事に地球へ歸る事が出来た。これが第二回の月世界見物です。それから暫は私もつかれて、一週間ばかり寝て居ましたが、何しろ面白かつたから、もう一度何處かへ行つて見たいと思つて、頻りに旅行の本杯を讀み、中にも冒険の紀行などを讀んで見ると、火山見物の紀行が有つた。地中海のシ、リヤと云ふ島に、エトナ山と云ふ火山があつて、その火を噴く處が、大變奇妙であること云ふことだ



から、是へ一行つて見やうと、今度は私一人で出掛け、まづ、伊太利の本州を越えて、シ、リヤ島へ渡つて、エトナ山へ段々登つて見ると、成程世界で名高き火山だけあつて、頂上から火が噴出して居る、夫が亦如何にも綺麗、實に壯快言ふ許りなく、見て居ても面白くつて堪らなくなつた、是はごうも面白い。此處でさへかうだから、中へ這入つたら尙ほ面白からうと思つて、私も亂暴だ、突然飛込んで仕舞つた。ところが何うも熱いの熱くないの。眉毛も燃へる髪の毛も焦げる。熱くつてく堪らないのを、一生懸命我慢して飛降りて見ると、やがて



ドンと止つた。止ると思ふと暫くは夢中であつた。もう
此時は私の全身が、まるで火傷をして爛れて居る。スル
ト微かにワヤ／＼と云ふ聲が聴えて、臆て側へ来てドン
と背中を打つ者がある。見るに鬼見たやうな恐ろしい奴
が、又ツと立つて居るから、

「一體お前さんは何です？」

と、聞くに、

「乃公は火の神だ。」

「火の神？ シテ見るに此處は何處なのです？」

「此處は地獄だ。お前は又何處から來た？」

「私はエトナの火山の口から飛込んで來ました。」

「酷い奴もあればあるものだな。併し折角來たものだから、

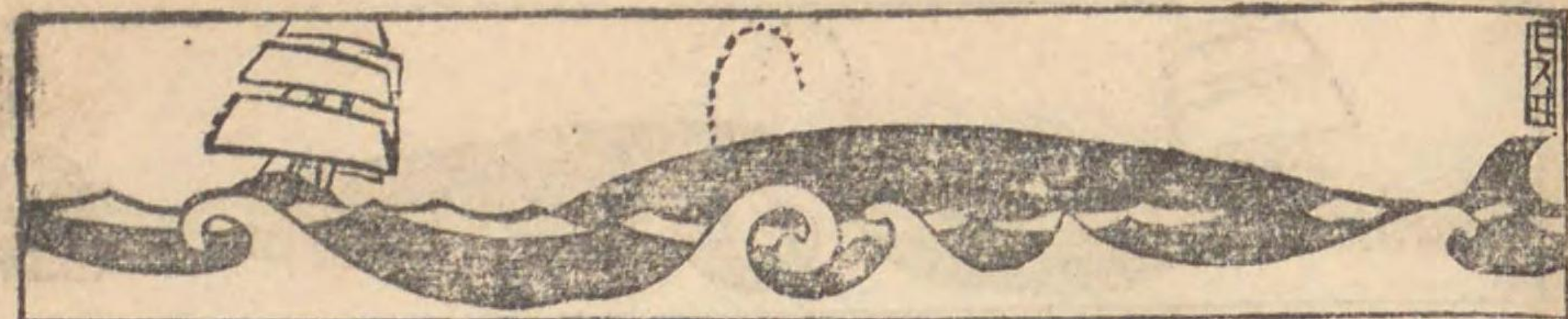
まあ此方へ來い。」

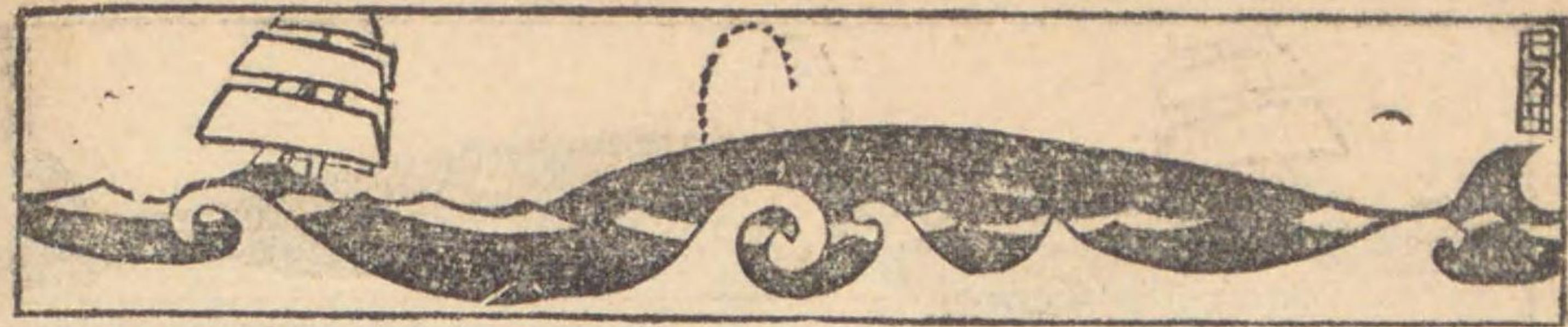
「モウ動けません。身體中が此通り爛れて居ますから。」

「そんなことは案じるに及ばん。乃公の所へ來れば直癒して遣る。歩行なければ乃公に負さつて行くが宜い。」

と、云ふので、其鬼に負さつて、火の神の家へ行くに、

ちやんと火傷の薬がある。黒い膏薬見たやうなもので、それを身體中へ塗つて呉れるに、直ぐまた癒つて仕舞つたが、旅をして來たので、如何にもお腹が減いて堪ない





から、

「何か食さして下さい！」

「それなら此方へ来い。」

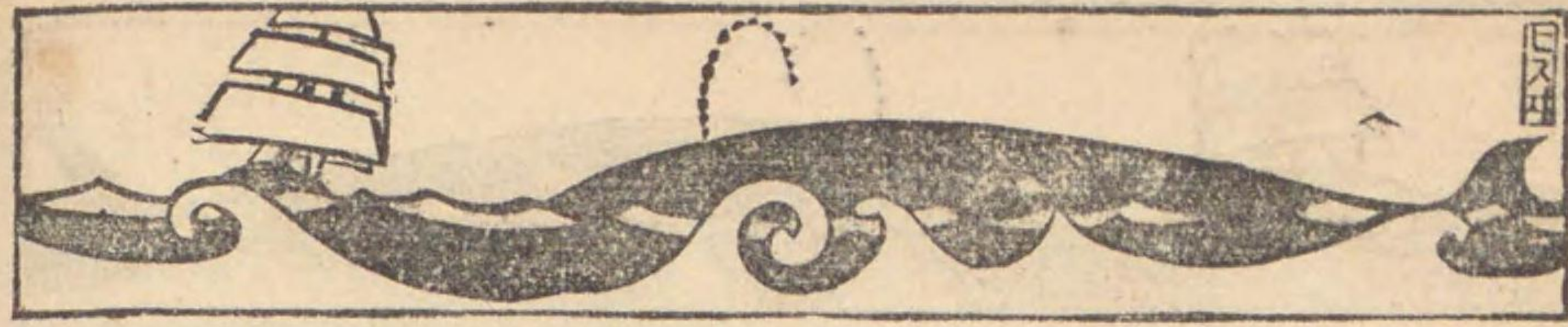
丁度御飯時分でしたから、其まゝ座敷へ通されて、テーブルの前へ坐ると、色々の御馳走が出て来た。火の神の奥さんも其處へ来て、これから三人で御飯が始まる。何が出て来るかと思ふと、一番先きにツツプが出て来たが、ボウ／＼と青い火が燃えて居る。ビフテキも眞赤だ。カツレツ杯はヂイ／＼油が泡立つて居る。御酒を一杯と云つて出したのを見るに、これは石炭油。何うも手が付



けられないから、是れは食べられませんか、云ふと、まあ食べて見ろ、美味いからと云ふので、思ひ切つて食べて見るに、成程美味い。實に妙なもので、火山の中へ這入て居ると、こんな火の物でも平気で食べられる。で、ムシヤ／＼とそれを食つて、石炭油の酒を飲んで、宜い心持に酔つて来た。火の神もナカ／＼快活な人で、世間話をしながら、

「此頃は娑婆には、何か面白い話があるか？」

「イエ別にありませんが、先づペストの流行る位なものです。」



「それはさぞ騒ぎだらう。何かまだ珍しい事は無いか？」
 こ、言ふから、

「おくさうく。貴公に御話申さうと思ふここがござい
 ます。此間繪の共進會へ行きまして、色々繪がございま
 した。中に誰れでしたか、貴公の像を畫いてありました
 よ。」

「さうかい。ひどい奴があるな。して乃公によく似て居
 たか？」

「顔杯はナカく、能く似て居りましたが、何うも足の踏
 張り方から、手付き杯も變でした。着物もまるでうそが



書いてありました。あれちやア折角の火の神様も、から
 三文の價値も御在ません。」

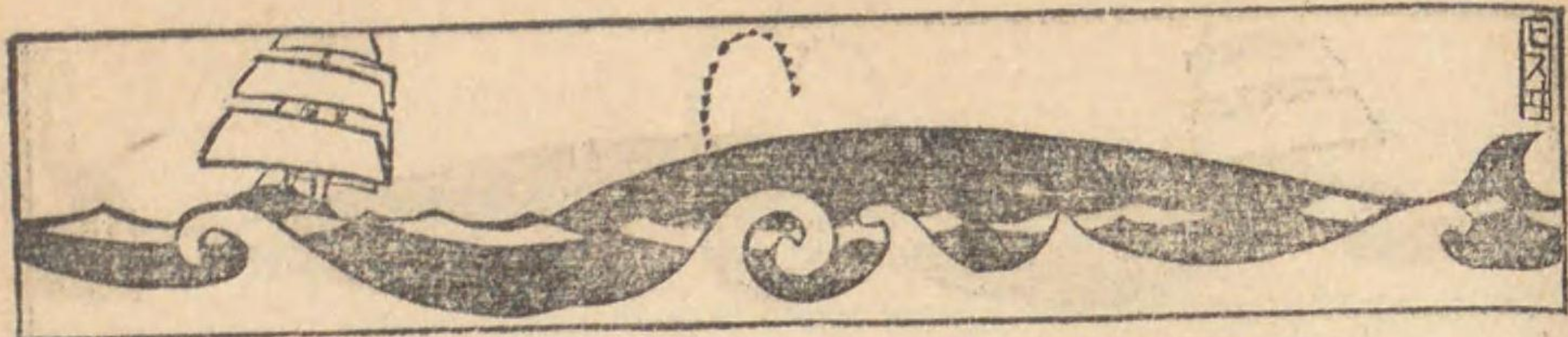
こ、迂濶悪口を言ふこ、火の神先生火のやうになつて怒
 つた。尤も火の神だから、火の様になるのは當然だが、

「此奴怪しからん奴だ。折角御馳走をしてやるのに、勝
 手な悪口をぬかしをる。さう云ふ不届な奴は、乃公の所
 へ置くことは出来んから、さつさこ娑婆へ歸つてしまへ。」

こ、火の神も一杯機嫌だから、いきなり襟頭を引つかん
 で、ぐつと私を釣下げながら、庭の大きな井戸の側へ來
 て、やツと云つて抛り込んだ。抛り込まれたと思ふこも



う夢中。暫くは何も知らなかつたが、其中に急に身體が寒くなつて、ゾク／＼冷くてたまらないから、驚いて眼を覺して見ると、確に今までは火山の中に居たのが、今度は冷い水の中に居る。はてなと手を伸して見ると、コツンと觸るものがある。此方を見るに氷の塊だ。ハテ變だと思つて能く／＼見ると、彼方の方も氷の山。此方の方も氷の山。ハ、ア是は了解つた。さつき伊太利のシ、リヤで抛り込まれたから、あの儘地の底を通り越して、南氷洋へ出て來たのだな。して見ると地球と云ふものは、矢張團圓なものに違ひない。しかしこんな水の中に居て



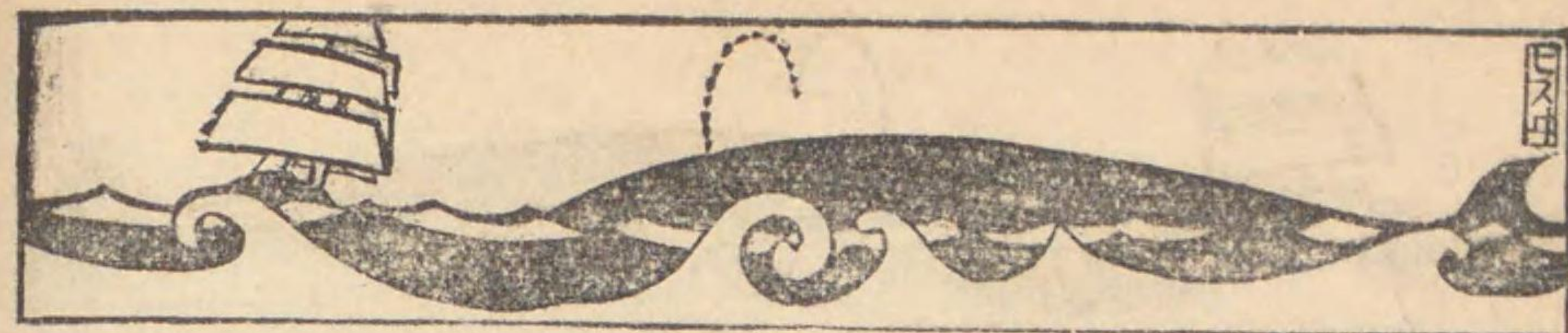
は、如何にも寒くつて仕方がないから、氷の上へ這ひ上つて、ホツ／＼一息吐いて、着物杯を擽つて居ると、向ふの方から船が來るやうだ。臆て側へ來たのを見るとき、大きな蒸氣船だ。此方はハンケチを振つて救を呼ぶ。先方も氣が付いて端艇を降して、

「全體お前は何うしたのだ？」

と、聞くから、

「地中海から此處へ來たのだ、何でも宜いから助けて呉れ！」

「そんならマア此方へ上れ！」

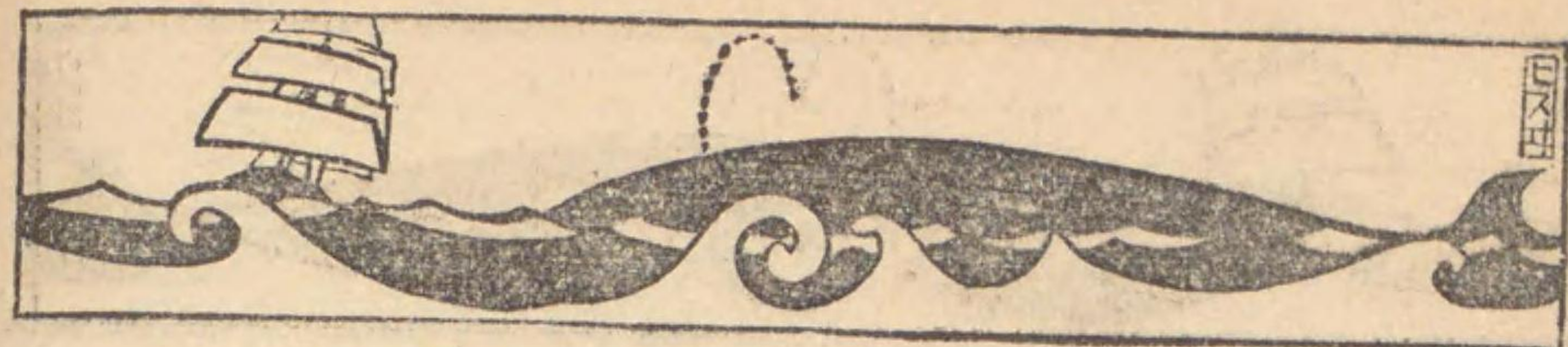


こ、云ふので、やつこ此船に助けられて、段々様子を見るこ、世間には物好きの奴が居るもので、是は和蘭から南氷洋へ探険に來た船だこ云ふ。それは宜い所へ來た。私もさう云ふ冒険好きなのだから、何うか一緒に乗せて下さいと頼んで、其仲間へ這入つて、今までの話杯を聽かせたら、案の定大喝采だつた。

其中に、ドン／＼と南氷洋の氷の中を往くこ、或日のここで、大變船の進みが悪くなつて、思ふやうに速力が出て來ない。變だと思つて其處等を見るこ、海が何時の間にか眞白になつた。まるで硫黄の湯へ這入つたやう。



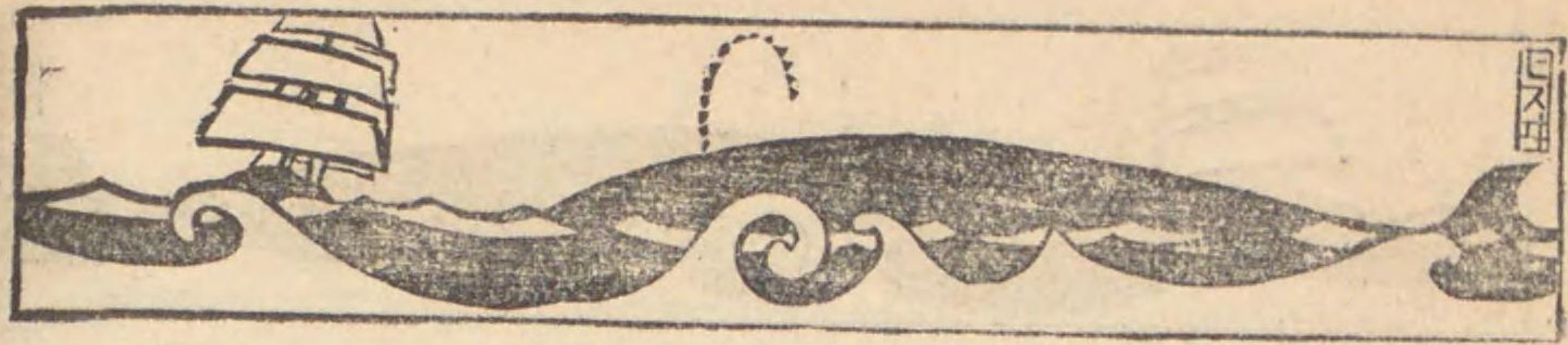
しかも何だか變な臭がするから、試しに汲んで見やうこ、或水夫が酌瓶を卸して、海の水を汲んで見るこ、斯は如何に、其水は牛の乳で、飲んで見るこナカ／＼美味い。臭い筈だ牛乳の海。それから又先へ行くこ、遙に黄い島が見えた。何しろをかきな處だから、早く行つて見やうこ、其處へ來て皆上らうこするこ、スル／＼滑つて上れない。所が同船の仲間、バタの大嫌ひな者が居たが、此奴が急に鼻を押へて、臭い／＼と言つて居るから、
「何うした／＼？」
「バタの臭がして堪らない。」



「何だバタの臭ひ……シテ見るこバタか知らぬ。」
こ、今度は土を取つて見るこ、成程これはみんなバタだ。
乳の海からバタ島へ来たのだ。それから段々奥へ行つて
見るこ、この島の人間が、また餘程變つて居る。三本足
で手が一本、何の事は無い化け物だ。けれども、う月の
世界で、不思議な人間には逢ひつけて居たから、さまで私
は驚かない。兎も角もバタ島を探險しやうと思つて見る
こ、河が五つ六つ流れて居る。これは皆牛乳の河だ。そ
れからまた向ふの方にも島がある。又其島の方へ渡つて
見るこ、此處には大變大きな鳥の巢があつた。其處を覗



いて見るこ、二階か三階もあらうと思ふやうな、大きな
巢で、中には途方もない大卵が五百個許りあつた。何の
鳥だか分らないから、一つ割つて見てやらうと思つて、
石で以てコツ／＼叩いたが、なか／＼割れない。カン／＼
と云ふ音がする。漸う／＼のここで打ち割つて、中から
出た奴を見るこ、鳥を二十羽も一ツにしたやうな、恐ろし
く大きな雛子だ。是は面白い、全體何と云ふ鳥だらうこ、
思つて居る中に、空が急に暗黒なつて、ゴオーと云ふ音
がするから、見るこ、恐しく大きな親鳥で。今まで何處
で見居たか、卵を打ち壊されたのを知つて、腹を立つ



てやつて来た。是は大變だと思つて、私達は一目散に逃げたが、仲間の一人は可哀想に、トウ／＼其鳥に喙れてしまつた。

其間に私共はバタ島の方へ来て、是は大變だ、迂濶斯んな處にも居られないと思つて居るこ、急に、

「助けて呉れ助けて呉れ！」

こ、云ふ聲がする。見るこ向ふの森の木の上に、三本足の人間が二人、逆さに縛られて釣り下げられて居る。

「一體お前達は何うしたのだ？」

こ、聞くこ、

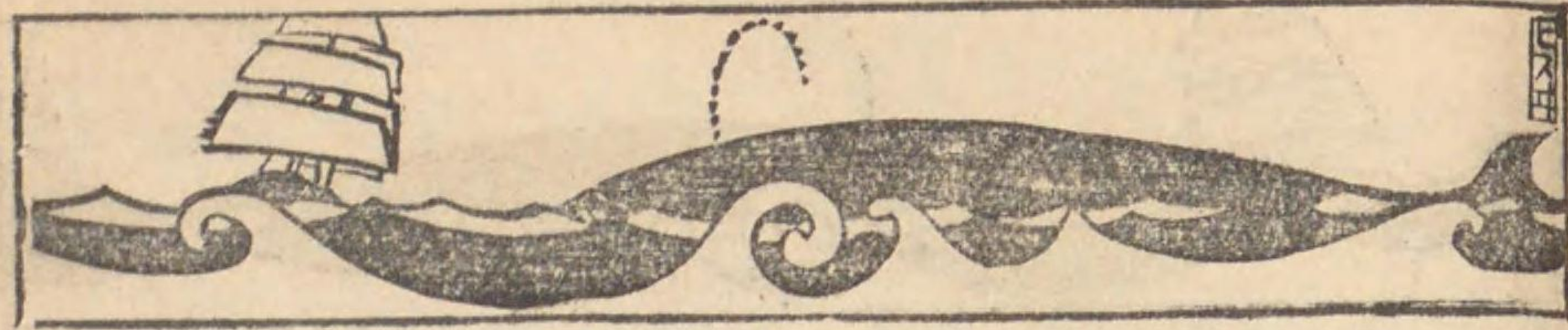
「此國は一體正直な國で、誰れも嘘を吐いた者が無い。

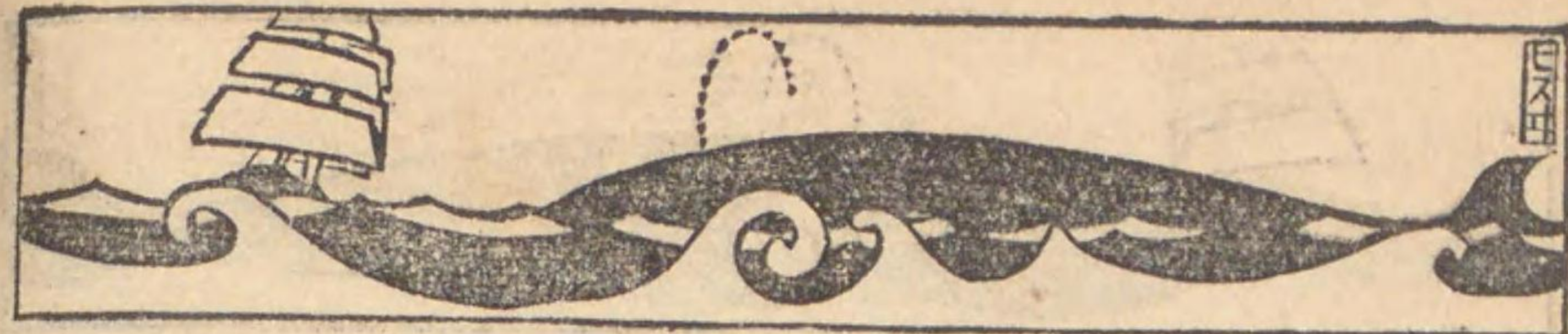
で、少しでも嘘を吐くこ、みんなかう云ふ目に遇ふので、私も止せば宜かつたが、旅の話に虚飾を附けて言つたものだから、斯う云ふ目に遇つてるんです。」

こ、云ふから、

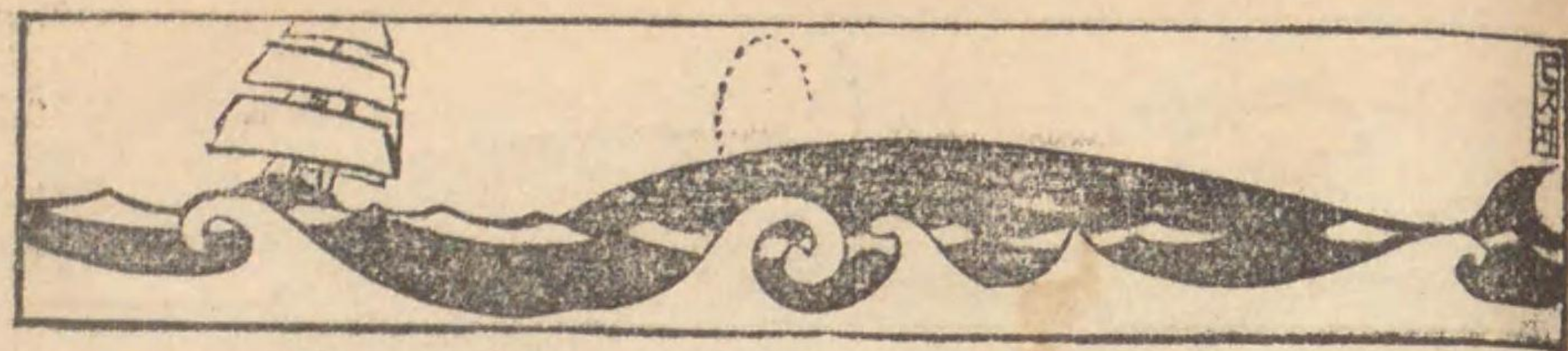
「それは宜くない。嘘を吐くこ云ふは極く悪いことだ。

旅の話で嘘を吐くこ云ふがあるものか。是から氣を注いだが宜からうこ言つて、二人共助けて遣つた。助けては遣つたが、何うも何だか氣味が悪く成つて来て堪らないから、急いで船へ逃げて来た。船へみんな乗り込むでし

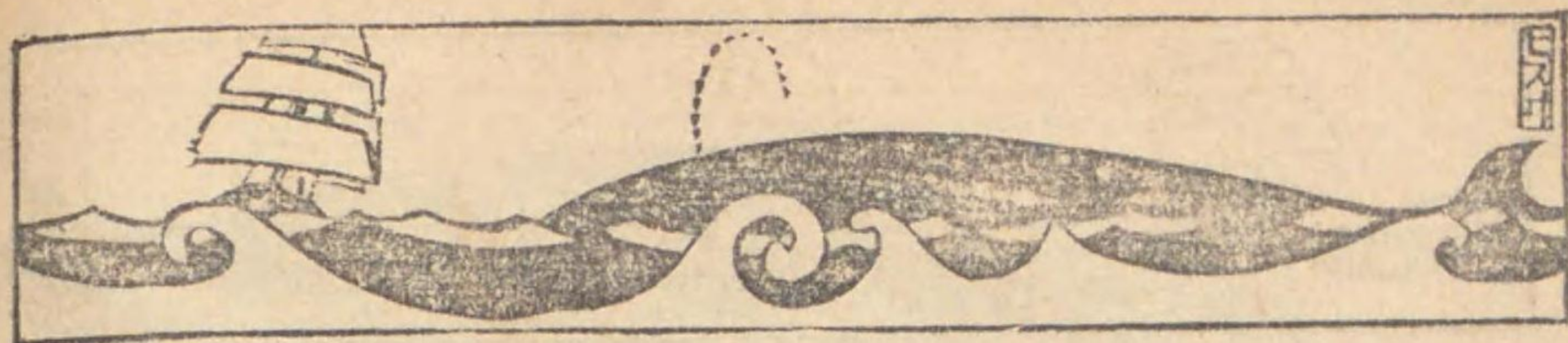




まふご、岸の木が此方へお辭儀をして居る。木でさへあの通りお辭儀をするから、吾々もバタを取つたり色々のここをしたから、お禮を云はなければならぬご、此方でも帽子を振るご、先方でも枝を振つて居る。それから海へ出て来たが、是は多分太平洋だつたらう。其海へ來るご、彼方から大な黒い山が浮いて來た。何だらう、妙なものだと思つて、段々側へ來て見るご、これは山ではなくて、恐ろしい大な鯨が、汐を吹きながら此方へやつて來る。實に非常な大鯨で、頭は見えるが、尾の方は霞んで見えない。これはたまらぬ、早く逃げろ



と言つたけれども、ナカ〜ごうして追付かない。其中にゴオーと云ふ聲と共に、船は一口に飲込まれて、其儘鯨の咽喉へグツと這入つてしまつた。這入つて見るご、思つたより氣樂なもので、其胃袋へ這入つて見るご、私共の船ばかりぢやアない。前に飲まれて居る船が、彼方にも此方にも、丁度港に着いたやうにあつて、中には餘程前に吞まれたと見えて、半分腐つて居る船もある。又這入りたて、吞まれたたてのものもある。而も其中は風も浪も無いから、却て眞に無難だ。唯變な生臭い、蒸熱い空氣があるので、いやな心持がする。又日に二度か三度宛、



満潮と干潮がある。是は鯨が水を飲むときに違ひない。ツウ—ツと潮がさして来たと思ふと、ツウ—ツと又干て行く。其度に大きな魚が飛込んで来るから、そいつを取つて食物にするのだ。

するに或日のここで、丁度干潮の時に、船にばかり居ても退屈だから、少し散歩をして見やうと思つて、船を出て砂原へ来た。砂原とは臓腑の上で。臓腑の上を靴を穿いて、洋杖を突いて歩いて居ると、向ふに人間が五六人で、何か頻りに話をし居るから、其處へ行つて、「全體何をして居るんだ？」

ご、聞くご、

「お前さんも此處へ飲まれて来たのですか？」

「如何にも。飲まれて来た。」

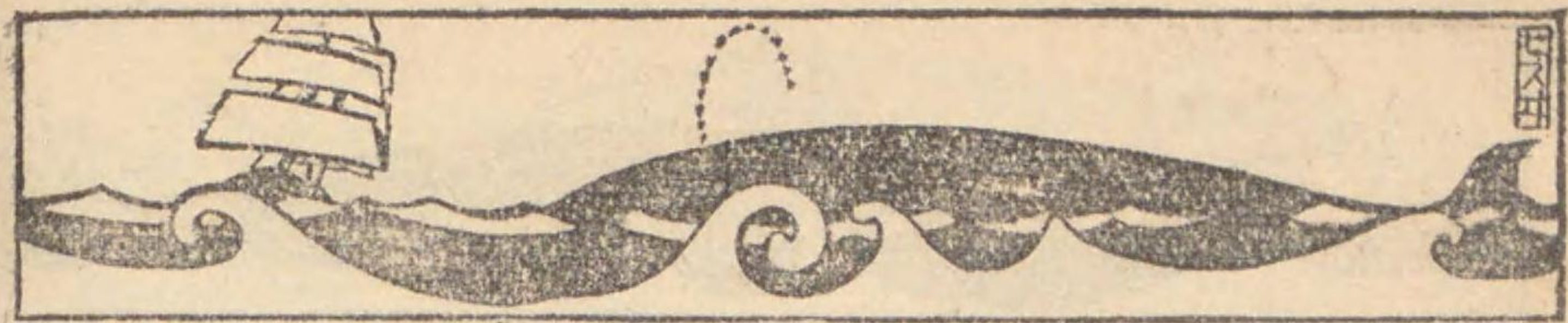
「何うも御苦勞様で、實は今相談をして居る處です。」

「何う云う相談をしてるんです？」

「其相談は他でも無い。今にお互に消化れてしまつて、鯨のお尻から出るやうになつては大變だから、早く此處を出る工夫はないかと、今考へて居るんです。」

「成程それは道理だ。それぢやア早く出やう〜。」

「何うしたら出られやうか、皆相談をして居りますが、



何か好い智慧はありますまいか。

「それは譯はない。何しろ先方が大きいから始末が宜い。

何でも今度鯨が欠伸でもした時に、うまく狙つて居て、

咽喉の所へ棒を立て、やらう。さうすれば塞がらないか

ら、其間から出やうぢやないか。だが唯の棒では往かな

いから、此處にあるだけの船の帆柱を、皆つないで咽喉

の所へ立てるのだ。」

と、相談が一決して、皆支度に取り掛つた。けれごも何

しろ胃袋の中で、時々水が這入て来るから、其時には船

へ逃げ込む。それから水が退いた後で、又臍の上で仕



事を始める。斯して三日ばかりかゝつて、長い棒が出来

上つたから、それを大勢で擔いで、咽喉の所へ持つて来て、

今に欠伸をするだらうと思つて居るこ、鯨も退屈だと思

えて、臍で大きな口を明いたから、めめたこ云ふんで、

其處へウーンと押立てた。さア是で宜い。今に満潮の時

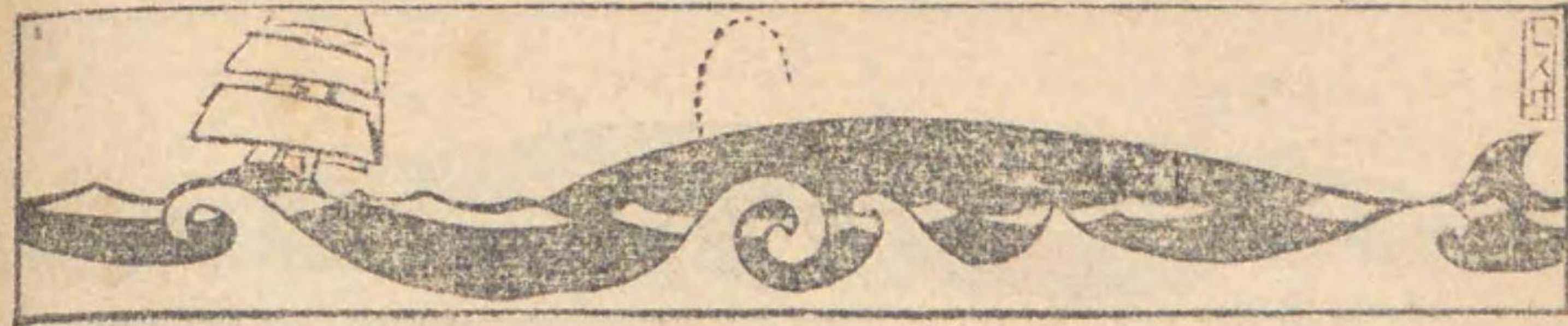
が來たら出やうと云ふので、皆船へ乗つて待ち構へて居

るこ、案の定其夕方満潮になつて、ドウ／＼ツと潮が這

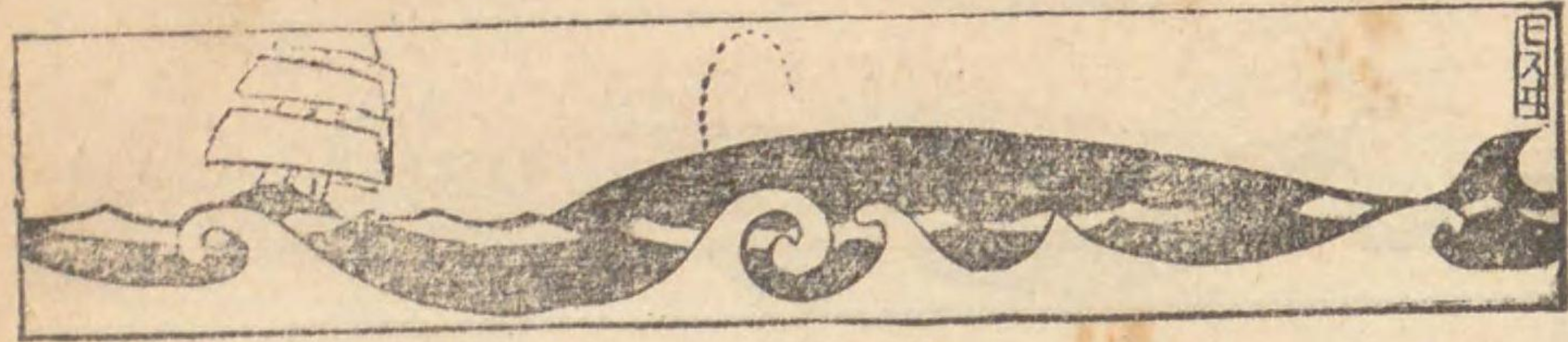
入つて來たから、サア此處だこ云ふので、桿を持つて待

つて居るこ、其潮が出る時に、サア進め。へビー、ゴウ

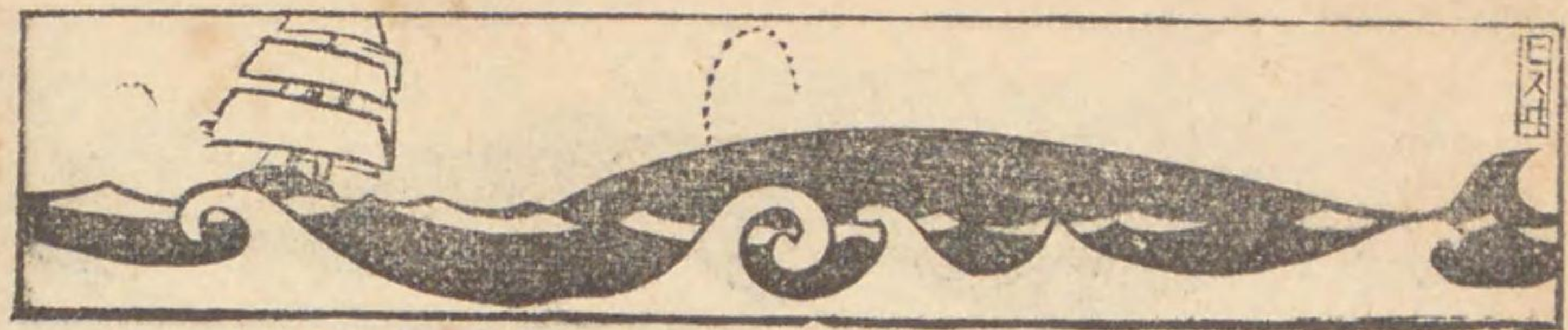
と云ふので、一生懸命に漕いだ所が、なんば大きな咽喉で



も、斯んなに船が幾つもあつて、其大きな船が一時に出
やうと云ふんだから、咽喉に悶へてガサ／＼する。ワア
／＼云つて騒ぐけれども、皆出ることも入る事も出来な
い。鯨の方でも苦しいと見えて、頻りにガア／＼言つて
ゐたが、其中にコン／＼と、咳を初めたから溜らない。
中にあつた二十艘ばかりの船が、一時に飛び出した。す
る／＼又その途端に、運の悪い奴は齒に打當つた。岩の様
に出て居る前齒に突き當つたのだから、ごんな船でも
たまらない、みんな滅茶々々になつてしまつた。中には
又齒に挾つて、楊枝でも持つて來なければ動けない奴



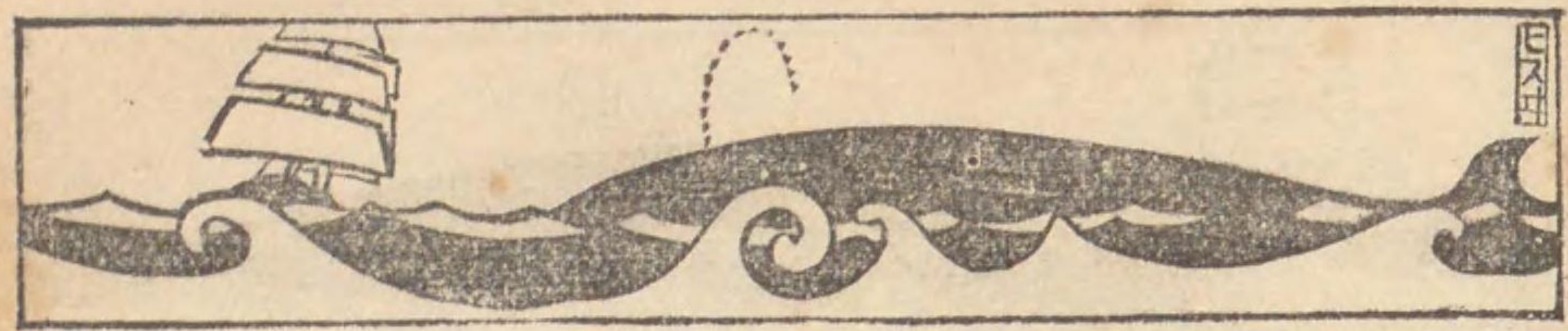
がある。其處へ行く運の好いのは私共の船で、うまく
浪に乗つて出て仕舞つたが、鯨も此騒ぎには驚いたと見
えて、波の底へ潜つて仕舞つたから、ヤレ嬉しやと、此方
も一ト息ついて、それから近邊を見廻して見る／＼、不思
議なことがある。慥に太平洋で飲まれたに違ひないのが、
今度は周圍に陸が見える。全體何と云ふ處だ。妙な所だ
と思つて、色々調べて見る／＼、皆さんも御承知の、魯西
亞と亞細亞の間にある、裏海と云ふ海へ出たのだ。あの
海は周圍が國でこり圍まれて居る。シテ見る／＼此の魚は、
ナカ／＼自由自在なもので、不思議にも地底旅行をやつ



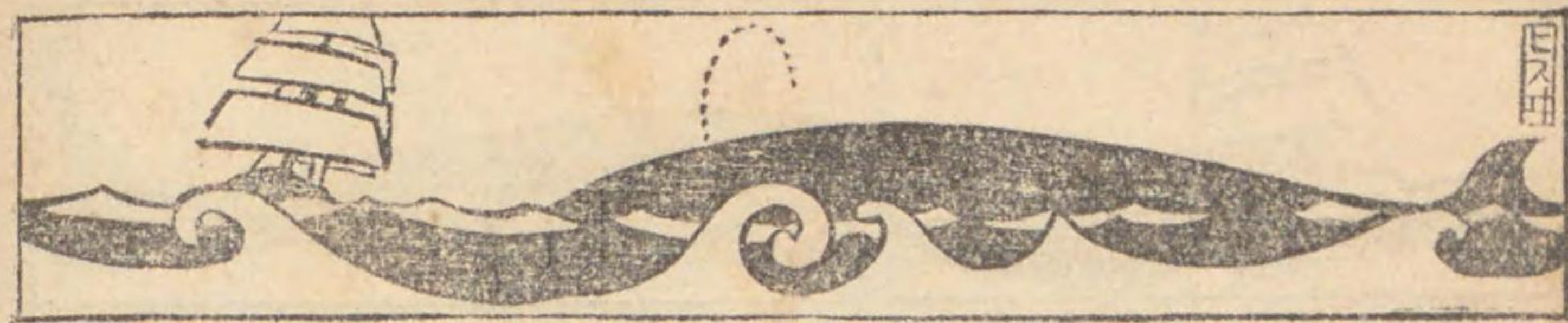
て、太平洋から亞細亞の下を潜つて、うまく此處へ出て
來たのだ。

夫から私も、モウこれで澤山、月の世界へも行くし、
火山の中へも行くし、それから南氷洋へも行つて見るし、
魚の腹の中で地底旅行もしたから、もうこれで、暫は斯
んな危いことは廢さうと思つて、それからすぐに上陸つ
て、當分魯西亞に居ることになつた。

處で又私は獵好きで、始終銃獵期になつて來れば、銃
砲を持つた山に出掛ける。其度に又私は、大變好い獵犬
を連れて行くので。その犬さへ連れて往けば、ごんな鳥



でも獸類でも、屹度捕獵ない事は無いと云ふ、古今無双
の良犬だつたが、あまりその犬が良いので、さうく他
の獵師に嫉まれ、私の知らない中に毒を飲まされたと見
えて、可哀想に死んで仕舞つた。で、あまり可哀想だか
ら、直ぐ其犬の皮を剥いで、その犬の皮でもつて、私は
チヨツキを一枚拵へ、その犬の遺品だと思つて、始終其
チヨツキを着て、狩に出掛けるやうにして居た。するこ
又其チヨツキが不思議だ。彼方から鳥が來るので、私が
狙つて撃たうとすると、その中にもうチヨツキの鈕が、自
然に飛んで往つて、ズドンと鳥を撃つてしまふ。嘘だこ



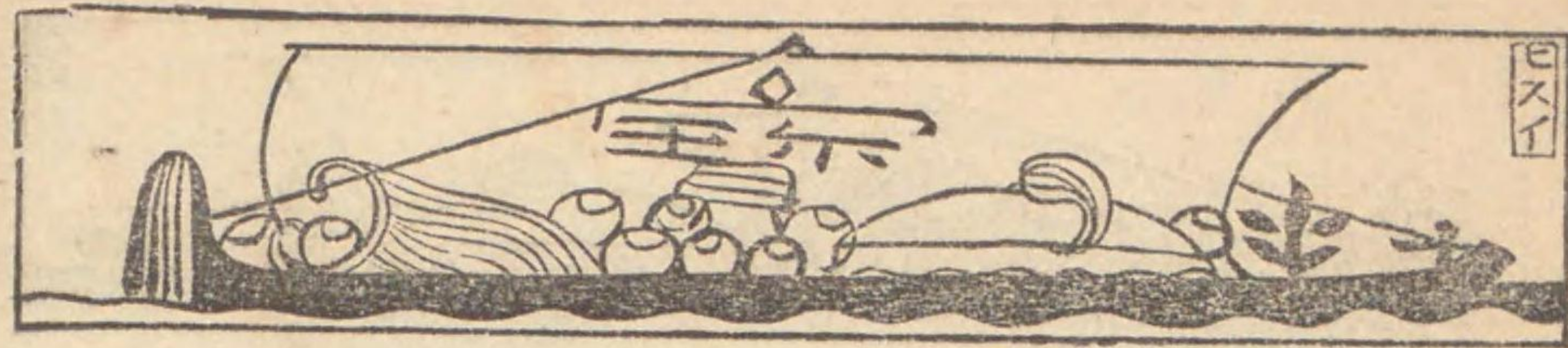
思ふなら私の家へ来て御覽なさい。其證據には、チヨツ
 キの鈕が三つなくなつて居る。いや又私も狩へ往かうと
 思へば、鈕をちやんと附けて置かなければならんから……
 ……今日はこれで失敬しやう。諸君さやうなら。

(口演筆記)

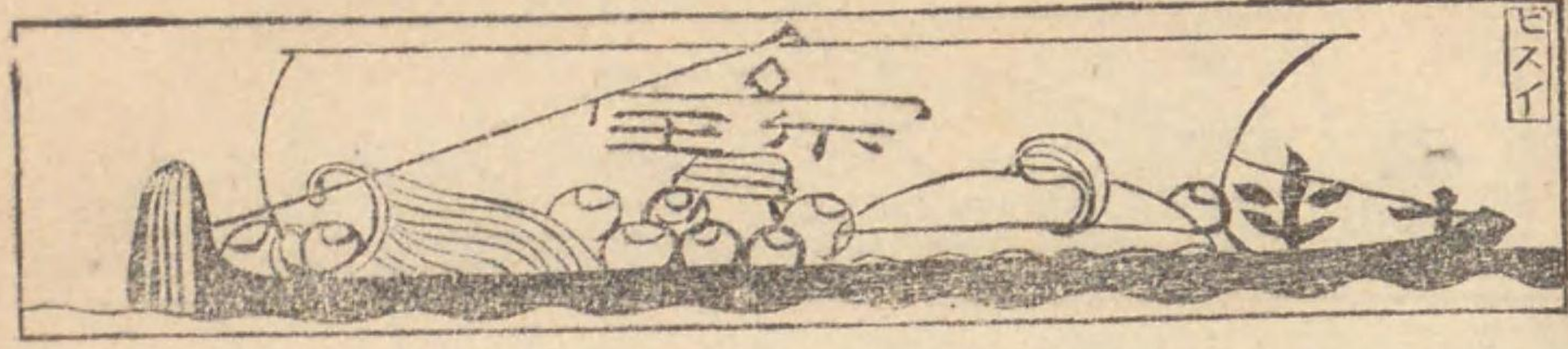


第八 由良太郎

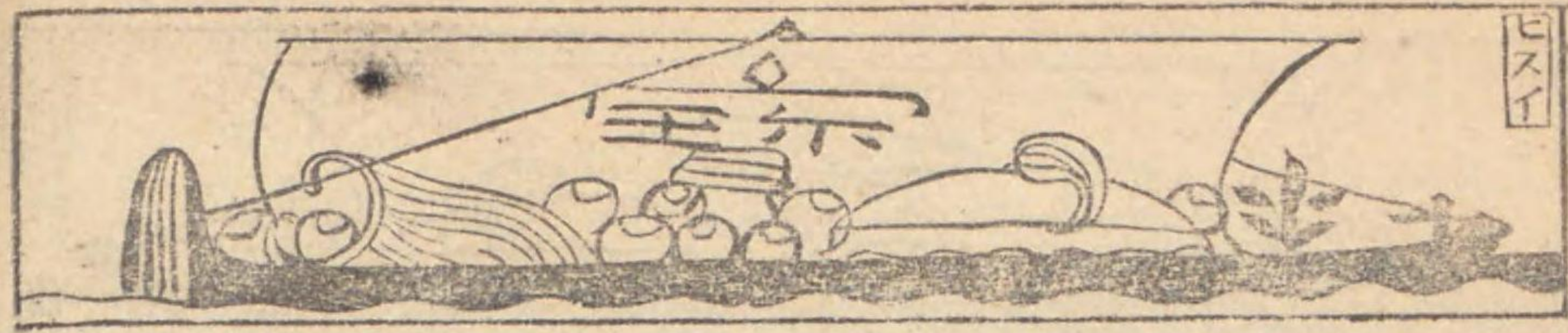
むかし〜或る田舎に、富有の百姓が住で居ました。
 夫婦の間に只一人の男子を設けて、これを由良太郎と名
 付け、掌中の珠と愛で慈み、何卒この子を善く育てあげ
 て、増々家を榮へさせやうと、そののみ樂しみにして居
 ましたが、此由良太郎、追々成人するにつれて、尋常の
 小供よりは遙に肥太り、力は大人もかなはない位になり
 ました。其代り又物を喰ふことは、實にすばらしい勢で、
 毎日近所の子供をあつめては、自分がその餓鬼大將にな



つて、野山をかけ廻つた揚句、家へ歸つて飯を喰ふ時は
三升焚の大釜を、ペロリと虚にする位ですから、家内の
者は呆れかへつて、此子は人間の種ではあるまい、後
は如何なる事を仕出來して、親の面を汚さうも知れぬ。
さりごと大の強情者ゆゑ、口で如何ほご云聞かせても、
それを聞き分ける事はあるまいから、いつそ暫時家を追
出し、ちご世間の辛酸を見せたら、少しは直る事もあら
うご、夫婦は相談の上、或時由良太郎を呼付けて、今から
勘當申付るご、心を鬼にして云ひました。
流石の由良太郎も、此時は暫時無言で居ましたが、元よ



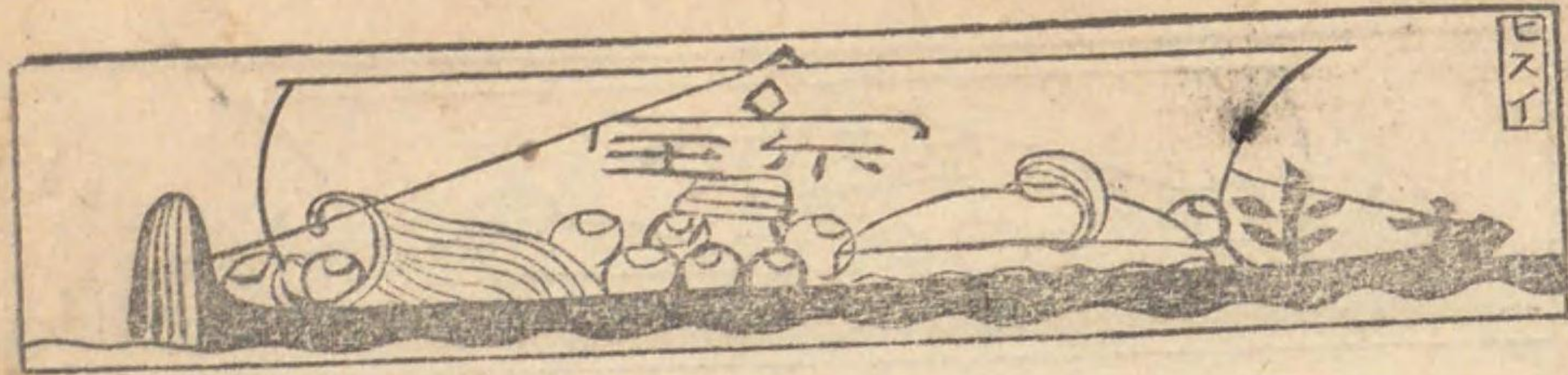
り負けぬ氣の子供ですから。
「さう云ふごなら家を出も致しますが、それに付いて
は、一つお願いがございます。」
ご云ふご、父も點頭いて、
「お願いごはなんだ？ 斯云ふ時の事だから、大底なら聞
いてやらう。」
「他の事ではございせんが、お父さんの大切に居
らつしやる、あの刀を下さいまし！」
「あの刀か……あれは家重代の寶で、貴様が大きく成たら遣
らうご思つて居たんだが、望みごあらば今遣らう。」



「それは誠に難有うございます。あの刀さへ戴けば、他に何も入りはしません。……それでは父上、母上、行つて参ります。随分共に御機嫌よう。」

「由良太郎は寶刀を父からもらつて、其儘家を出てしまひました。」

さてそれからは、何處を的も定めず、足にまかせて歩いて行きましたが、やがてある村に出ました。此時由良太郎の考へますに、今かうして親の家を出た上は、明日から誰も飯を喰はして呉れる者はない。と云つて乞焉をするもいやだ。それには、何處か此邊でよい主人を見



つけて、奉公するが一番だ、と、其處等の家をあれかこれかこ見て行く中に、やがて庄屋らしい家を見付けました。

「よし此家が丁度好い」

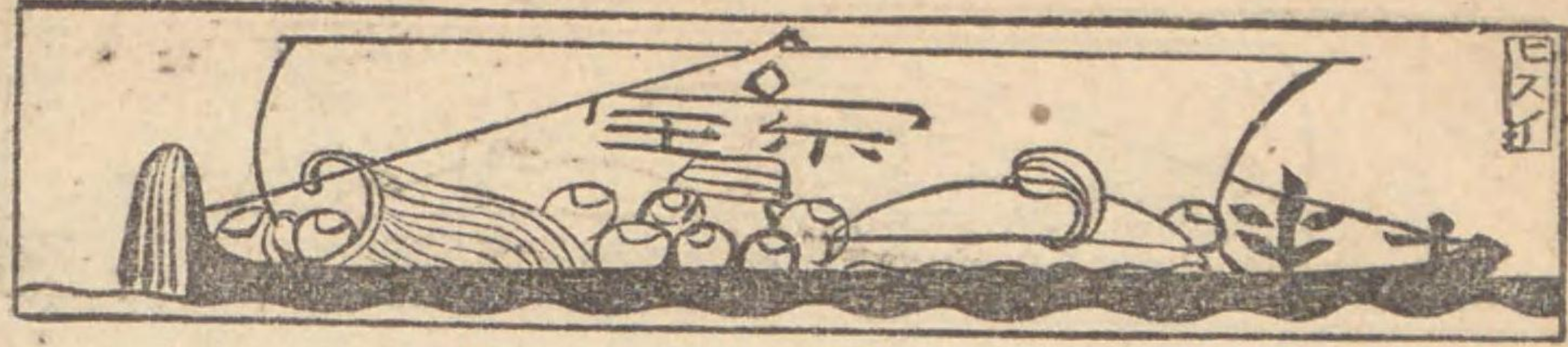
と、勝手口からズツこ入つて、叮嚀に。

「お頼み申します！」

「ごうれ！」

と、案内につれて出て來たのは、六十ばかりの老爺でした。由良太郎はまづ一禮して、

「さて私は、お願があつて参りましたが、なんぞ私を丁



稚ちに使つかて下くださいませんか！ごんな御用ごようでも致いたしますから

……

「何かなにご思おもつたら、御奉公ごほうこうを願ねがひに來きたのか。さう云いふ
ことなら取次とりついでもやらうが、自家うちの旦那だんなは吝嗇けちだか
ら、給金きよきん出だしてか、へやしねエよ、折角せつかくだがまア無駄むだだ
な。」

「イエ私わたしは給金きよきんも何も入いりはしません。只食ただくふ物ものさへ喰く
はして下くだされば、いくらでも働はたらきます。」

「ナニ給金きよきんは入いらねえ？そんなら旦那だんなも喜よろこぶでか、へるだ
らうよ。實じつは今入手いまひでが無なくつて困こまる處ところだから……。少すこし待ま

ちなさい、行いつて聞きいて見みてやらう。」

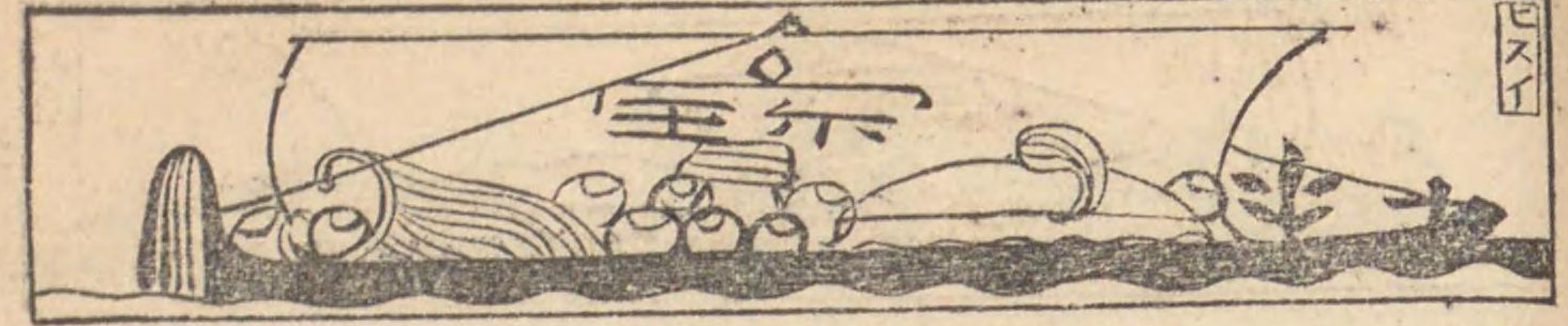
こ、老爺おやじは奥おくへ行いきました、暫時しばらくして又出またでて來きて、

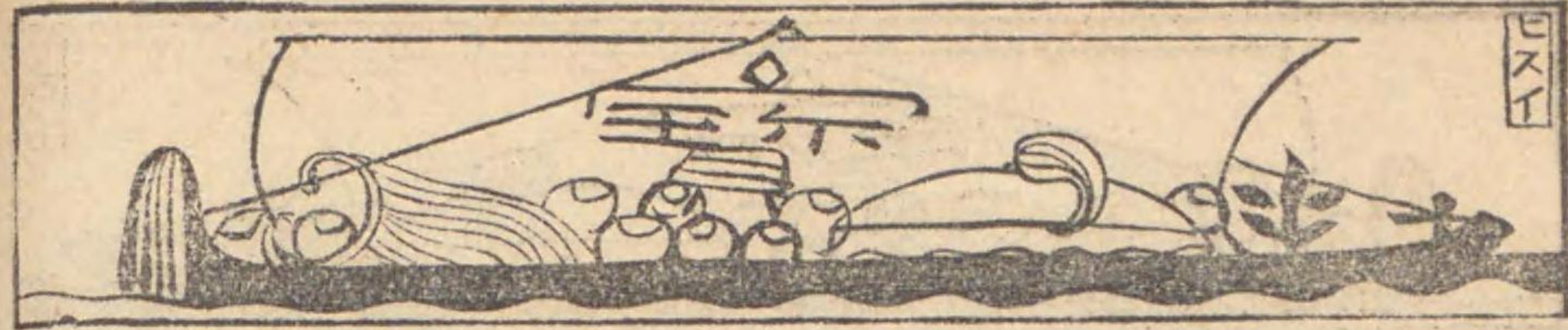
「オイ小僧こぞうさん喜よろこびなさい。旦那だんなに今左様いまさま云いつたら、給きよ
金きんの入いらねエ重寶ちやうほうな奉公人ほうこうにんなら、早速さつそく置おいてやらうと仰おつ
しやつた。そして今一寸逢いまひとひはうと仰おつしやるから、草鞋わらじを
脱ぬいで上あらつしやい！私わしが案内あんないしてやらう。」

「それは實じつに難有ありがたうございます。」

こ、由良太郎ゆらたろうは大きおほきに喜よろこび、やがて老爺おやじに連つれられて、
主人あるじの居間ゐまに來きますと、主人あるじはそれと見みて。

「オ、小僧こぞう。お前まへかい、今給金いまきよきんなしで奉公ほうこうしやうと云いつ





たのは？」

「へい左様で……何分宜敷お願ひ申し舛。」

「そんなら置いてやるが。一體名は何とお云ひだ？」

「由良太郎。」

「由良太郎。善い名だ。そして年は？」

「十歳になります。」

「ナニ十歳だ。大層大きい。十五には確かに見える。」

それで少しは奉公した事があるかネ？」

「イエまだ初めてゞす。けれども力業ならごんなことで

もします。」

「大層力むネ。面白い兒だ。それちや此兒はまだ子供だ

から、家の中で遣ふことにしやう。」

「是から由良太郎は此家に住み込む事になりましたが、

主人も大きに可愛がりました、由良やく、常に手近

く使つて居ました。所が元より大食の由良太郎、此家に

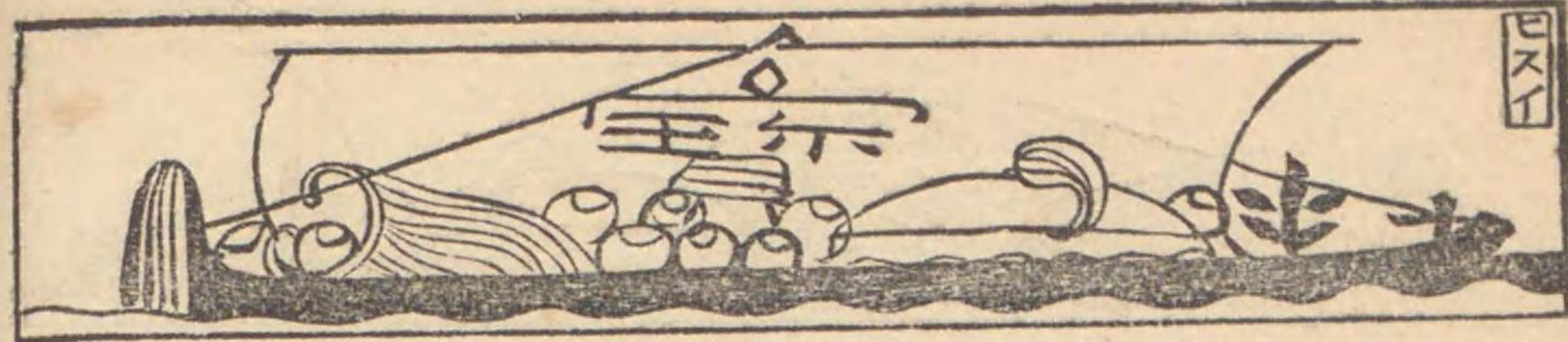
住み込んだ當座こそ、少しは遠慮もして居ましたが、追

々本性を現しましたのを見るとき誰も膽を潰します、或時

下男共が集つて、試しに思ふさま食はせて見ましたら、

大根汁廿六杯に、飯三十杯平げた後、慰斗餅十一枚、

煎豆二舛を虚にして、少しも苦しきうな顔もしませんか



ら、人々愈々呆れ返つて、それより渾名を太食太郎、又は底抜けの由良なご、云ひました。

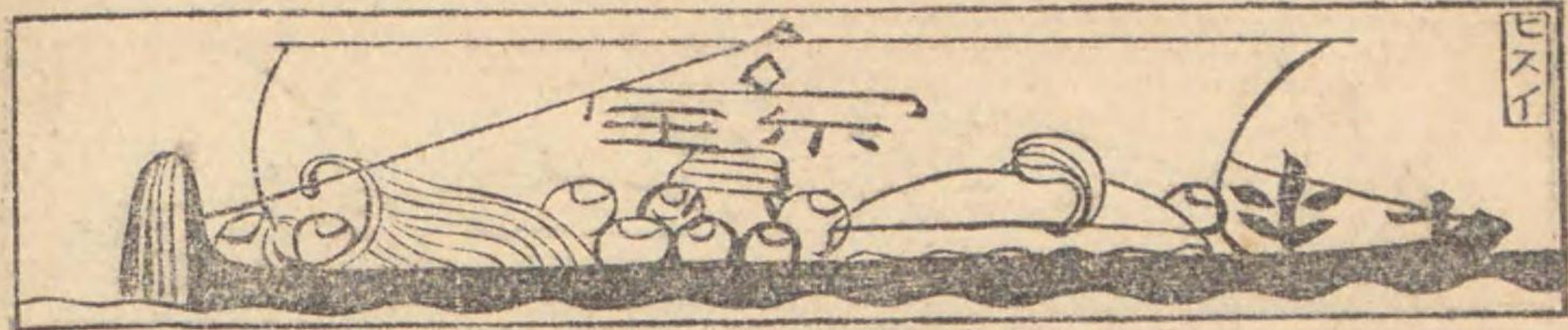
するご、此が主人の耳に入りましたから、主人は忽ち眉を顰め。さても見掛けによらぬ奴ぢや。未だ十歳の小童のくせに、そんな大食をするご云ふのは、飛んでもない横着者めが。縦令ひ給金はやらずごも、さう食はれてたまるものか。ご、大層こぼして居ましたが、今更追出すわけにも行きませんか、今度はこの由良太郎を、誰もいやがる水車場の方へ、番人ごしてやりました。

所がこの水車場の仕事は、今迄ごは異つて、朝から晩まで力業ばかりですから、腹の減るごも多ければ、飯の食ひ方も従て多くなるので、主人は増々持てあましました。

ご、に又、此家から半里ばかり隔つた所に、大きな瀧がありまして、其瀧坪の水車場には、何日の頃から魔物が出て、立ち入る者を取つて食ふご云ふ、評判が高くなりましたから、今は立ち腐れになつて居ります。

それを主人は思ひ出して、これこそ彼を遣るに丁度好いご、或時由良太郎に、俵を澤山持たせて、此瀧坪の水車場へ行つて、今日中に春きあげて来いご云ひつけまし





た。
由良太郎は心得て、やがて米を車に積込み、瀧坪さして
出かけました。

見る瀧坪の水車小屋は、年久しく用ひませんから、
見る影もなく荒れ果て、その上瀧坪は樹陰暗く、只岩
に碎ける水の音、自然にまはる水車の聲ばかりが、さ
も物凄く聞えて居ります。けれども由良太郎は、元より
強い少年ですから、少しも恐ろしいとは思ひません。まづ
車を小屋の前において、入口の戸をあけやうとしますの
に、何うしたものが容易に開きません。これは妙だ、又

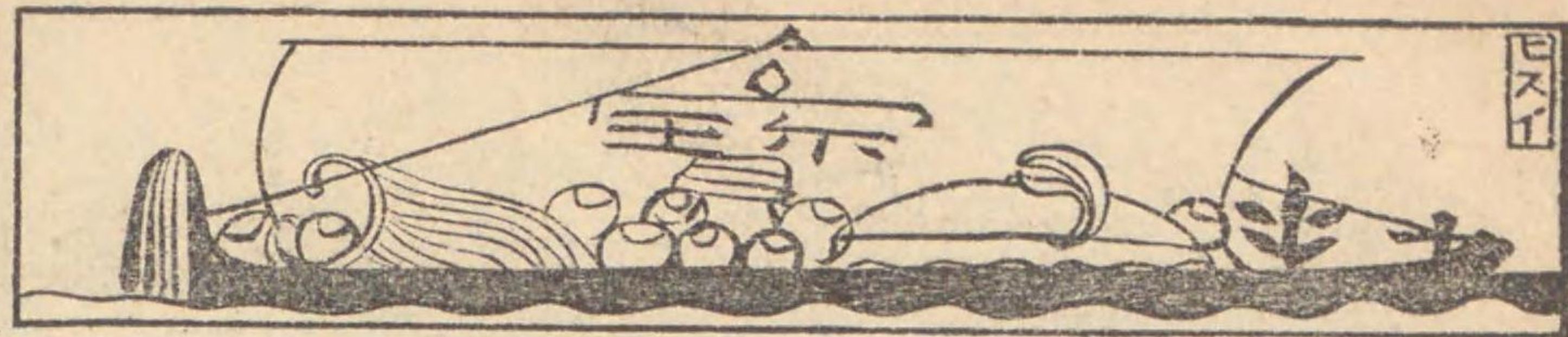
力を入れて、ウンと一つこちますと、忽ち後に聲がし
て。

「ヤイ小僧、其處開けて何をする？」

と、大音に叱る者があります。由良太郎は驚いて、後を
ふり向きみますと、こは如何に、身の丈七尺餘り、髪は椶櫚
箒木の如く、額に生瓜の様な角を生して、手に太い鐵棒
を突いた、恐ろしい鬼が二匹、又ツと現はれて來ました
が、鋭い牙をむき出しながら、

「一體貴様は何處の小僧だ？まだ乳臭い小童子の癖に、
吾達の棲居へやつて來るとは、命知らずの向ふ見ずめ！」





「こ、一匹が云へば、又一匹が、

「大方何も知らずに來のだナ。そんなら喰ふのも可哀さ

うだが、此處は一體鬼の棲居で、人間の來るべき處ぢや

ないから、さつさと歸れ！グヅ／＼して居るこ、頭から

鹽だぞヨ」

「けれど由良太郎は物ごもしません。

「それぢやア此處は鬼の棲居か。こいつは面白い。さう

聞いたらなほ歸るのが嫌に成つた。」

「此奴生意氣なことをぬかすな。今一度云つて見ろ、此

鐵棒を御見舞申すぞ。」

「貴様こそ生意氣な、鬼の癖に人間に向つて。……サア喰

はれるなら何處からでも喰付いて來い。此由良太郎の躰

には、鬼の齒なんぞ立つものか。人が米を舂きに來たの

に、それを邪魔立する奴等は、片端からひねり潰して、

米こそ一所に舂いてしまふぞ！」

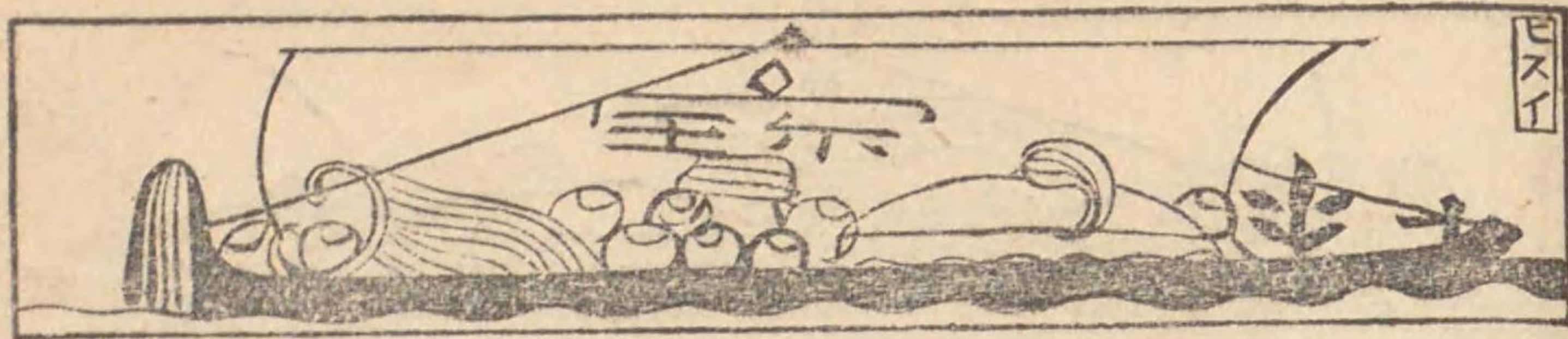
「こ、見掛けによらぬ大言に、流石の鬼も舌を卷いて、雲

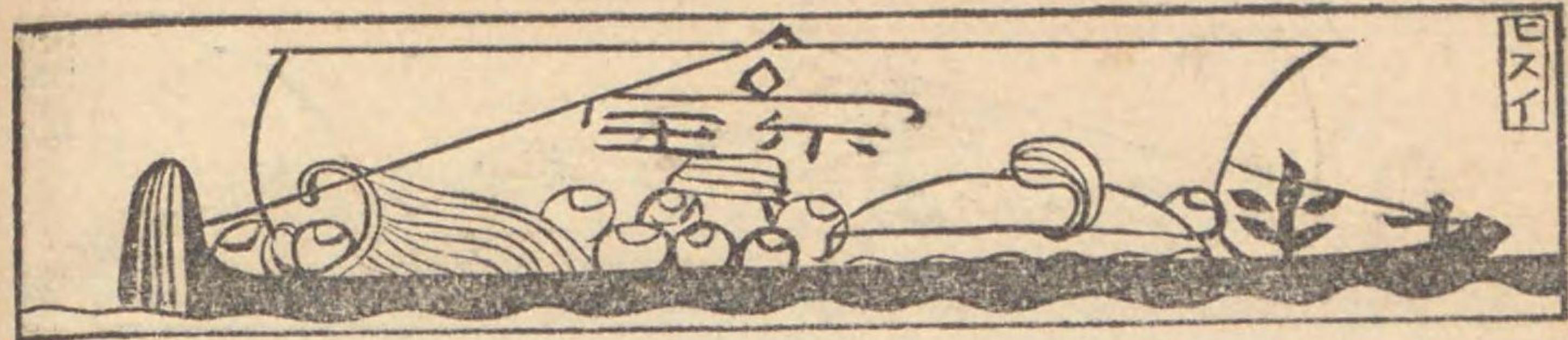
時は言葉もありませんでした。が、少々あつて又、

「此奴中々面白い小僧だ。そんな高慢をぬかすなら、今

吾達ご力較べをして見ろ！」

「それで貴様が勝てばよし、負けたら忽ち一口にするぞ。」





由良太郎はそれを聞くこ、

「やア段々面白く成るな。そんなら力較べをしてやらう。

腕角力でも棒押しでも、何でも来い！その代り貴様達が
負けたら、吾の云ふここを何でも聞くか？」

「もし天地が引くり返り、此瀧坪から火が燃えて、吾達
が負けたなら、小僧の云ふここ何でも聞かう。」

「ヨシ、その言葉を忘れるな。」

こ、由良太郎は勇み立つて、もう肌脱になつて用意をし
ました。

此時一匹の鬼は、側にあつた大石を軽々こ提げ、由良

太郎の前に靜に置いて、

「小僧此石が持てるか？」

こ云へば、由良太郎は冷笑ひ、

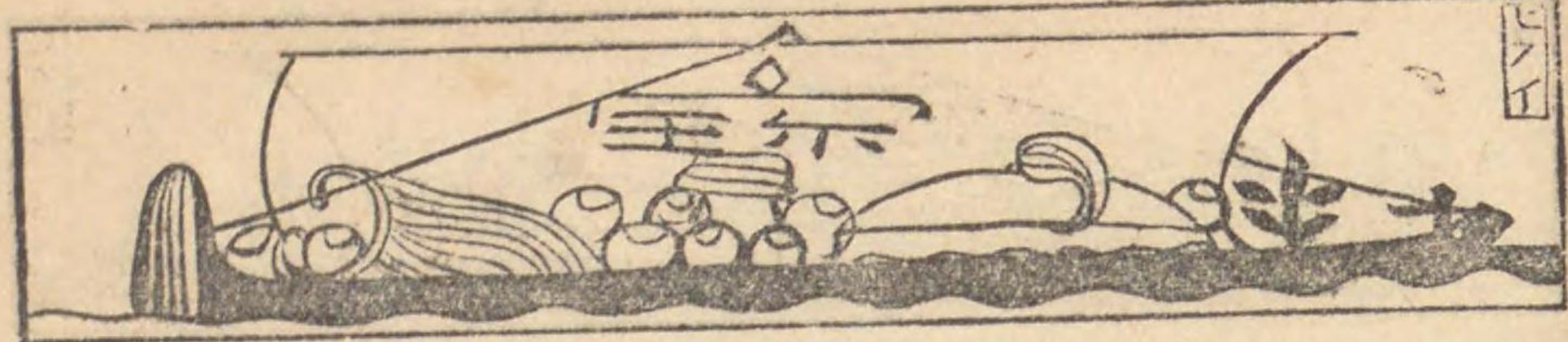
「ナニこんな石が……」

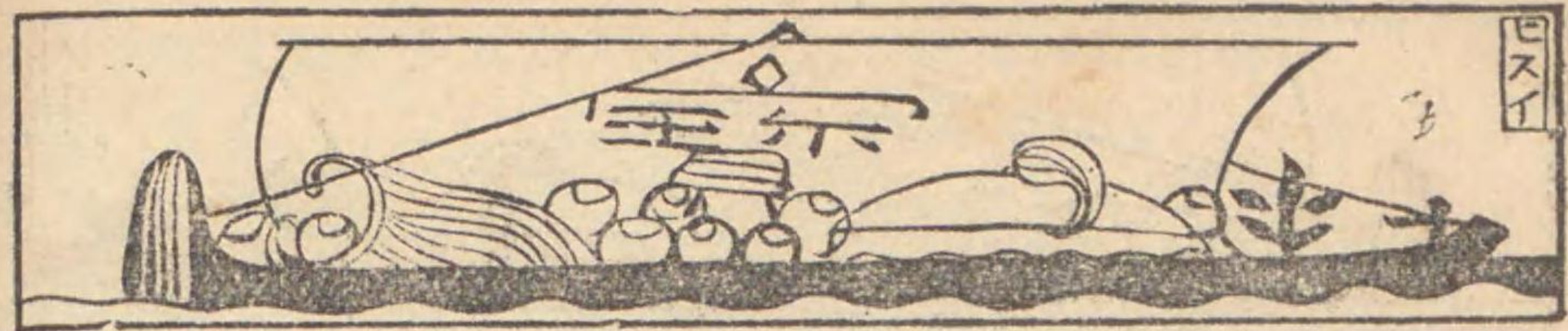
こ云ひながら、譯もなく取て投げ返します。鬼共は驚い
て、今度は例の鐵棒を取り出し、二匹で兩端を持ち、ウ
ンこねちつてまげて見せ、

「サアこれを伸ばして見ろ！」

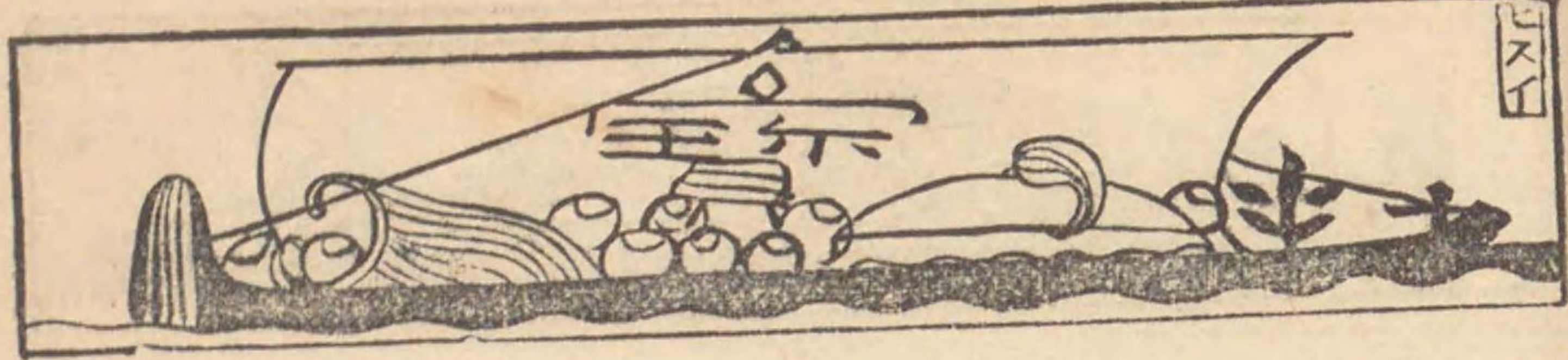
こ、出しましたが、

「オ、譯もないことだ……」

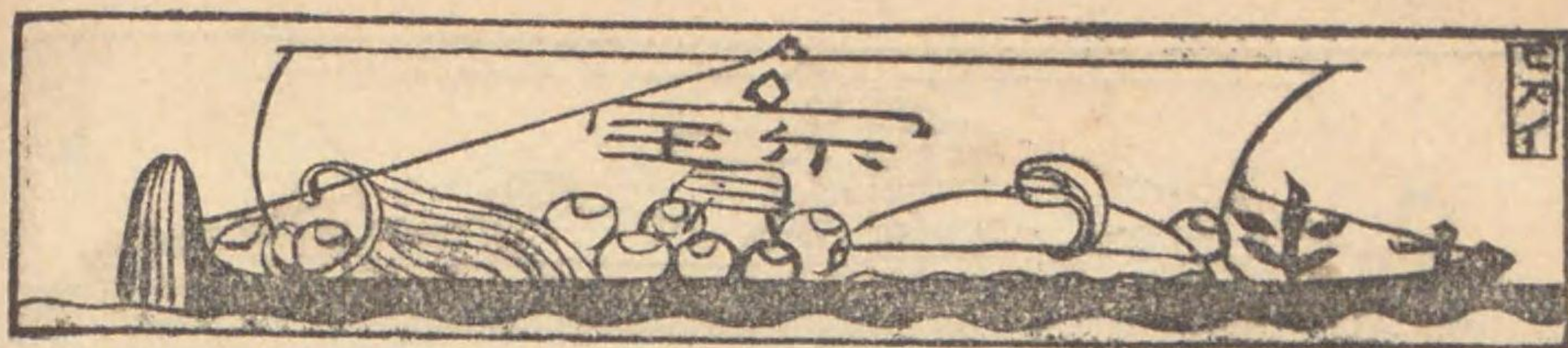




こ、由良太郎は其兩端をもつて、忽ち舊の様に引き伸ば
 しました。これに鬼共は益々驚き、今度は小屋の前に捨
 て、あつた、古い石臼を持ち出して、一振り振つて空へ
 投げますと、石は高く投げ揚られて、忽ち形を失ひ、や
 五分も経つてから、大地へ堂と落ちて來ました。する
 と由良太郎はツカ／＼と寄つて、其石を拾ふがはいか、
 「貴様の力はそれ限りか、何と云ふ弱い奴等だ。吾様の
 投げる所を見ろ！」
 と云ひながら、空を目掛けて投げ揚げますと、石は高く
 雲に陰れて、待つても／＼落ちて來ません。さては木の上



に掛つたのか、それとも他の處に落ちたのかと、鬼共は、
 怪んで、四邊をキヨロ／＼見まはす處へ、忽ち矢の如く
 落ちて來ましたが、其間殆ど二十分も経ちました。此勢
 に鬼共は、いよく肝を潰しまして、迎も適はぬと思ひ
 ましたか、二匹は地上に平蜘蛛の様になり、
 「ア、恐れ入つた御力量。迎も鬼の敵ふ處ではござりま
 せん。此上は何の御用でも聞きますから、命ばかりはお
 助け下さい！」
 前の勢ひ何處へやら、角を折つてあやまりました。由
 良太郎はさこそと打笑ひ、



「なんぞ恐れ入たか？」

「へい恐れ入りましてございます。」

「恐れ入たら云ふ事を聞くか？」

「何でも聞きますでございます。」

「そんなら吾に寶物をよこせ！」

「それはお安い御用でございますが、寶物は此間桃太郎

様に、大概進上致しまして、もう澤山はございません。」

「澤山は入らぬ。吾は百姓だから、簀笠さへあればよ

い。」

「それならば御座ります。只今持つて参りますから、何

卒命よりは……」

「命は取ても益に立たんから、願ひの通り助けてやるが、

此後此瀧坪に出るここはならんぞ！」

「それはもう何處へでも逃げて参ります。」

と、あやまりながら、やがて例の簀笠を取り出し、これ

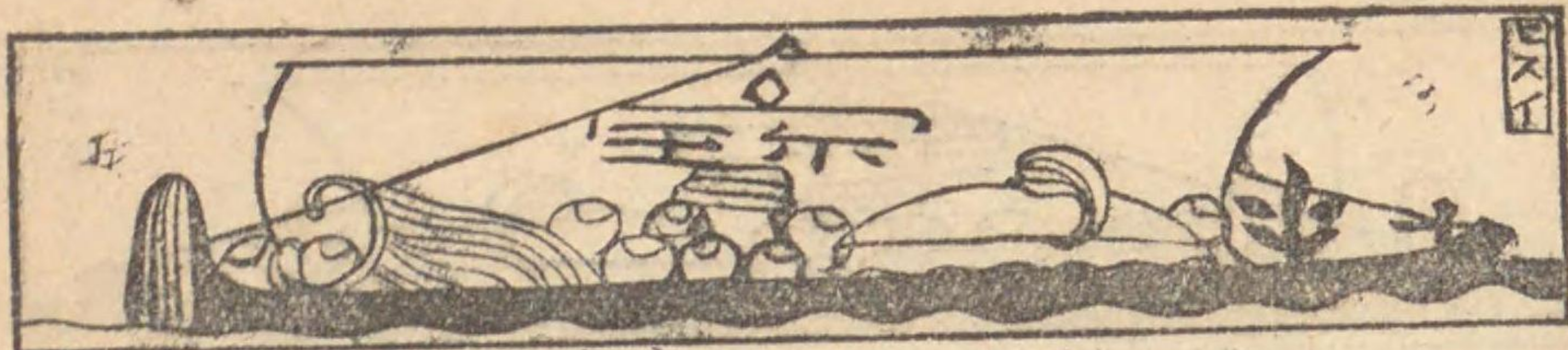
を由良太郎に渡すに、その儘鬼は逃げてしまひました。

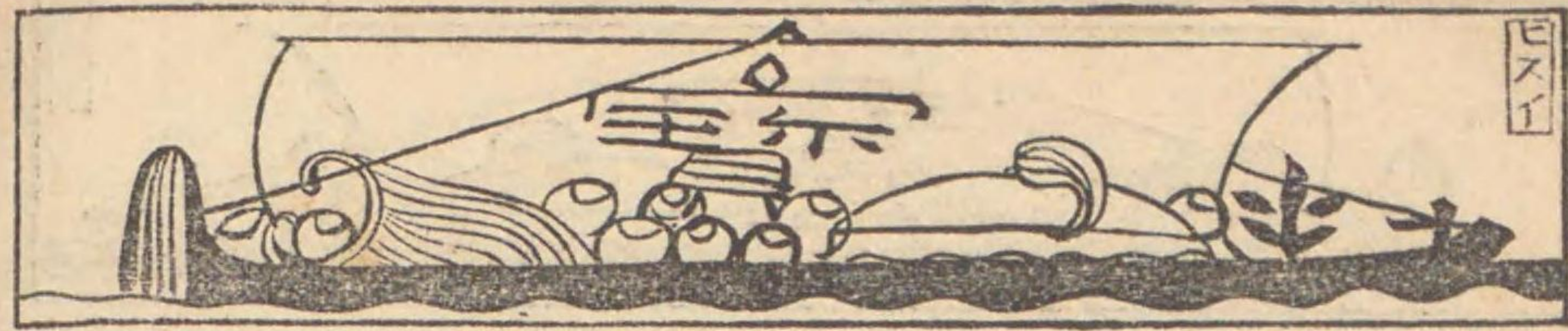
この簀笠は、蓬萊の寶物の中でも、隠れ簀隠れ笠と云

つて、被れば姿が見えなくなるに云ふ、神變不思議の寶

物でした。

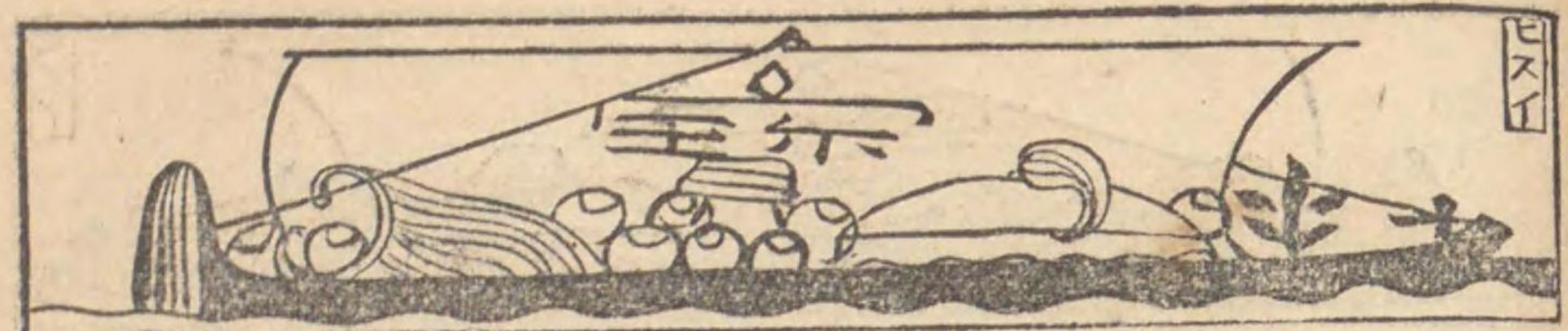
さて由良太郎は瀧坪の鬼を取挫いで、件の簀笠を奪ひ、





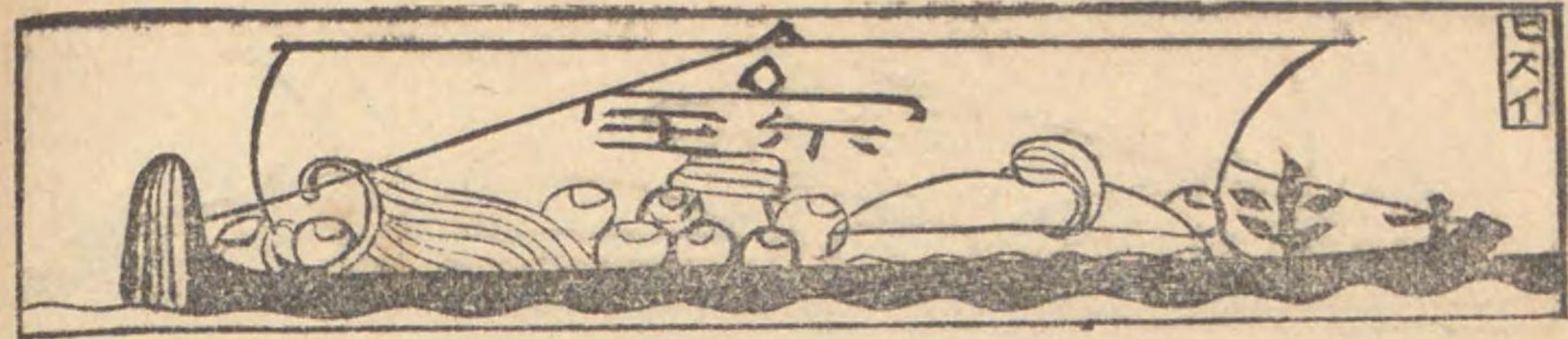
あゝよい氣味だご喜びながら、尙も小屋の戸を押し開け、内に這入つて四邊を見ますご、久しく鬼の棲居になつて居ましたが、幸に損じて居ませんから、持つて來た米を取下ろし、型の如く臼に入れて、晩までに残らず舂きあげ、又車に積んで歸つて來ました。

主人の庄屋は、今朝由良太郎を瀧坪へ遣つたから、大方鬼に喰はれた事ご、思ひ込んで居ました所へ、其日の夕方由良太郎は、恙無く歸つて來て、而も米は皆舂きあげてありますから、主人は驚くごご大方ならず。さては由良太郎の幽靈か、さもなければ鬼の化けたのかご、大きに



怪しむ位でしたが、此時由良太郎は、何思つたか今日の仕末を、誰にも話しませんでしたから、主人は元より少しも知りません。此上は仕方がない、かう食ひ倒されては耐らぬご、ごう／＼この由良太郎に暇をやつてしまひました。

由良太郎は仕方が無く、父から貰つた寶劍ご、鬼から取つた簀笠ごを持つて、スゴく庄屋の家を出ましたが、やがてこの日の晩方、或る家の軒下に來て、少し休まうごしますご、何かは知らず家の中が物騒がしく、人の泣き聲なごが聞えます。由良太郎は不審に思ひ、なほも様



子を探らうと、わざと玄關へ進み入つて、

「たのもう！」

と、云ひましたが、人の聲は奥でしながら、誰も取次に
出て来ません。そこでなほ聲を張り上げて、二三度くり
返して呼びましたら、やつと一人の男が出て来ましたが、
由良太郎の姿を見るに、乞丐でも思ひましたか、

「今日は取込があるから何も遣れない。早く歸れ、蒼蠅
い奴だ！」

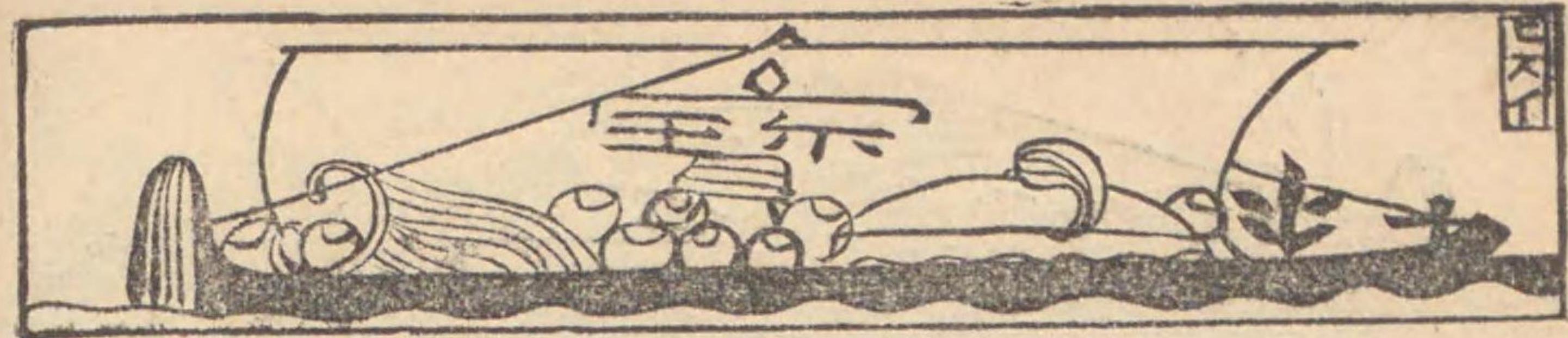
と、云捨て又這入らうとします。

それを霎時と袖をひかへて、

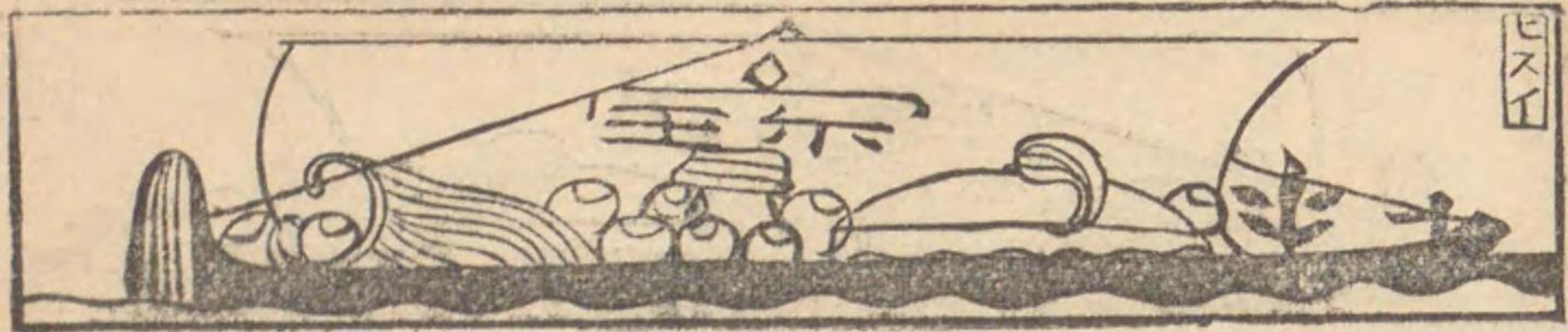


「少しお待ちなさい、聞きたい事がある。私は乞丐でも
物貫ひでも無いが、今お前さんの家の前を通つたら、何
だか頻りに泣き聲が聞えたが、一體あれは何事です？ 仔
細が承はりたい、事に依たら私が力に成てもあげやうか
ら。」

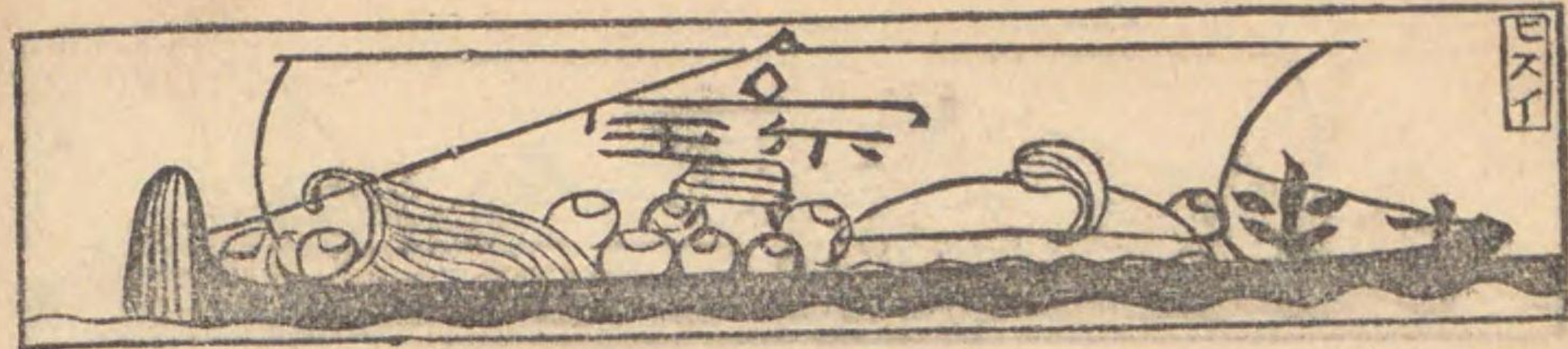
ごさも頼もしく云い入れますと、この男も初めて安心し
た様子で、やがて由良太郎に向つて、仔細を語るのを聞き
ますと、これは此里から程遠くない山の上に、年を経た
社があつて、何神を祭つたのやら、それは確に知れませ
んが、毎年五月の三十日の夜、此里から一人宛、女の子



を納めるここに成つて居り。若し此を怠るこ、其年はひ
ごく暴れて、里人が皆難儀をするので、一人の娘には替
へられぬこ、其番に當つた者は、泣く泣く犠牲をば供へ
るのですが、今年丁度此家の番に當り、漸く十四にな
つた許りの、お玉こいふ一人娘を、今夜は山に納めるの
で、それで皆が泣いて居るのだ、と云ふ事です。
由良太郎は始終を聞くこ、例の仁俠心むらくと起つ
て、勇氣も日頃に十倍し、
「それはさぞかし御愁傷、いかにも御氣毒千萬なことで
す。然しそれならば私にお委かせなさい。私が其お嬢さ



んを助けてあげましやう。」
「それは有難うございますが、あれを納めませんでは、
後の祟りが恐しうございます。」
「その御心配は御無用です。一體人の命を取るこ云ふ、
そんな亂暴な神様が何處にあらう？それは大方本當の神
様ではなく、妖怪に違ひないから、私が退治してあげま
しやう。よいから、私に委してお置きなさい。」
こ、さも頼もしく受合ひまして、それから由良太郎の
差圖で、まづ白木の櫃を作らせ、これに娘の這入つて居
る體にして、堅く蓋を閉ぢ、娘は矢張り家に残し、只其空



櫃ばかりを、人夫十人ほごに擔せて、其先に松火振り立て、自分は櫃の後に付きて、其夜の十時の鐘を相圖に、社をさして登つて行きました。

此時彼の由良太郎は、父から譲り受けた寶劍を腰にさし、鬼から奪つた簀を着て、笠を頭に頂きました。が、元より此簀笠は、鬼の持つた寶物で、奇體不思議のもので、すから、これを被るゝ由良太郎の、姿は少しも見えないのです。

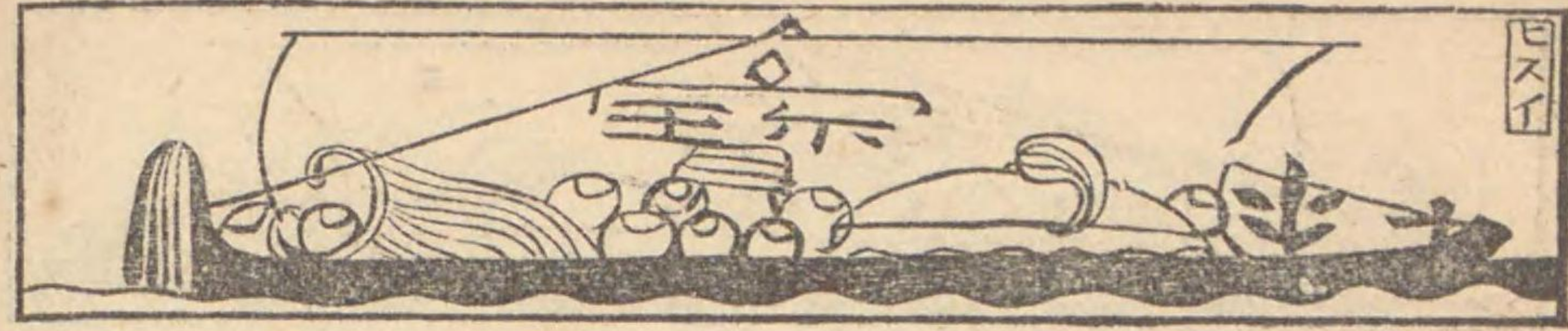
さて山路を登つて行きますと、やゝ一里餘も行つたと思ふ頃、果して古い社がありました。

由良太郎は、その櫃を社の前にそなへさせ、

「今に妖怪が出て來たら、見事に退治してくれるから、其働きの見度いものは、少しはなれて見物して居ろ。それこそそれが怖いと思ふなら、遠慮なく歸るがよい。」と云ひますと、人夫共は顔を見合せて、面白半分、恐い物見たさ、何れも此方の木影に忍んで、ちつと様子を窺つて居ました。

この間に由良太郎は、徐々社壇に昇り、椽の上に座を占めて、例の簀笠に姿を隠し、妖怪の出て來るのを、今かくと待つて居ります。

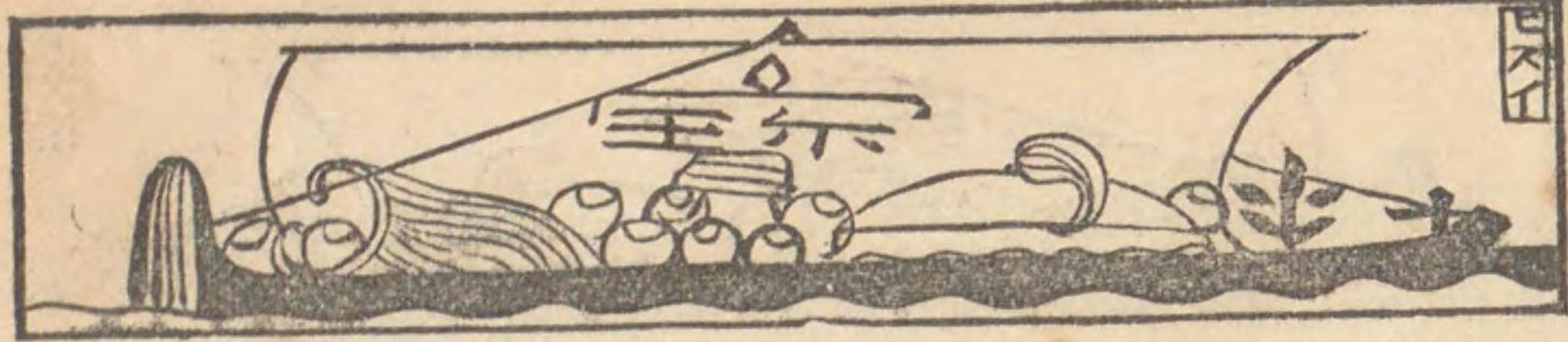




その中に、夜もふけますご、やがて一陣の山風が、颯ご梢を渡るご等しく、社の扉が左右に開いて、魔物は姿を現はしました。

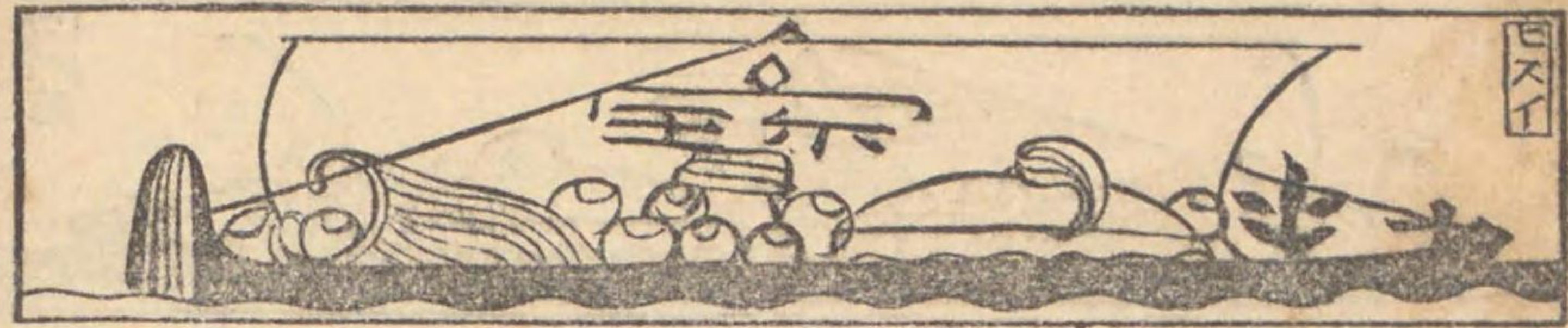
見ると、丈は八尺に餘つて、黒髪逆立ち、眼は鏡を並べた如く、口は朱を盛る盆に似て、髪は針をあざむくばかり。

例の櫃を見て嬉しさうに、側へよつて來ましたが、由良太郎の居るには心付かず、はやその蓋に手をかけました。所を透かさず由良太郎は、進みよつてグイご掴み、例の寶劍逆手に持つて、魔物の横腹柄も通れご、力一杯突



きました。此時忽ち狂風起つて、枝を鳴らし砂を飛ばし、社殿は頻りに震動しましたが、魔物は一聲オーご叫んで虚空に舞ひ上らうとするのを、尙由良太郎は飛びかつて、その腕を取て引きおろし、大地にドーご投げつけて、乗りかゝつて又咽喉を指し、ごうご見事に仕止めました。

先刻から此様子を、木蔭で見物して居た人夫共は、或は遠く逃げかくれ、又は氣を失つて居ましたが、此時漸くよつて來て、皆由良太郎の働に、感服しない者はありません。

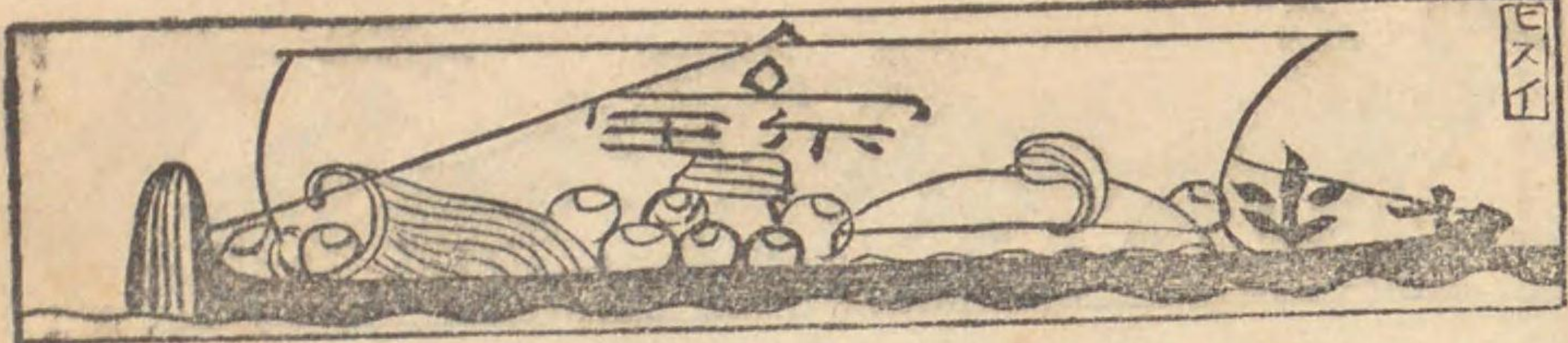


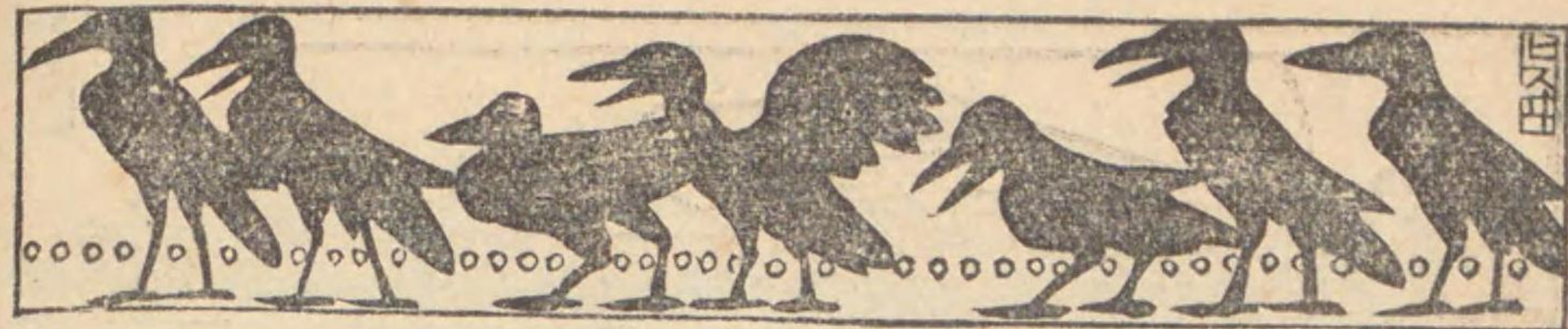
そこで由良太郎は、まづ魔物の首を打落し、其を彼の櫃に入れて、前の如く人夫共に擔せ、急いで山を降りました。

さて又お玉の家では、さきに由良太郎の言葉にまかせ、空櫃ばかりを山へ送りましたが、安心心はなく、こんな事して魔物を怒らせ、却て後の禍を招いては、しきりに眉を顰めて居る所へ、由良太郎は魔物を退治して、無事に歸つて來ましたから、家内の喜は云ふに及ばず、これで年來苦まされた、厄病神もなくなつた。おかげでもう此村は、此後榮える許りだ、皆雀躍して嬉しがり、

由良太郎一人を取りまいて、まるで神様かなんぞの様に崇め、そのまゝ此村に留まつてくれ、皆でしきりに頼みますので、由良太郎もその氣になり、そのまゝこの土地に住居をかまへて、いくら大食をしても困らない様になりましたから、やがて又兩親をも迎へて、共に安樂に世を送りました。

めでたし〜〜





第九七羽鳥

上

むかし、ある處に一個の女が居りました。良人は
 夙く世を去つて、後は七人の息子と、一個の女兒を相手
 に、辛くも此世を渡つて居りましたが、此七人の息子等は、
 皆筋骨逞しく、力量も尋常ならず、天晴れ後には役に立
 つ様に見えましたが、何しろ孱弱い女の腕一つには、容
 易に養ふ事ができません。
 或時母は彼等に向つて、「お前方は、私の側にはかり居



て、親の脛のみ咬つて居るのは、意氣地の無い話ぢやないか。あれを御覽、屋根に鳴く鳥でも、元より畜生の身でありながら、自から働いて自から食を求め、其上親鳥に向つては、反哺の孝を盡す云うではないか、お前方は人間と生れて、そんな意氣地の無い事では駄目だ。いっつそ鳥に成つた方がいよ。』と愚痴混りに云ひました。すると不思議や七人の息子等は、兩腋から眞黒な羽翼を生やし、口は眞黒な嘴と變じ、見るく七羽の鳥と成つて、カア〜〜と云ひながら、飛んで行つてしまひました。

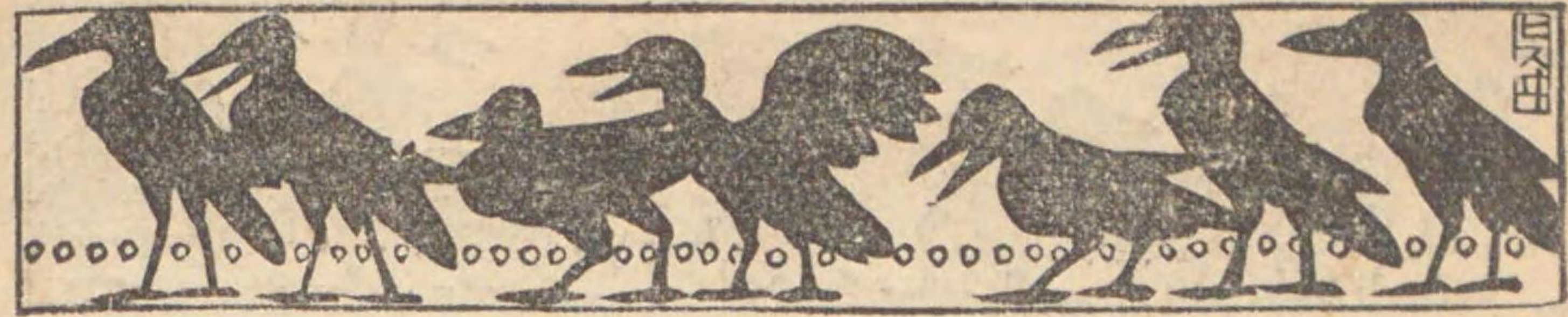


あまりの事に母親は、驚くこと大方ならず、急いで呼
び返へさうございましたが、はや詮術もありません。あゝ
悪い事をした。何うしたらいゝだらうと、大層心配します
中に、さうく疾病に患ひまして、程なく死んでしまひ
ました。

親に別れ兄弟に別れて、取残された娘の旭は、悲嘆云
ふばかりなく、途方に暮れて居ましたが、まだ十歳に足
らぬ乙女の、只一人居るのも心細く、且つは兄弟戀しさ
に、彼の時鳥に成つて飛んで行つた、森の中へ尋ねて行
つたら、よしや變つた姿になりとも、逢はれぬ事は有る

まいご、それよりやがて支度を調べ、森の中へご分け入
りました。

兄弟が戀しいばかりに、また乙女子の膽太くも、旭は
只一人森の中に分け入りましたが、成るほど鳥は大勢居
て梢に鳴いて噪ぎますが、皆一様に黒いばかりで、何れ
が自分の兄達だか、更に見分ける術もありません。然し
此方は見分難くても、先方では現在の妹を、まさか見知
らぬ事はあるまい、見知つて居るなら側へ来て、通せぬ
までも聲をかけない道理はないのに、姿と共に心も變つ
て、私を見忘れてしまつたのか、さりごは情ない事では



ないか、ご恨めしくも思ひながら、やがてごある清水の
所へ來ました。

先きから馴れない路を歩いて、足も疲れ咽喉も渴きま
したから、暫時此處で休まうご、進みよつて水を掬ひ、
一口飲んで見ましたが、其味甘露の如く、氣も急に清々
して來ましたから、旭は大きに喜んで、尙顔なぞ洗はう
ごする時、水の底から金色の光がさし、黄金の波が逆捲
よご見る間に、忽然として一人の仙女が、旭の前に現は
れました。旭は驚き呆れて、思はず岩の上に跪けば、彼
の仙女は、莞爾に打ち笑んで、



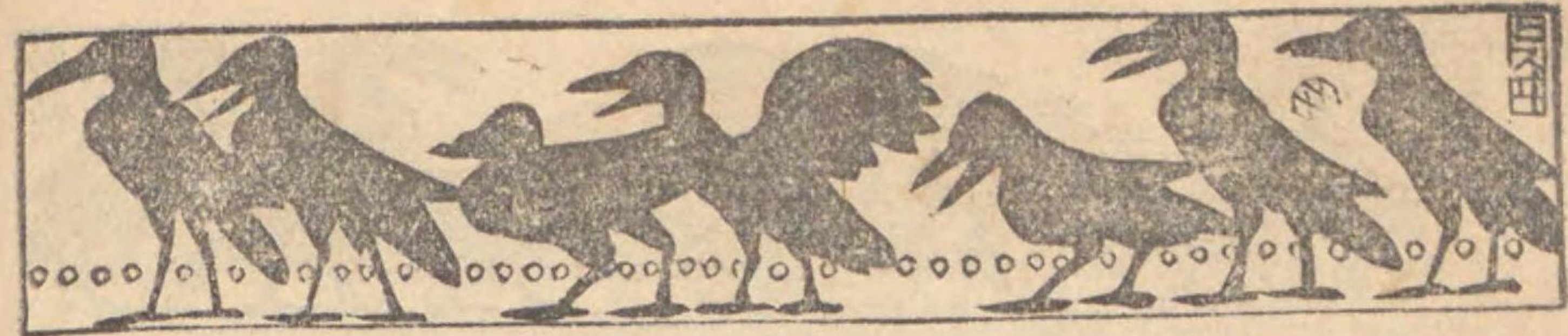
「ヤヨ少女、此處は尋常の人間の、來り得べき處でもな
いに、汝は孱弱い女子の身で、何ごして斯くは漂泊うて
來た。」

ご、徐ろに尋ねました。旭は轟く胸を押へて、事の仔細
を委細話しますご、仙女は聞いて尙進みより、

「それはさぞ心細からう。汝は眞に兄弟が戀しいか。」
ご、重ねて問はれて、

「はい眞實戀しう御座います。」
仙女は點頭いて、

「それはご戀しく思ふならば、私は今に逢はせてあげや



う。しかし、それには私の言葉を^{もち}用ゐて、今から^{このもり}此森の中を^な住家^{すまか}とし、あの七人の兄弟の^{ため}爲に、七年の間^{あひだ}此處に住んで、七個の^{かまど}兜を作るがよい。そして其七年の間は^{たゞ}縦令如何なる事^{こと}があつても、決して一句も^だ出してはならん。さうすれば、七年の後に、^{おまへ}汝の兄弟は七人共、^{みな}皆人間の姿に復へり、お前の所へ^く來るであらう。」

こ、云ふに旭は大に喜び、

「そんならその御言葉に^{したが}順ひ、今から^{このもり}此森に止つて、七個の^{かまど}兜を作りましやう。それにしてもあの兄さん達は、今何處に居るのでございます。」



「それは何處^{どこ}も問ふまでもない。乃ち^{すなは}彼處^{あそこ}に居る七羽の鳥が、お前の^{こひ}戀慕^{こひ}ふ兄弟^{きょうだい}ぢや。」

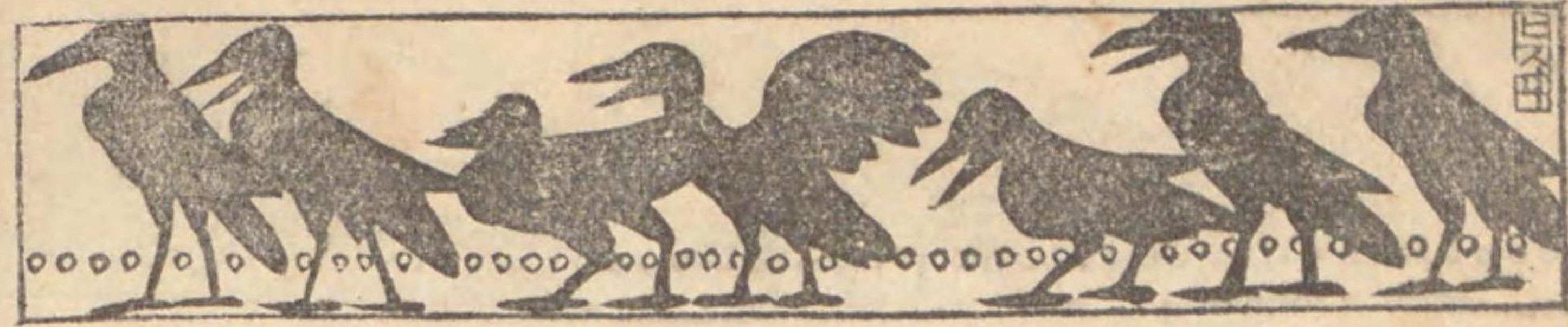
こ、指さす處を見やりますこ、^{むかふ}彼方の^{いば}岩の上に、^{おな}同じ様^{やう}な鳥が七羽、^{つばさ}翼を並べ^{くちばし}嘴を揃へて、^{こなた}此方^{むか}を向いて^{くび}首を垂^たれて居ります。

旭は見るより、^と飛び立つて、

「オ、兄さん達、おなつかしい。」

こ、云つても言葉が^{つう}通じませんから、^{ただ}只顔を見つめる許^{ばか}り、先立つものは^{なみだ}涙です。暫時して旭は又^{また}仙女に向ひ、

「それにしてもあの^{ひと}人達が、あんな^{あま}淺ましい^{すがた}姿になつた



のは、一體如何云ふ理由でございます。」
と、聞きました。

仙女は言葉を改めて、

「さればこそ、これには深い仔細のあること。元來此森の王は、世にも大きな鳥であるが、それにお前の兄弟達は、度々此森に分け入つて、その仲間の鳥を打取り、又其巢など奪ひ去るのを、常から王鳥は憎んで居た所、母の云つた戯言を、聞くより透かさず其虚に入つて、かくは鳥にしてしまつたのぢや。しかし元より一時の懲誠、お前の盡す善根によつて、よく其罪を亡ぼしさへすれ



は、忽ち免し返されるであらう。是こそお前が森に止まつて、七年の間に七個の兜を、仕上げねばならぬ譯である。」
と、言ひ了るゝ又その儘、仙女の姿は消えてしまひました。

中

さて旭は、これから此森に止まつて、彼の仙女の教に順ひ、兄達の爲に云ふので、兜を作りはじめましたが、不思議や其次の日から、彼の鳥ごもが代るぐに、何處からか食物を運んで來ては、親切に養つてくれ。又時と

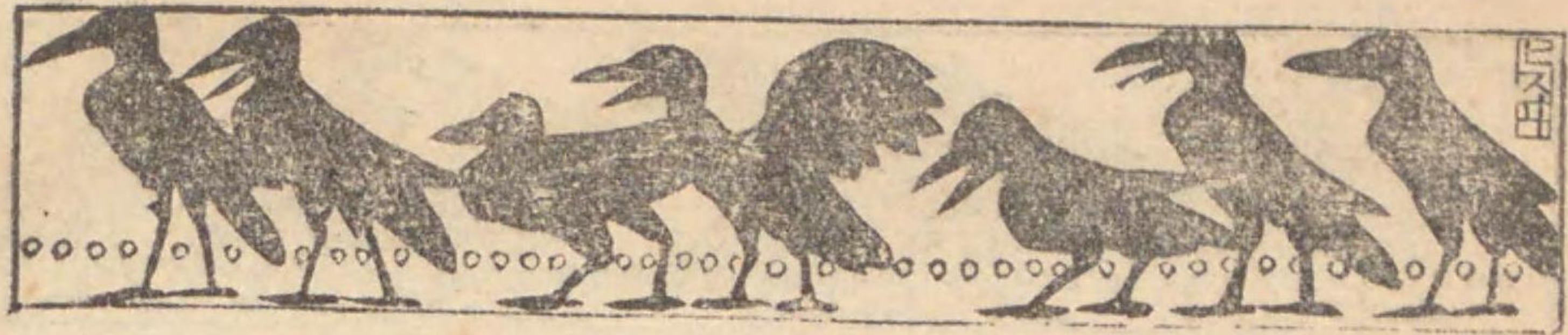


しては、新らしい衣を持つて来て、古い物と換へなごし
ましたから、旭はかゝる森の中にありながら、少しも不
自由を覚えませんでした。
梢の花に春をしり、地に敷く落葉に秋を悟つて、此森
に住むここ、はや六年になりましたが、旭も今は十五歳
になりました。

茲に又此森の近傍に、年若い大名が住んで居りました。
常から大層狩が好きで、時々野山をあさりまはりました
たが、ある日家來の者をつれて、自分は一匹の駿馬に跨
り、晝さへ闇い森の中を、物ごもせずに分け入りますこ、

やがて一匹の牝鹿が出ました。

大名はこれを見ると、急いで弓に矢をつがへて、只一
矢と思ひましたのに、手元が狂つて射損じましたから、
尙二の矢を番へながら、右往左往に追驅けます中に、何
時の間にやら見失つて、一人り茫然と立ちすくんで居ま
すこ、不圖彼方の清泉の上に、世にも珍らしい一個の少
女が、餘念もなく兜を作つて居ります。さてもこんな深
かい森の中に、かゝる者の居る譯は無い。これはかねて
より聞き及ぶ、山姫と云ふ者か、さもなければ魔物であ
らう。と進み寄て大音に、



「コリヤ其方は何者なれば、かゝる所に只一人、女の身に似合はしからぬ、兜なんぞを作つて居るのぢや。」
 こ、聞きましたか、彼方は更に答辭もなく、只莞爾に打笑む許りです。

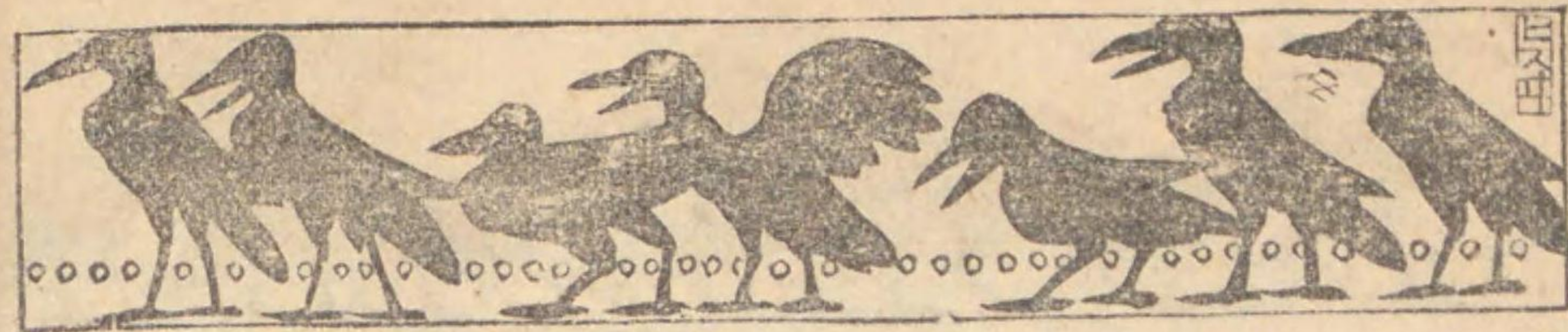
「さては此娘は啞者ぢやから、親に捨てられて唯一人、此所に置かれたのであらう。それならば不憫の者ぢや。」
 こ、大名は供の者に命じ、件の娘をつれて、そのまゝ館へ歸りました。

大名は旭を見て、最初こそ魔物の所爲と疑りましたが、其姿の美麗さこ、餘りの無邪氣さに、其儘館へ引取つて



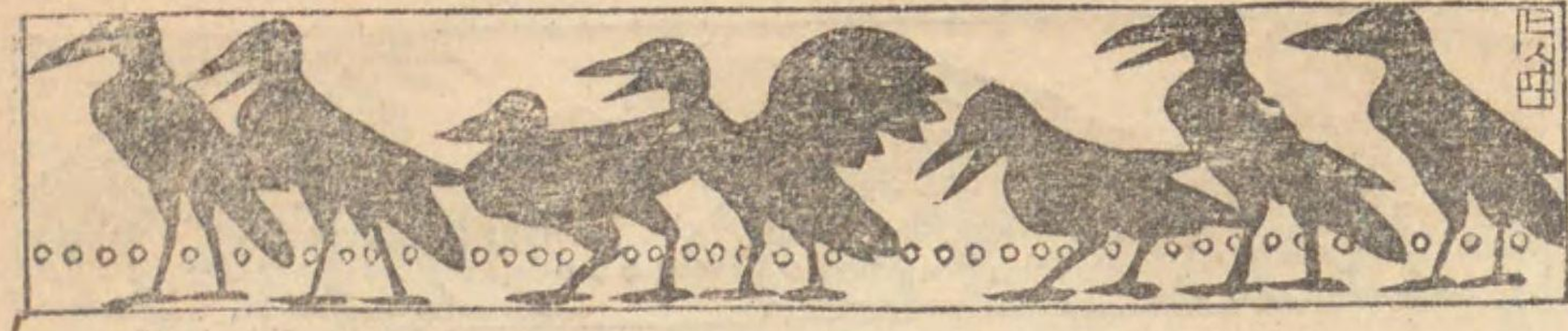
かへり、早速衣装を改めさせて、やがて腰元につかひました。一度其姿を見る者は、皆その美しさに驚いて、恐らくあれは人間ではあるまい。むかし三保の松原に舞ひ下つた、彼の天人と云ふものなごの、大方親類でもあらうなご、口々に云ひはやして、忽ち國中の評判となりました。

所が又不思議な事には、件の少女の來てから、何處からこもなく鳥が七羽、いつの間にか庭へ來て、木立の中に巢をかまへ、旭の居間の傍近く來ては、頻りにカア／＼鳴き立てますこ、殿は五月蠅くお思ひになつて、例の弓



矢で射て取らうとなさるご、旭はあはて、其手にすがつて、一生懸命にこれを止めます。そして殿が助けてやれば、娘はさもうれしさに、幾度も御禮をして、相變らず兜をば、一心になつてこしらへますから、その理由をお尋ねになつても、例の啞の事で、仔細を話す事はできません。

これすら怪しいと思つて居る所から、或夜更けて、殿は不圖眼をさまして見ると、娘は彼方の窓の下で、餘念なく兜を作りながらも、時々袂で涙を拭ふて居るご、窓の外には七羽の鳥が、聲をも立てず居並んで、兜を作



る手元を見ながら、これも眼には涙を浮べて居ります。あまりの不思議さに、殿は驚き呆れ、息を殺して見て居ると、暫時して娘は一個の兜を作り終り、立上つて傍の箱の中へ入やうとしますから、伸び上つて其中を見るご、これにも同じ様な兜が、はや五個まで入れてあり、今作りをはつたのを合せて、都合六個になるのを見て、娘はさも嬉しさに打ち笑み、窓の外の鳥を見返りますご、鳥も嬉しげに點頭いて、やがて庭の方へ飛んで行き、娘も其ま、箱を閉ちて、又もや眠りに就きました。

始終を見届けて、殿は不審でたまりませんから、翌朝



直ぐに家來を呼んで、右の次第をお話になりましたか
ら、家來共は膝を進め、
「そはよい所にお氣付きなされました。」
「私共は初めから、必定怪しい者に相達無いこ、心をつ
けて居りましたが、果して彼奴は尋常の女ならず、察す
る所御家を狙ふ曲者。」
「御家を亡す奸計で御座いましやう。されは其兇は、他
日味方の者の被る爲め。又七羽の鳥の付き纏ふのは、即
ち彼の魔術でございます。所詮打ち捨て、は置かれませ
ん、直ぐさま彼を引捕へて、厳しく詮議致しましやう。」



「彼の啞に見せかけるも、まつたく秘密のもれない手段
で、厳しく拷問致しましたら、口を開かぬ事はございま
すまい。」
「こ、家來は急いで支度をして、娘の居間に亂れ入り、驚
く所を用捨もなく、高手小手に縛りあげて、殿の前へこ
引据ゑました。
家來の者共は聲荒かに、
「こりや女、其方は殿に何の宿怨あれば、御家を覆さう
なご、致す。」
「さア速かに白状しろ、云はずば女ごて會釋はないぞ。」



痛苦見るより眞直に、はやく白狀してしまへ。」

こ、恐ろしい見幕です。けれごも娘は仙女の約束があつ

て、一句も吐く事出来ません。今又それを破りましたら、

戀しい兄弟に逢はれませんから。ちつこ口を結んだきり、

唯黙然として居る許りです。家來はいよく言葉を勵ま

し、

「おのれ偽啞者め、云はずは此方にも仕様があるぞ。」

こ、太い棒で打たうごしますご、殿は又押し止め、更に

娘に向つて、

「其方已に見現はされた上は、包むごも詮はない、却て

罪を重ねる許りぢや。それより素直に白狀して、少しも

早く憂苦を逃れる。」

こ、情を込めて云ひますので、娘も今は黙つて居られず、

已に仔細を云はうごしましたが、

「いや、今此所で口を開いては、日比の苦心も水の

泡、よしや如何なる憂苦は見ても、堪へるだけは堪へて

見やう。」

こ、思ひ込んで其上に、いかに威しても賺しても、更に

白狀する様子もありませんから、殿も家來も飽倦み果て、

さては眞の啞者であつたかご、こ、其後は深く糺もせず、





そのまゝ牢屋へ引き立て、厳く押込めてしまひました。

下

不憫や旭は、戀しい兄弟に逢ひ度さに、身に覚えもない湿衣を着せられ、罪もないのに牢屋に入れられて、心細さは一通りでありませんが、それさへ兄弟に逢はう、爲に、思へば少しも辛苦くは思はず。彼の兜の箱は、今一個で願も叶ふのを、其一個が作られぬのが、何より悲しく悔しくて、一人涙に沈んで居ますと、やがて表に羽音高く、例の七羽の鳥が飛んで来て、件の兜の箱を、旭の前に据ゑました。旭は喜ぶまい事か、



「さては兄さん達が加勢をして、此箱を盗み出してくれたか。あゝ嬉しい辱いご、幾度か伏し拜み、夫から又箱を開けて、兜を作り始めました。それを番人はやがて見付けて、直ぐに其箱を取上げましたが、暫時するご又鳥共が、盗み出しては持つて來ます。再び取上げて倉庫の中に收へば、如何して盗み出すのやら、又鳥が運んで來ます。これには番人も恐怖を抱き、さてはやつぱり魔法であらう。うつかりして祟をうけるな。」

ご、遂には其儘に捨て、おきました。

その間に旭は、夜を日に次いで一心に、兜を作つて居り



ますご、やがて残りの一個も出来て、最初から數へます
ご、丁度七年目で七個の兜が揃ひました。
するご或日、何處からか七騎の武者が、同じ様な黒糸
の鎧に、黒漆の大刀を佩き、黒い駒に打跨つて、此館へ
乗込んで來ました。

番卒ごもは此を見て、驚くごご大方ならず。

「すはこそ逆賊が攻て來たぞ。油断して敗取るな。」

ご、罵りく走せ向ふに、件の騎馬武者達は、少しも之
に刃向はず、やがて馬から飛んで下り、

「皆さん早まつて下さるな。私共は此間中、御庭の中に



住で居りました、七羽の鳥でございます。今日人間に立

ちかへり、かやうな武者になりましたから、改めて御奉

公の爲め、わざく參つたのでございます。ごうぞお取

次下さい。」

ご、大聲に頼みました。

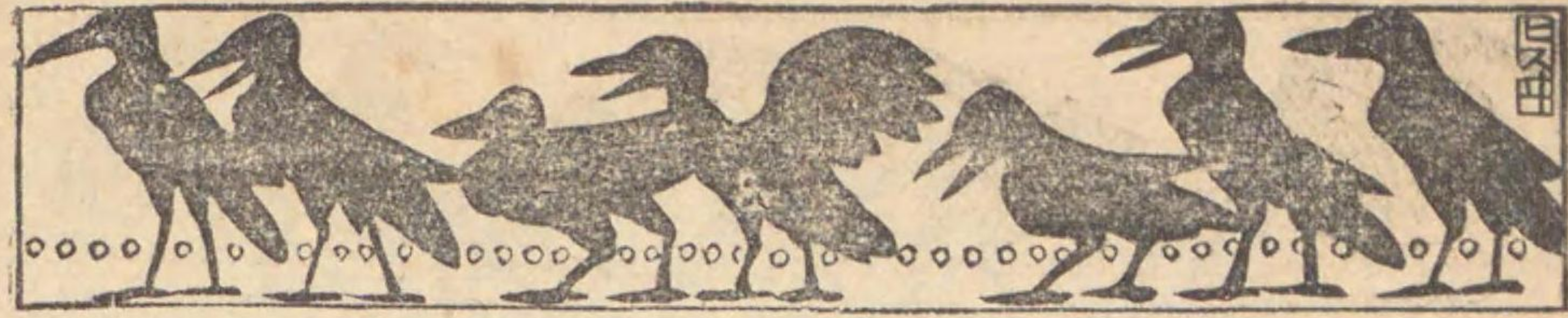
するご殿は之を聞いて、不審ながらも出て見ますご、

天晴れ勇ましい七騎の武者が、それぐに駿馬を扣へて、

立關の前に列んで居ますが、見れば彼等の頂く兜は、違

ふやうもない彼の旭の、日頃作つて居た物ですから、い

よいよ奇異の感をなし。



「こりや者共、其方達は何者ぢや。わが庭に住んだ鳥に云ふが、それには何か仔細があらう。」

云へば、中から一人進み出て、

「その御不審御道理でござりますが、實は生れながらの鳥ではございませぬ。幼い時の悪戯の罰で、暫時淺ましき姿となりましたが、妹の殊勝な心根によつて、今斯く以前の人間に復り、殿の御徳を慕ひ奉つて、御奉公に參つて御座ります。何卒然るべく御取立て下さい。又あの妹は、元より悪人でも魔物でもございませぬから、一時もはやく牢屋から、御免し下さる様お願申します。」

こ、一伍一什を申し上げましたので、殿をはじめ一座の

面々も、しばしは呆れる許りでした。

暫時あつて、殿は七騎の武者に向ひ、

「其方共の今の言葉によつて、吾が不審も全く晴れた。

見る處其方等七人、いづれも筋骨逞しく、物の用にも立つこ覚える。いかにも願通り家來となし、今日から七個所の城門を守らせ、城下の七郡を扶持に取らすぞ。」

こ、有難い御言葉に、七人はハツと許り、何れも難有涙にくれました。

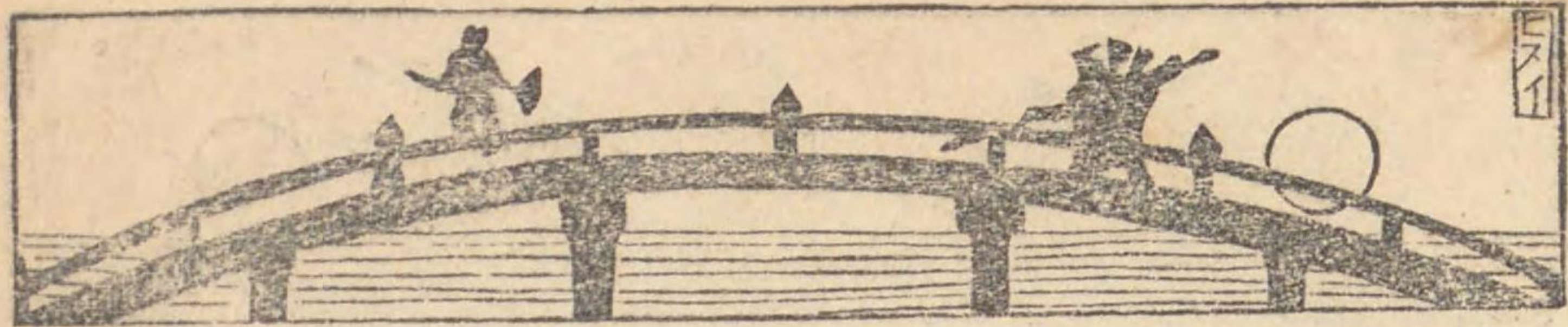
その間に牢屋に繋いだ旭は、直ぐに免されて出て來ま





したが、此時はもう旭も、口が利ける様になりましたから、直ぐご兄達に取りついて、七年間の苦勞をはなし、又殿に向つては、今まで啞であつた理由を、委しく話しましたので、殿も一方ならず感心して、その場からこの旭を、自分の妻と定められ、深く可愛がる事になりました。

めでたしくく。



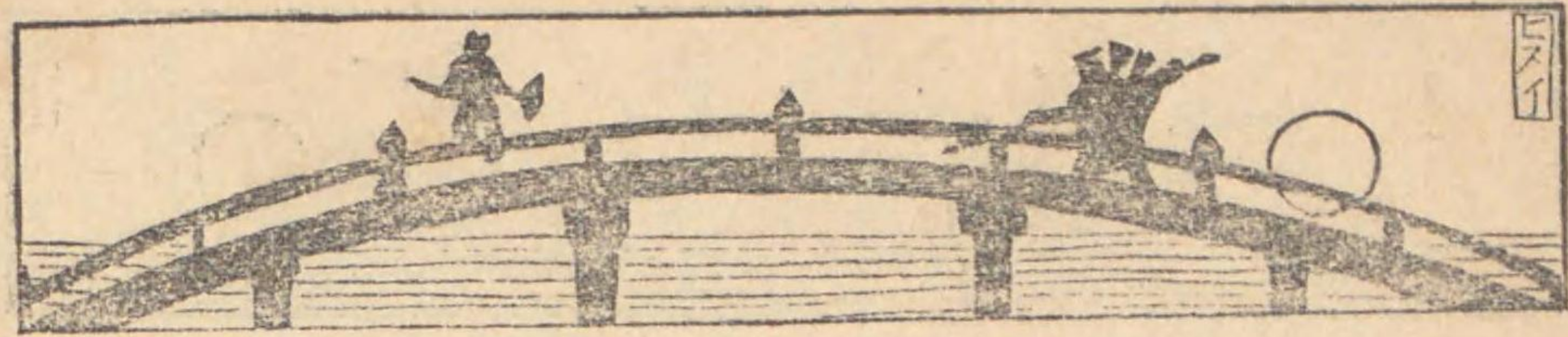
第十 牛 若 丸

(お伽芝居)

序の幕 花の鞍馬山

本舞臺一面平舞臺、但し上手岩組の陰より、古びたる
 經藏半分を見せ、正面櫻の立木、よき程に幔幕を張り、
 向ふ櫻の立木をすかして、山又山の書割。下手岩組に
 て見きり、日覆より櫻の釣枝、凡て鞍馬山西谷花盛の
 體。

此所に稚兒犬若、猿若、虎若、龍若、目ん無い千鳥の
 遊戯を爲す。此見得よろしく、賑やかなる管絃の鳴物



に、山やまおろしをかぶせて幕まくら明あく。

(犬若) さア、今度は猿さるの番ばんぢや。

(猿若) いや、今いまのは見みえた〜、もう一度どお前まへの鬼おにぢや。

(虎若) それは成ならぬ〜。

(龍若) 面倒めんどうぢや、それなら拳けんで極きめるがよいは。

ご捨かて白せき宜よろ敷しくある。

此所こゝえ花道はなみちより、牛若うしわかさき先に立たち、客僧きやくそう花心坊はしんぼう出でて來くる。よき所ところにて、

(牛若) あれ〜、彼所あそこに見みえるのが西谷にしだにの櫻さくら、なんごよ
い景色けしきでござりましょう。

(花心坊) 何なにさま噂うわさに聞きき及およぶ、あれが西谷にしだにの櫻さくらで御座ま座ざる

か。東谷ひがしたにごはまた格別かくべつ、見事みごとに咲さき揃そろふたもので御座ま座ざるな。また彼處あそこの花はなの下もとに、遊あそび狂くるう稚兒ちごたちは？

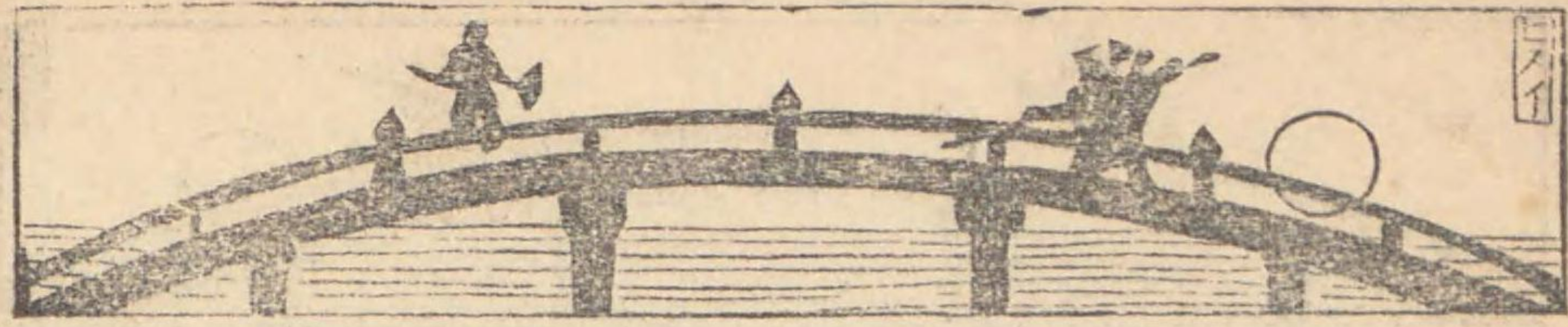
(牛若) あれは皆私みなわしの朋輩衆ほうはいしゆう、今日けふはお師匠ししやうさま様の御許おゆるしが出でて、花見はなみに來きて居ゐる處ところでござります。

(花心) そんなら何故なぜあの中に、其方そなたも交まじつて遊あそばしやらぬのぢや？

(牛若) それでも…遊あそんでくれませぬもの……。

(花心) すりやまた何なにうして？

(牛若) あの人々ひとびとは平家へいけの公達きんたち、私わしは氏うぢが違ちがふと云いうて、



常つねから別物べつぶつにされて居をります。

(花心) シテ、その違ちがふ氏うぢご云いはしやるのは、藤原ふぢはらか橘たちばなか

……それごも平家へいけの煙けむたがる、源氏げんじの、若もしや御曹司おんぞうし。

ご、その顔かほを見る。牛若うしわかも思入おもひいれあつて、

(牛若) 如何いかにも源氏げんじの者ものなりやこそ、當時盛たうじさかりの平家へいけの前まへ

には、花はなに歌うたよむ鶯うぐいすに、月つきに血ちを吐はく時鳥ときどり……肩身かたみの

狭せまい口惜くちをしさ……

(花心) ハテ、それは氣きの毒どくな。そんなら愚僧ぐそうが彼處あそこへ行い

て、一所しよに遊あそんでもらへる様やうに、よう頼たのんで進しんぜやう。

(牛若) でも此方こつちから腰こしを折をるのは。

(花心) ハテ、入いらぬ負惜おしをぢや。愚僧ぐそうに委まかせておくがよい。

ご、これにて兩人舞臺りやうにんぶたいにかゝる。

以前の稚兒達いせんちびごたちこれを見つ

(犬若) ヤア、彼所あそこに牛若うしわかが來きよつた。

(虎若) そんなら此方こつちは東谷ひがしたにへ行いけ。

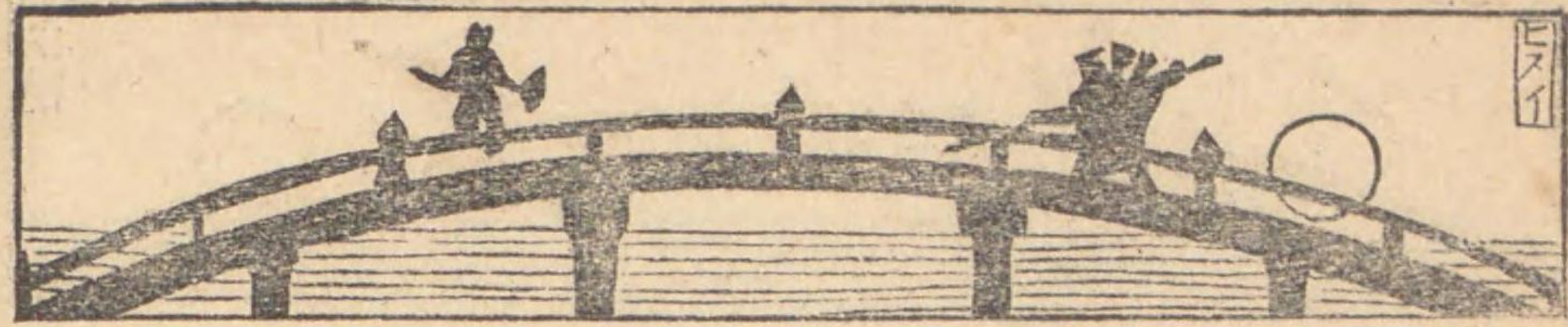
ご、皆々みな上手かみてえ行きか

花心坊くわしんぼう呼び止どめ、

(花心) ア、これく、其方衆そなたしゆも一山さんの者ものなら、此稚兒殿このちびごどの

も仲間なかまに入れて、一所しよに遊あそんであげて下くだされ。

(犬) それでも其奴そやつは……なあ猿若さるわか……



(猿若) さうぢや……常つねから好すかぬ奴やつぢやによつて……

(花心) 一河かの流ながれ、一樹じゆの陰かげ、ましてや一山さんの御坊ごぼうの中に、

一つ教をしへを受けうけるものに、好すきの嫌きらひの云いひ合あうては、

第一だい佛ほとけの道みちにも違ちがはう。兎角どかく私わしが頼たのむほごに、今日けふか

ら仲好なかよう仲間なかまに入いれて、遊あそんでやつて下くだされや!

(犬若) 頼たのむごならば入いれてもやらうが……然しかし猿若ざるわか、何なん

ごしようなり!

(猿若) さればぢや虎若とらわか、お前まへの分別ぶんべつは?

(虎若) まあ、龍若たつわかの思案しあんから。

(龍若) さうぢやなア、何なんごしたものか……。

ご、四人にん當惑どうわくのこなし。やがて猿若ざるわか思おもひ付ついて、

(猿若) イヤ、よろしい、入いれてやらう。

(犬若) ナニ、牛若うしわかを?

(猿若) それにはな……。

ご、耳打みくうちする。四人にん互たがいにうなづき合あひ、

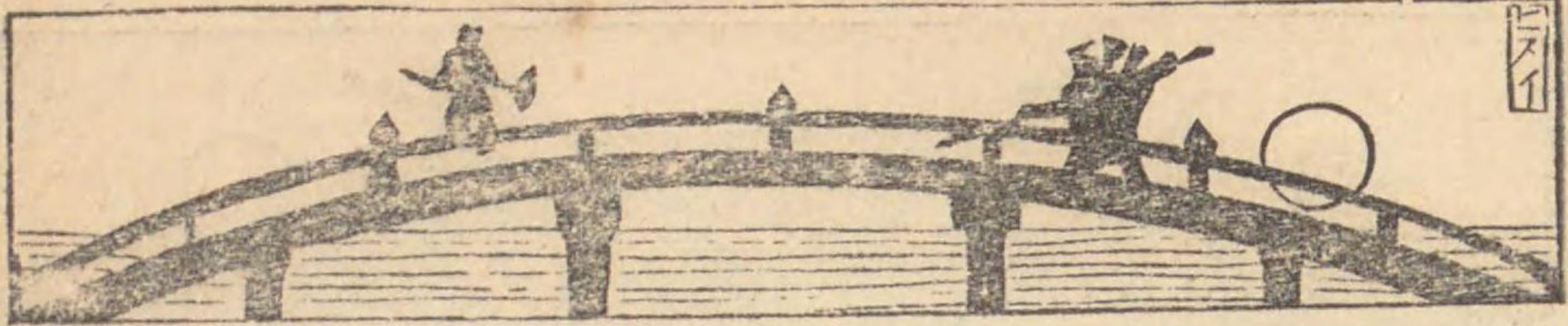
(犬若) では今日けふから仲好なかようなつて、いかにも仲間なかまに入いれ

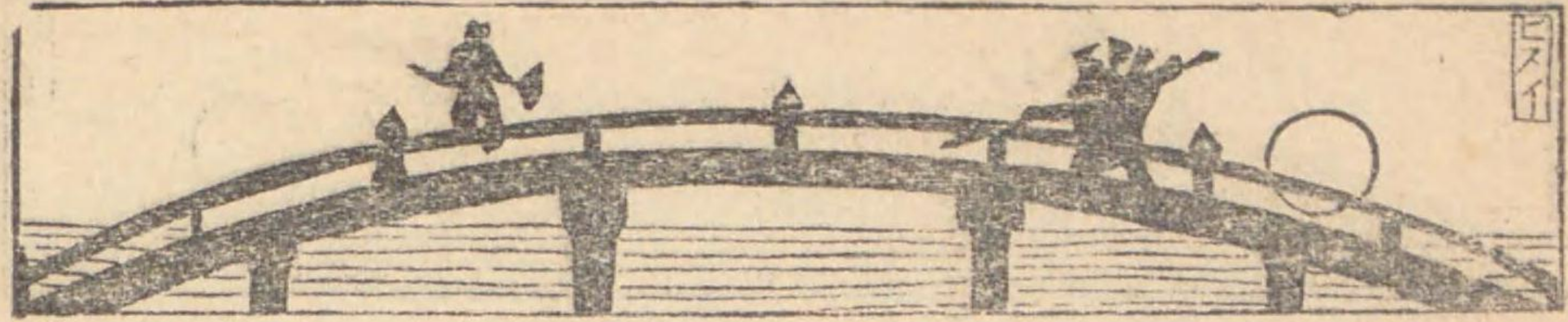
てやりましやう。

(花心) オ、それは何なにより辱かたじけない。さ、牛若殿うしわかどのごやら、

もう遠慮ゑんりよには及およばぬ事ことぢや、皆みなご一所しよに面おも白しろう、何なん

りごして遊あそばしやれ!





(牛若) それは難有う御座ります。

(花心) なんの禮に及ぶ事か。愚僧こそ其方の案内で、名

所巡りが出来た云うもの、イヤ、愚僧はまた一トま

はり、其邊を見物して參らう、……皆仲よう遊ばしやれ

や!

こ、上手堂の陰へ入る。

後には、犬若、猿若、虎若、龍若の四人、牛若を中

に取り込め、

(犬若) サ、そんなら仲間に入れてやる程に、直ぐに鬼に成るのぢやヨ。

(牛若) イヤ、それは拳で極めねば……

(猿若) いや、誰でも後から入ってくるものは、鬼に

なるのが今日の極めぢや。

(牛若) でもその様な無理な事を……

(虎若) 無理でも極めなら仕方が無い。

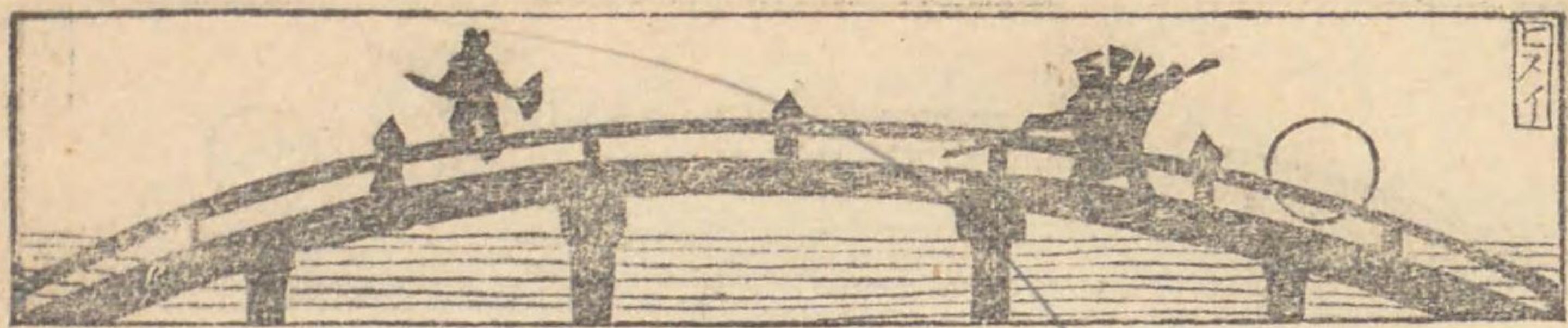
(龍若) それが厭なら入れぬばかりぢや。

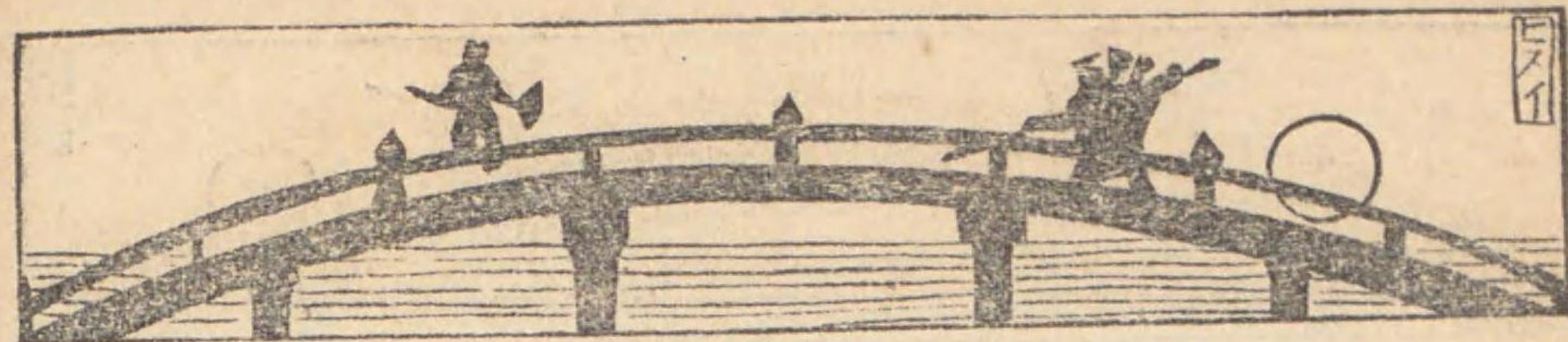
(牛若) まあ、仕方が無い、それでは成らう。

(犬若) 知れた事ぢや。

こ、犬若はざこ巾を厚くして、牛若の目を包む。

(牛若) ア、これはちよつとも見えぬワ。





(猿若) 見えんなりやこそ、目ん無い千鳥ぢや。さゝ、早
う捕えて見い。

こ、これにて四人手拍子を合せて、

「闇から出いた、牛若！」

牛は牛でも、角が無い。

角は無うても、耳はある。

耳があるなら、聞いて来い！

手の鳴る方え、聞いて来い！

手の鳴る方え、聞いて来い！」

こ、繰返し囃しながら、髪を引くやら、肩を打つやら、

嘲弄する。牛若一心に追いまはし、時々袂を捕える

事あるも、皆振放して逃げる。其中四人頷き合ひ、

皆上下え入つてしまふ。牛若はそれと氣付かず、彼

方此方さぐり廻り、やがて人氣の無いに心付き、不

審の思入れ、思ひ切つて目隠の巾を取り、四邊を見

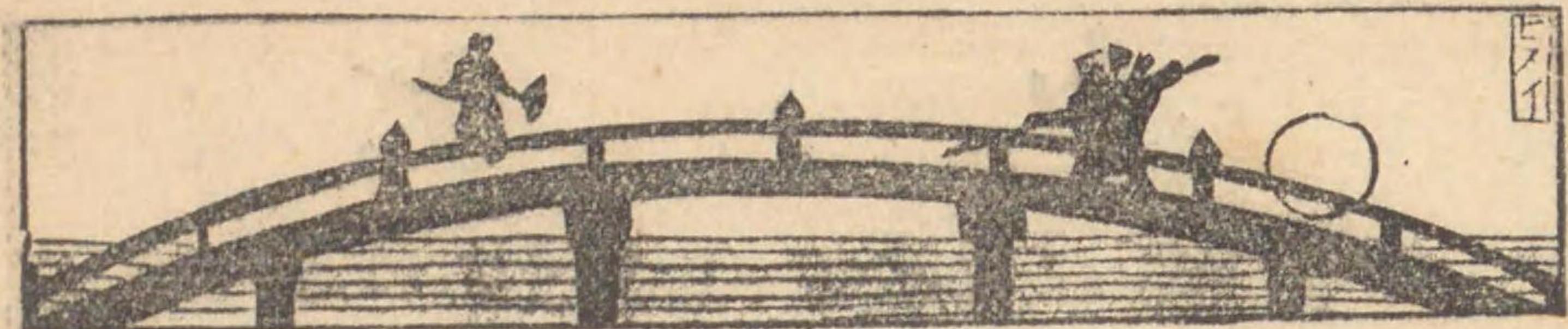
まはしてムツと成る。

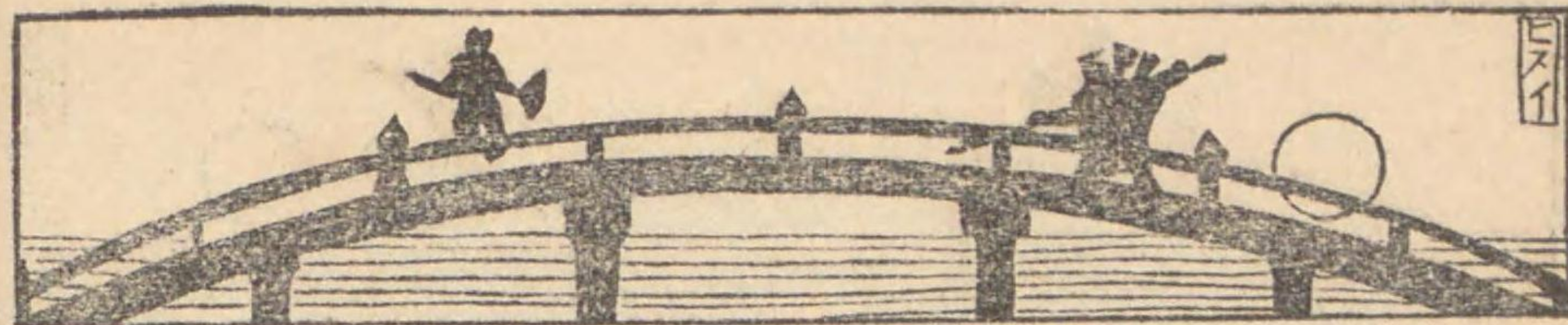
(牛若) 何の事ぢや、皆逃げおつたワ。さんく私を撈つ

て置いて、揚句の果は置き去りに…えい、性の悪い人

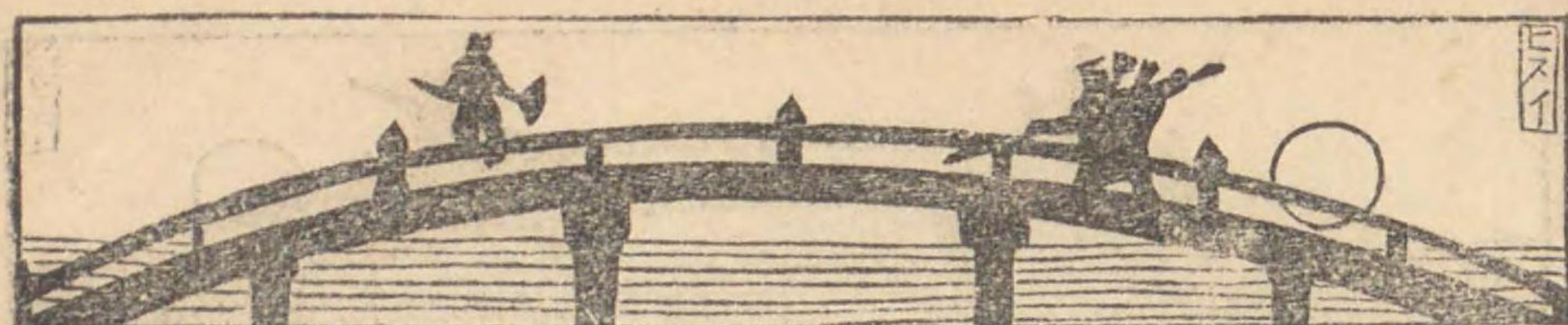
許りぢや…あ、それも思へば、今日初つた事では無

い。何ぞ云ふと平家の奴等、私を子供と侮つて、寄

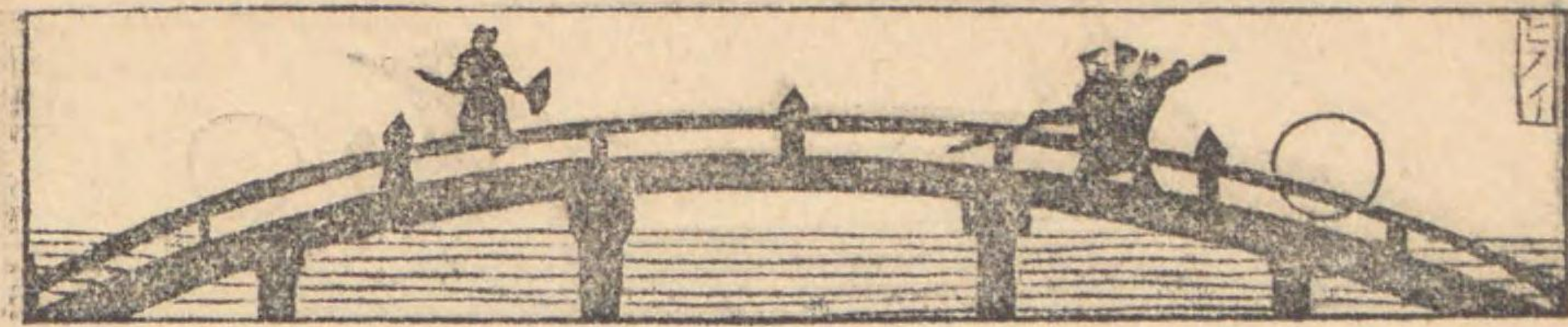




てたかつて玩弄物にしおる。世が世ならおのれ等に、指もさゝせる牛若では無いが……あゝ悔しいワ、口惜しいワ。今に見よ牛若が、見事源氏の旗揚して、おのれ等には今の返報、屹度物を見せて呉れるぞ。こは云ふものゝ、旗揚するには武藝が入る。それに私はこの通り、鞍馬の御坊の御弟子に成つて、後には坊主にされねば成らぬ。坊主こ云へば木の端同然、一生埋木で終るこは、何こ云ふつまらぬ事ぢや……あゝ厭ぢや〜坊主は厭ぢや……はやくこのお山を出て、立派な侍大将になつて、あの驕る平家奴に、一ト泡吹かせてや



たいものぢやがなア。
 こ、無念の思入れ。此時遠く鐘の音聞える、牛若はキツこ成り、
 (牛若) オ、あの鐘はもう入相、歸らにや成らぬ時刻が来た。
 こ、下手へ行きかける。此時後より、
 (花心) 牛若！
 こ、云ふ聲がする。牛若初めは氣付かず。
 (花心) 牛若、牛若！
 こ、再び呼ばれて初めて立止まり、四邊を見まはす



も、人無きに不思議の思入れ。

よき程に以前の花心坊、スツクと幕の前に現はれる。

牛若驚き、その側へ寄つて、

(牛若) お前は先刻の客僧殿、さては私を呼んだのは？

(花心) いかにも愚僧ぢや。

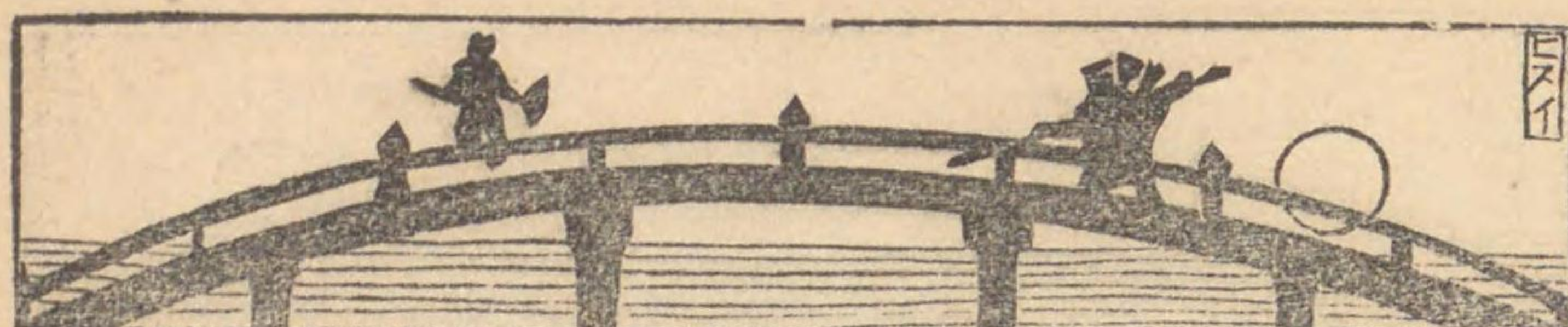
(牛若) 何ぞ御用が御座りますのか？

(花心) オ、！

と、頷いて、牛若の願に手をかけ、その顔を昵こ見て、

(花心) 何うちや、侍大將に成りたいか？

(牛若) ……それでは今の獨言を？



(花心) オ、皆聞いた。流石は源氏の御曹司、健氣な心

ご感心致した。それほご旗が揚げたければ、何んご愚

僧が力を添えて、武略の師範をして取らさうか。

(牛若) それでもお前は矢つぱり坊様、々々の身で武略ご

は……

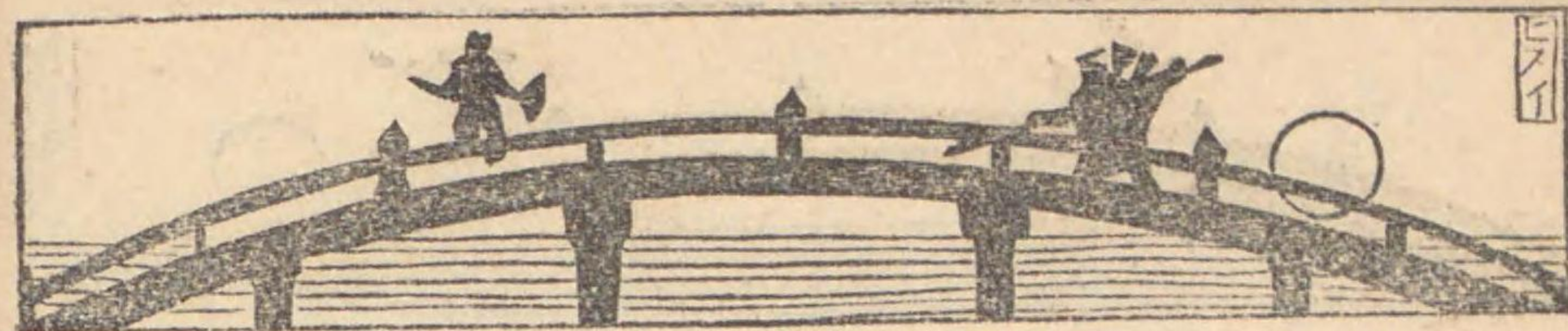
と、不思議の思入れ。

(花心) オ、その不審道理ぢや。何さまこの姿にては、

武略の師範覺束ない。さらば今こそ我が正體……これ

見て不審晴らすがい。

と、云ふ中、ドロくに成り、客僧の姿は消える。俄



に山嵐の心にて、立木は動き、花は散り、凄まじき景。
 牛若は少しも恐れず、屹と成つて正面を見つめる。途
 端に正面の幔幕落ちるに、中央の大木の前に、大天狗
 スツクミ立ち、羽扇にてさしまねく。牛若キツミ成り、
 やがてその前に出て平伏する。(幕)

中の幕 雪の僧正が谷

本舞臺、初めは一面の山幕をおろす。
 此前に樵夫斧六、鎌七立ち掛り居る。

(斧六) 時に鎌七や、此頃の世間の噂、此奥の僧正が谷で、

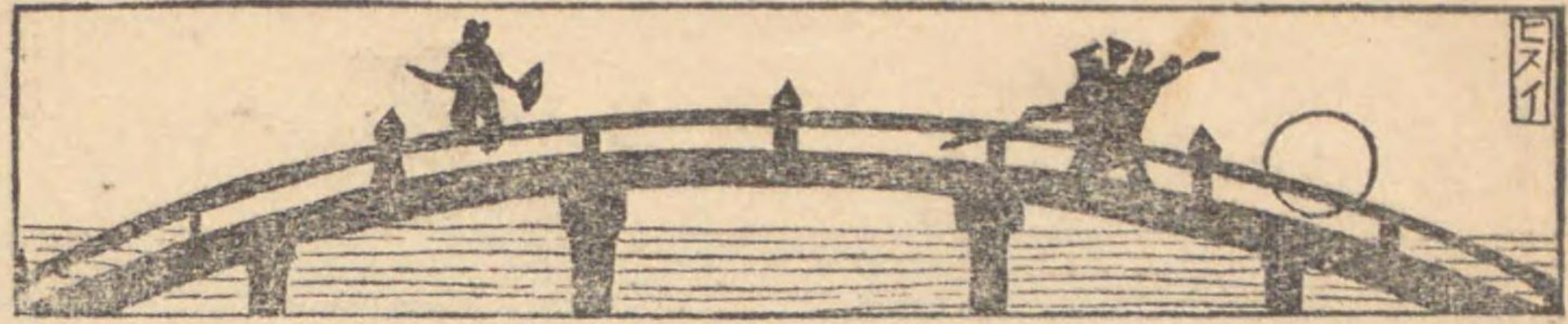
毎晩木大刀の音がするに云ふが、汝はそれを聞いたか

ナ?

(鎌七) その事では麓の者が、あれは木大刀の音では無う
 て、私等の様な杣の者が、慾張つて夜稼するのぢやな
 ご、邪推をまはして居るさうな。

(斧六) 滅相な。場所もあらうに、天狗の本場の僧正が谷
 へ、誰が夜稼に出かけやう。そんな處へ行つて見な、

木の幹を伐つて倒す間に、此方の股を割かれてまふワ。
 (鎌七) 違ひ無い。ぢやが、噂をすれば影ぢや、そんな事
 は云はぬもの、若しや天狗がああ鼻で、私等の噂を嗅



つけて、搦みに來よつたら何とする？

(斧六) コレ、おごすまい〜。兎角命あつての事ぢや。

イヤ、天狗の噂をしたら、ちり毛元からぞつこして來た。

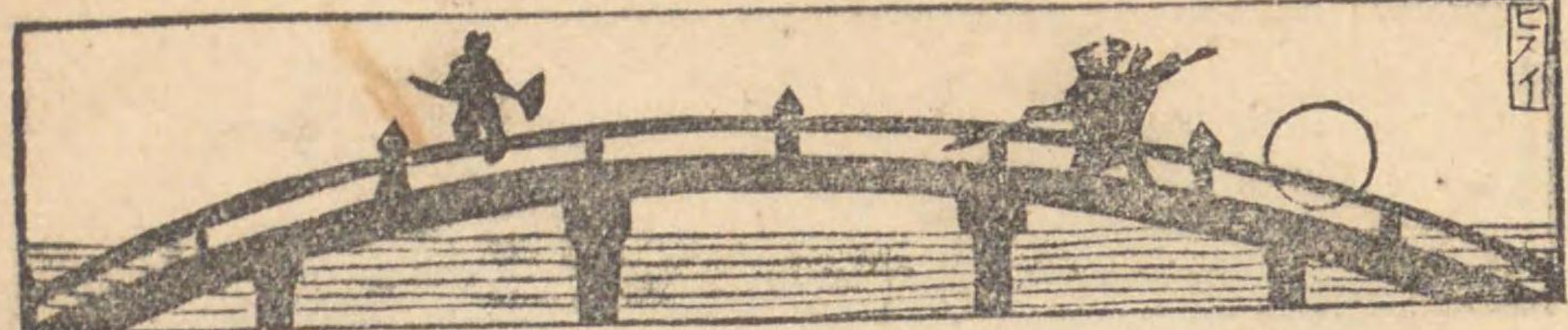
(鎌七) いかにも今日は滅法寒い、暮れたら雪に成らうぞ

い。

(斧六) 風引かぬ間に早く去んで、熱い雑炊でもやるこしやうか。

(鎌七) さアさ、急がつしやい〜。

ご。行きかける。



下手より平家の侍市原洲藤太、旅装束にて出で來た

り、入れちがつて兩人を呼び止め、

(洲藤太) ア、これ〜。

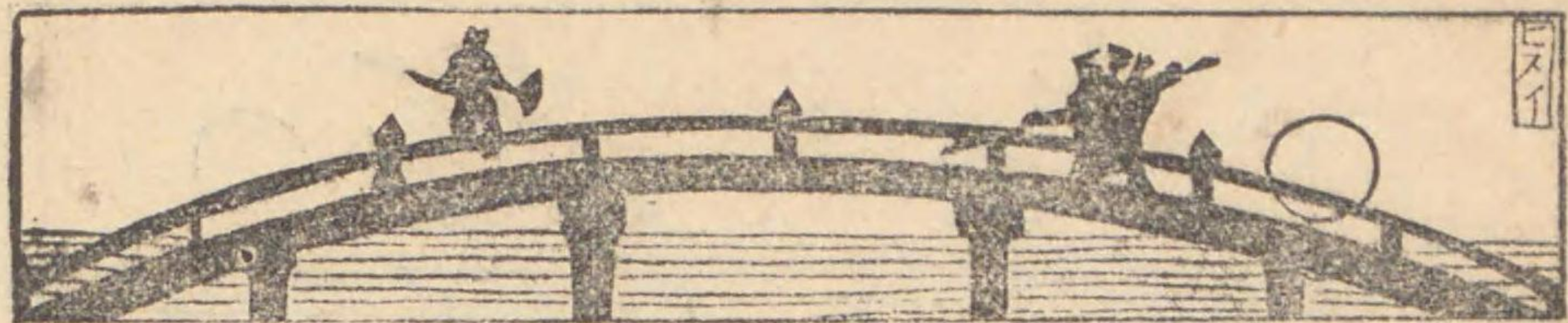
(斧六) お呼びなされましたか？

(洲藤) ちこ物が尋ねたい。鞍馬山の僧正が谷へは、これを參つてよろしいのぢやナ？

(斧六) ヘイ、僧正が谷へ入らつしやいますには、此所より他に道は御座りませぬが、それにしても彼様な所え、

何の御用で入らつしやいます？

(洲藤) ちこ仔細あつて參る者ぢやが、何故またそれを尋



ねるのちや。

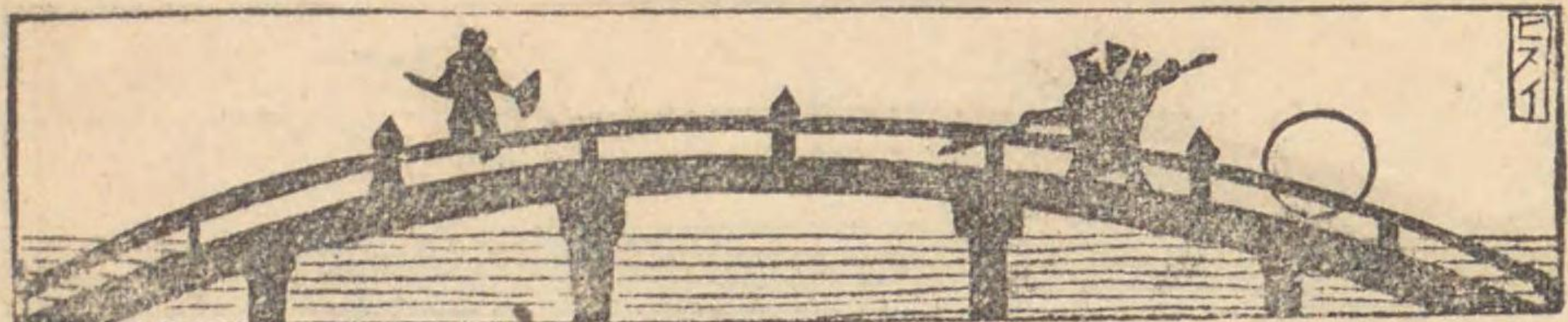
(斧六) それでも他なら知らぬ事、なあ鎌七!

(鎌七) さればで御座ります。お侍様、實はあの僧正が谷には、夜なく、不思議な音が致しますので。

(洲藤) すりや噂に聞き及んだは、全く根の無い事でもあるまいナ。

(斧六) 根の無い所か羽根のある、天狗の棲所の僧正が谷、あんな處え行かしやるごは、よくく命の入らぬ御方。

(洲藤) ハ、、、命が惜しうて今日此頃、侍商賣が致せるものか。殊に天狗が棲むなごは、愚昧の民の膽を



冷して、うかご側へ寄せつけぬ計略。まごごは平家に

恨を抱く、源氏方の落武者共が、其所に籠つて何事か、密議を凝らすに相違無い。それちやに依つて數多ある、

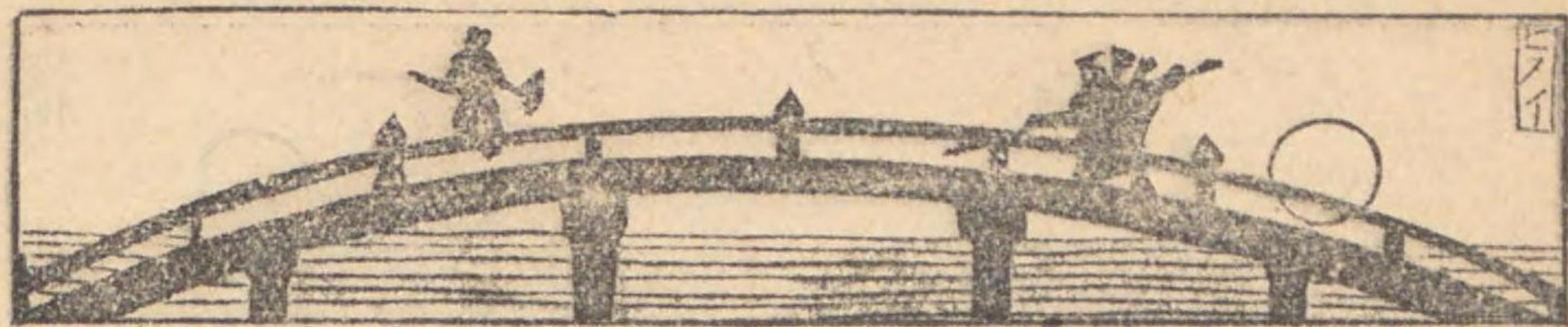
平家の武士のその中から、武藝すぐれた市原洲藤太、特に選ばれて斥候に參る。なんご侍の肝の太さは、聞

いて感心致したであらうな。

(斧六) なにさま、それを承はれば、恐れ入った御眼力。

(鎌七) こりや成る程、御言葉の通り、天狗なごでは御座りますまい。

(洲藤) イヤさう事が解つて見れば、別に恐い事もあるま



い。付てはなんご其方共、太儀ながら僧正が谷まで、身共を案内致してくれぬか。

(斧六) ヘイ……それはお易い御用ではございますが……。

(鎌七) 私共は一日働いて……腹も大分減いて居りますれ

ば……なあ斧六!

(斧六) 家には子供も待つて居りまする……その御用は御勘辨。

(鎌七) ナニ、御案内には及びますまい。道は一ト筋、目を閉いでも、

(斧六) 他へは出られぬ僧正が谷、まづは御機嫌よう、御

出なさりませ!

ご、兩人そこく下手に入る。洲藤太後見送つて、

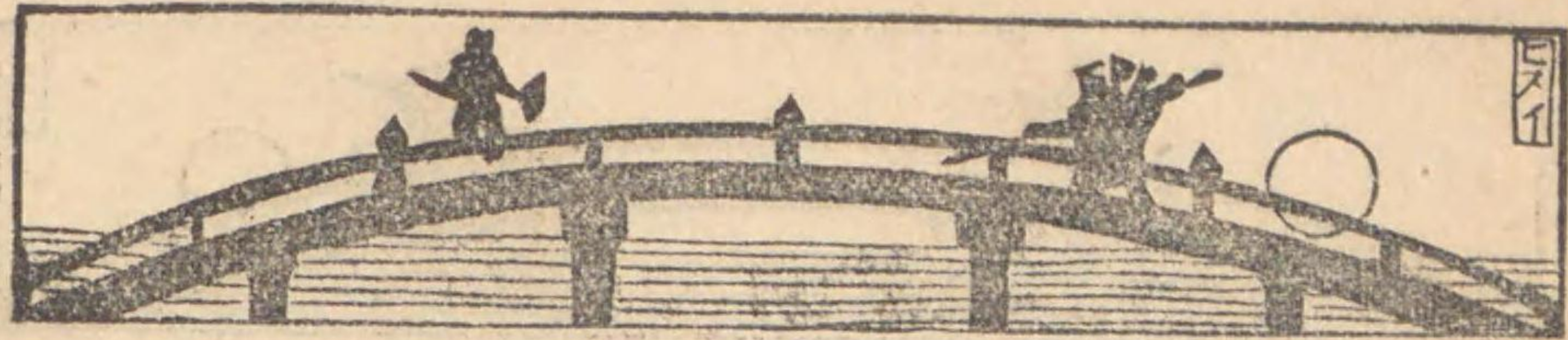
(洲藤) ハテ、弱い奴許りぢや。したがこれから夜に成つて、魔所聞ゆる僧正が谷へ、獨りで参ると云ふものは、あまり氣味の好いものでは御座らぬ。

ご身震する。

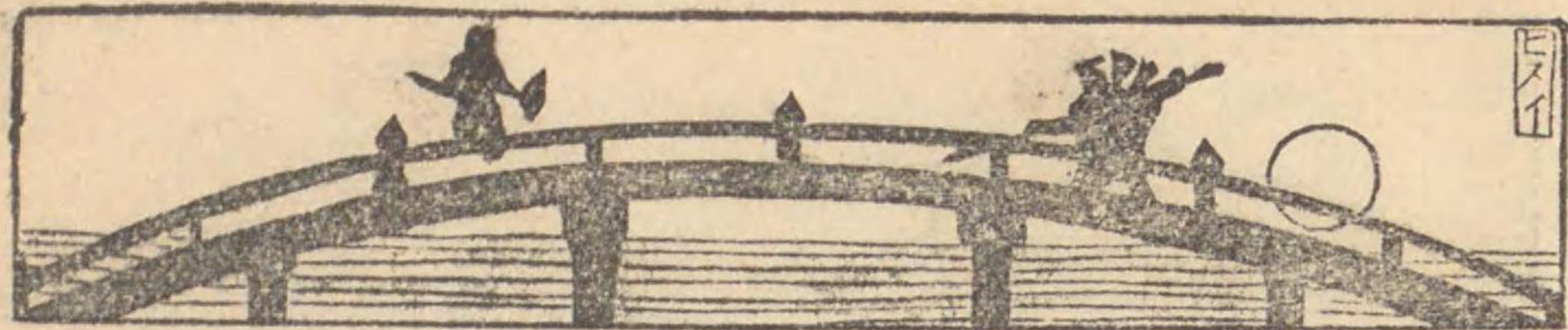
(洲藤) えい、總身がぞつとして参つた。

ご今度は嚏をして、

(洲藤) ハ、ハクシヨ。今の奴等が何かぬかし居るな。ご、急に又た威張つた見得にて上手へ入る。後、山

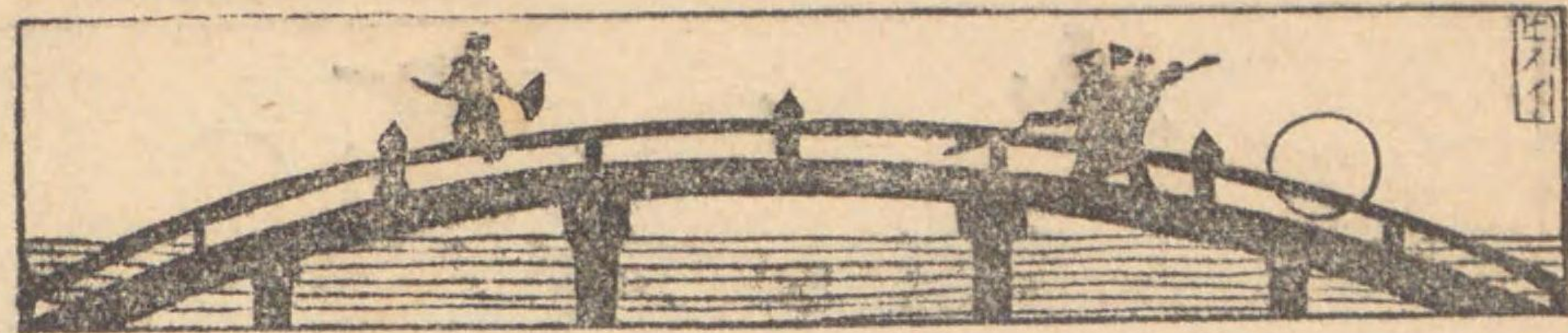


おろしに罅こたまの合方あひかたにて、山幕やままくを切つて落す。一面平めんひら舞臺ぶたい、杉すぎの立木たちき、同じく切株きりかぶ。日蓋ひおひより杉すぎの釣枝つりえだ。向ふ岩組いわぐみ、溪流たにがはの書割かきわり、但し雪ゆきを積つみらせ、凡すべて鞍馬くらま山僧正やまそうじやうが谷たに、雪夜ゆきよの體てい。此所こゝに大天狗だいてんぐ僧正坊そうじやうぼう、上手かみて大いなる切株きりかぶの上に住すまひ、左右さゆうには小天狗こてんぐ豊前坊ぶんぜんぼう、伯耆坊はくしきぼう附つき添そひ控ひかえる。中央ちゆうおうには牛若うしわか、木葉天狗このはてんぐ二名めいを敵手あいてに、木太刀きだちにて打ち合うちあふ。此見得初こみねはじめめは活人畫くわつじんぐわの體ていにて、何れも不動ふじどうの姿勢しせい。後のち立廻りたちまわりあるべし。



よき程ほどに大天狗だいてんぐ、羽扇はうちばにて指揮しきをする。牛若うしわか試合あひを止め、大天狗だいてんぐの前に兩手りやうてを突ついて了しまふ。木葉天狗このはてんぐは、下手しもて杉木すぎの根方ねがたに控ひかえる。(大天狗) いかにも牛若うしわか、此程このほどよりの稽古けいこの効しるし、天晴あつぱれ見みえたる手並てなみのほご、我われも満足まんぞくに存ぞんずるぞ。さりながら、只今ただいままでは木葉天狗このはてんぐ、これを見事みごとに仕止しどめたごて、まだ容易よういに安心あんしんは成なるまい。是これより改あらためて豊前ぶんぜん、伯耆はくしき、左右さゆうを見かえり) この兩名りやうめいを敵手あいてにして、今一度いまいちど試合あひを致いたせ。

(牛若) はッ、然しからば豊前坊ぶんぜんぼうごの、伯耆坊はくしきぼうごの、何卒なにいぞお稽けい



古を願ひまする。

(大天狗) 然し兩名一時には及ばぬ、此度は一個宛、代つて立合ふ事ご致せ!

(豊前坊) さらば拙者からお敵手致さう。

ご、これにて豊前坊身仕度をして、牛若ご立ち合ふ。劇しき立廻りありて、ご豊前坊打ちすゑられる。

(伯耆坊) 然らば今度はこの伯耆が。

ご伯耆坊代つて出で、又た牛若ご立廻り合つて、これも太刀を打ち落される。

(伯耆坊) 何さま不思議の御上達、伯耆も恐れ入つてござ

る。

ご感心の體にて座につく。

牛若も元の座に直つて、

(牛若) 御稽古難有う存じまする。

ご、謙遜して挨拶する。大天狗満足の體にて、

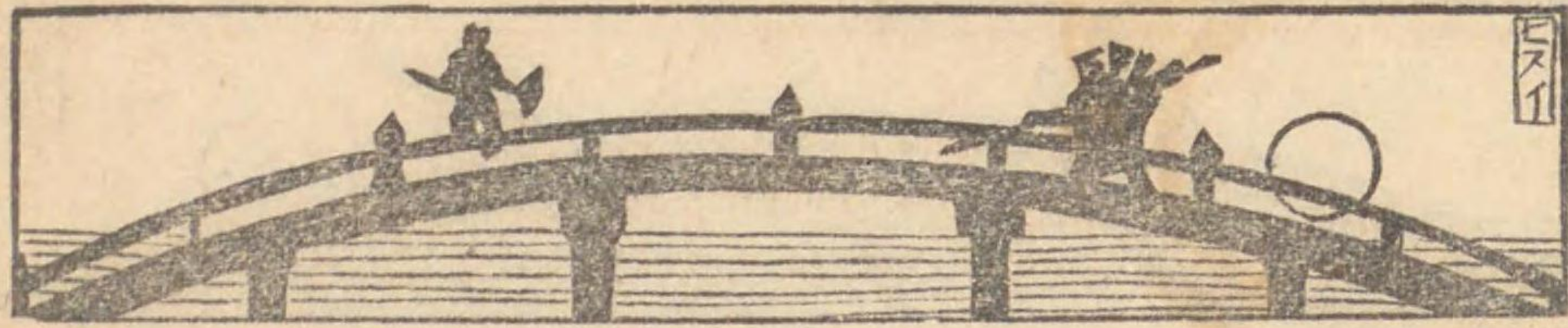
(大天狗) イヤ、只今の太刀筋にて、いよく牛若の手並

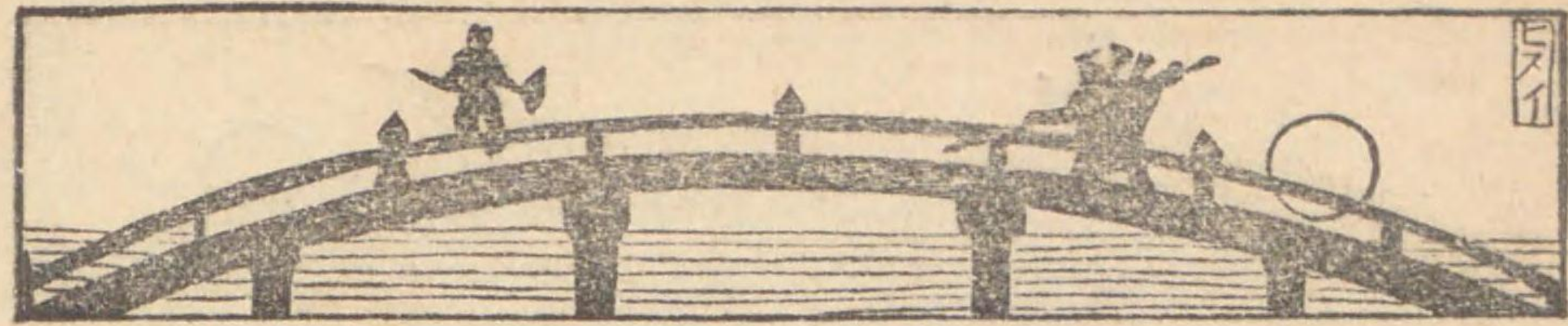
も知れた。此上は太刀持つ業、もはや稽古致すにも及

ばぬ。さりながら、劍は元一人の敵、武將ご成つて三

軍を指揮するには、別に兵法軍略が大切ぢや。その兵

法の秘事、秘傳、今こそ其方に授くるぞ。謹んでこれ





を受けい!

ご、大天狗懷中より巻物を出しかける。

牛若急ぎ下手溪流に行き、手を清めて、大天狗の前に出で、うやくしく巻物を受取り、元の座に直つて、しづかに開けて中を讀む。

(大天狗) 何ご合點が參つたか。

(牛若) はい、會得致しまして御座ります。

ご、巻物を巻きおさめる。

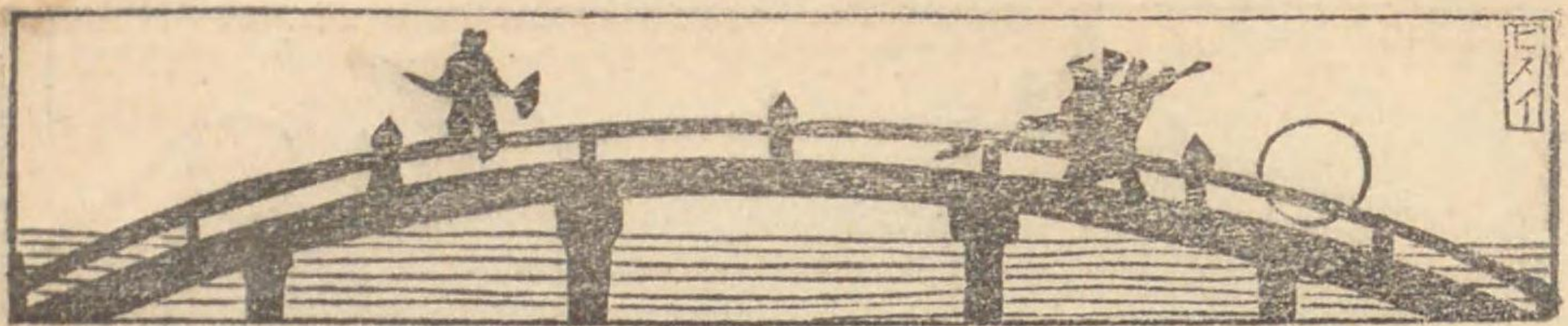
(大天狗) それにて我も安堵致した。此上はその一卷、必ずごにも肌身を放さず、日夜に研磨を積んで可からう。

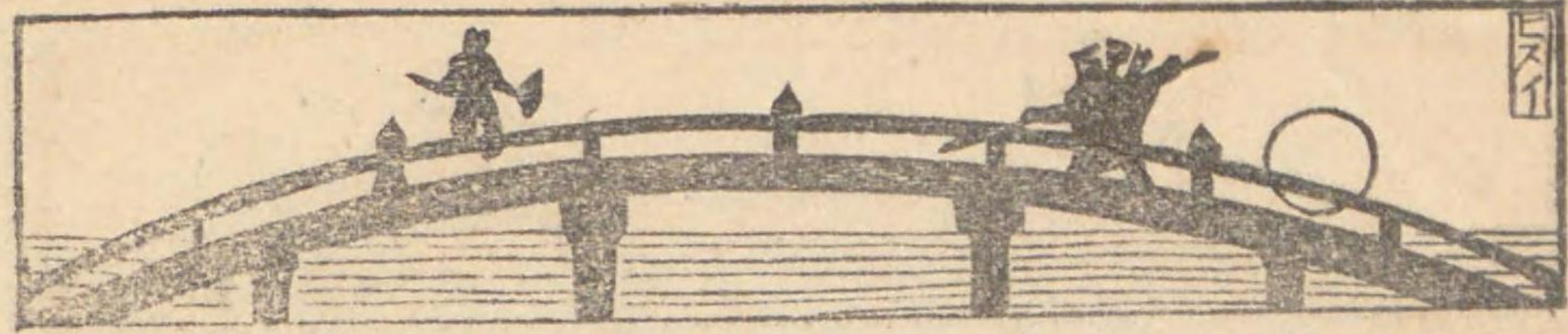
然らば我等は此後ごも、其方の影身につき添うて、屹度武運を守るであらう。

ご、空を見上げ兎かう云ふ間に東が白む。今日はこれにて別れるぞよ。

ごすつくご座に立ち上り、下手の木葉天狗も、其側に來てすまふ。牛若は平伏する、一トしきりはげしい雪を降らせる、仕掛にて天狗の姿を消す。

あご牛若、巻物を押しいたゞきて懷中に納め、(牛若) 嬉しや武藝兵法まで、残らず傳授うけた上は、やがて平家を亡すべき、時節の來るも遠くはあるまい。





こは云へ事を起すには、よい家來が無くてはならぬ。只だ此上は山を降りて、諸國に忍ぶ源氏の餘黨を、一日もはやくかり集め、旗揚の用意致さう。

こ、勇み立つて上手へ行きかける。

此時下手木陰より、以前の洲藤太つかくこ出で、

(洲藤) 牛若覺悟。

こ、きりつける。牛若體をかはし、その利腕を搦んで、

(牛若) 卑怯な、何者ぢや。

(洲藤) 平家の侍にその人ありこ、人に知られたつもりぢ

やが、事に依つたら知らぬ者もある、市原洲藤太盛高

ぢや。

(牛若) さては六波羅の間諜か。面白い、黽つてやらう。

こ、手を放してつきのける、洲藤太タヂくこなり、

更に身がまへて又た切つて掛る。牛若始終素手にて

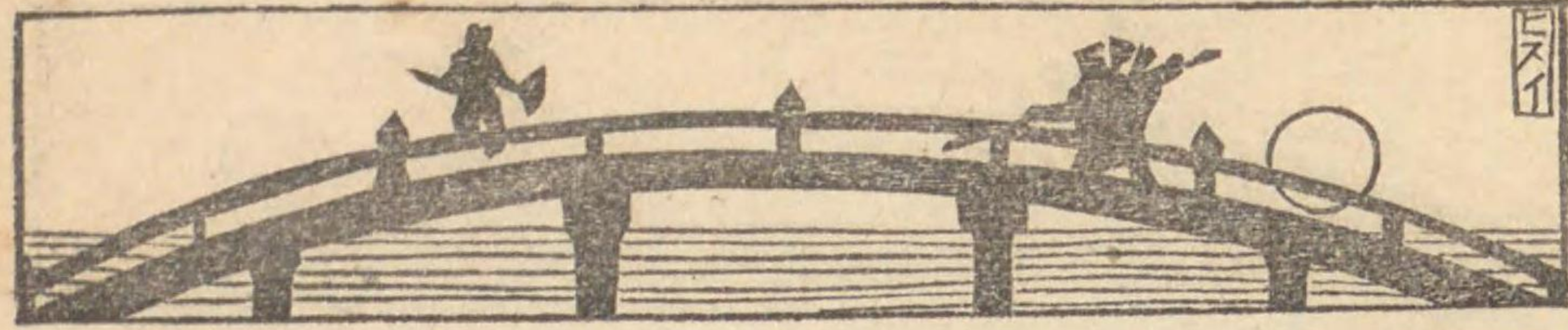
あしらひ、可笑味の立廻り。これに又たはげしく雪

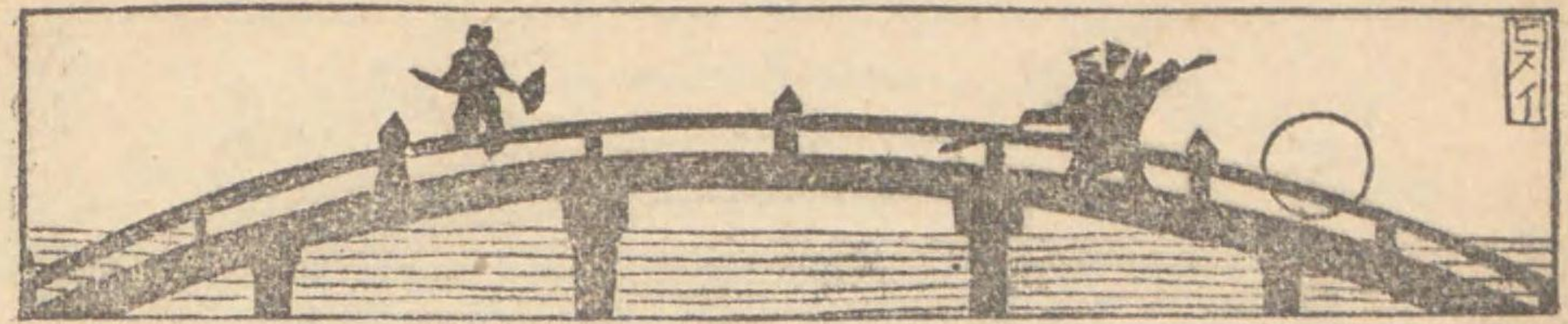
をかぶせる。こ、牛若、洲藤太の太刀を奪ひ、見事

に首を切つて落す。(幕)

詰の幕 月の五條橋

本舞臺中央より上手によせて、大なる橋を半分見せる、





見物

奥より出入あり。橋の下に河原を見せ、その向ふ町家
つゞき、連山を見せたる書割。

空は初め夕映、後に月の出る事あり。

上手、下手柳の立木、高札なごよろしく、凡て京都五
條橋袂の體。

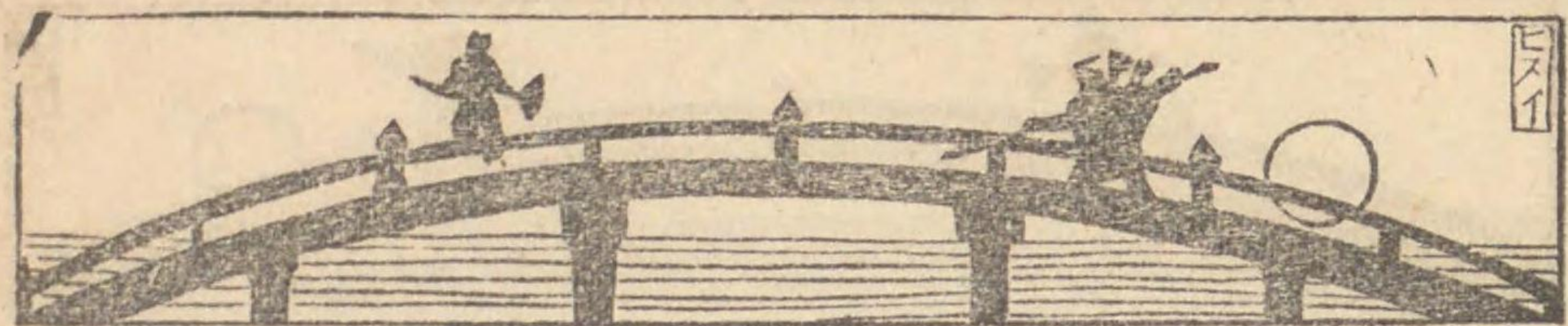
此所に放下師二人、道端にて舞い居るを、通り掛りの

男女小供等見物して居る。

その見物の中に、平家の目附京童二人まじり居る。

放下の歌

『面白の花の都や、筆にかくごも及ばじ。東には祇園、



見物

清水、落ちくる瀧の、音羽の嵐に、地主の櫻はちりぢ
り、西は法輪、嵯峨の御ん寺、廻らばまはれ水車の輪

の、しりんせきの川波。川柳は水にもまるゝ、しだり

柳は風にもまるゝ、ふくら雀は竹にもまるゝ、都の牛

は車にもまるゝ、茶臼は挽木にもまるゝ、こきりこの

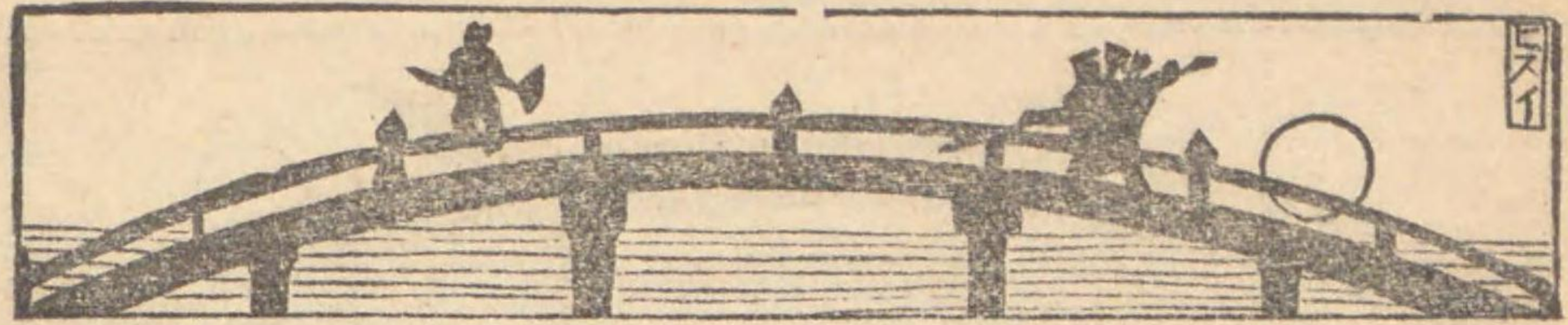
二つの竹の、世々を重ねて、うち治まりたる御代かな。』

(見物一同) やんや〜！

(放下の甲) さア〜此所がすんだら、又た上の辻でまいま

しよ。

(見物の甲) そんなら私等もついて行け。



見物乙

皆来いよく。

こ。これにて放下師、見物と共に、ごやくご上手へ入る。中には別れて、橋より奥へやら、又た下手へやら行くのもある、京童はあごに残り、

(京童の甲) いつもながら此橋の袂は、賑やかな事ぢやな。

(京童の乙) その賑かな所こそ、私等の氣をつけねばならぬ

所ぢや。今もあの中に居た者が、六波羅殿の陰口を、今少して云はうごしたを、放下が来たので、聞きそこなうた。

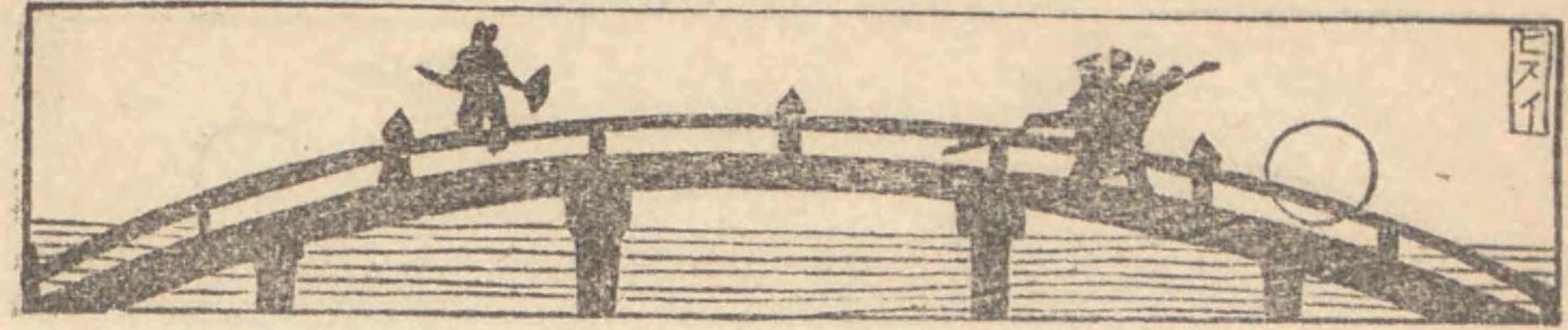
(京童の甲) 私はまた放下の歌に、何ぞ悪い事がありはせぬ

かこ、耳を濟まして聞いて居たが、あまりの節の面白さに、つい文句には氣が付かなんだ。

(京童の乙) それはさうご、この五條の橋も、日の中こそこないに賑はへ、暮れては人通りのこつこ断えるは、恐ろしい大入道の、化けて出よる故ぢやさうな。

(京童の甲) その噂は私も聞いたが、大入道は大入道ぢやが、それは化物ではない追剥で、往來の人の腰の物を、皆取りあげてしまふのぢやごよ。

(京童の乙) 坊主が人の腰の物を取つて、何の役に立てよるぢやらう。



(京童の甲) 大方それを集めて置いて、後に鐘でも鑄やうと云ふのか。

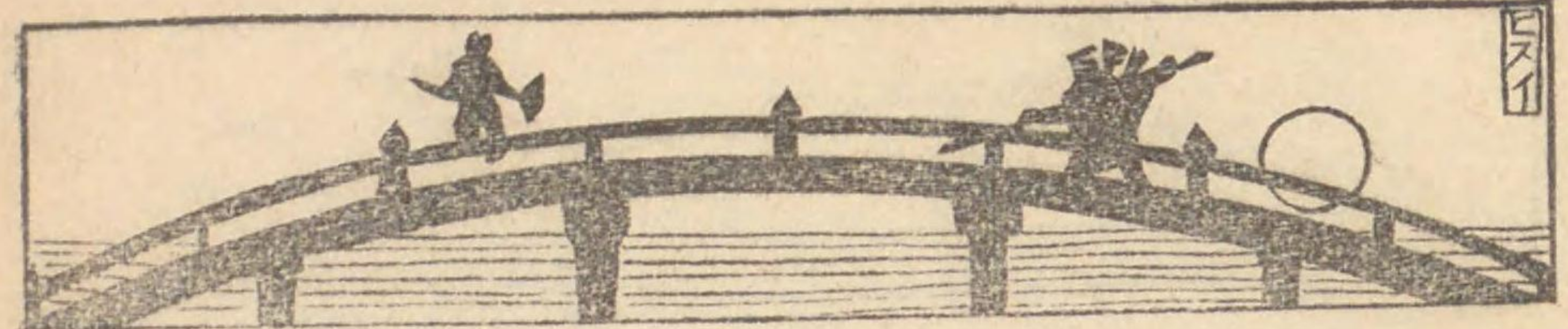
(京童の乙) 鐘と云へばもはや日暮れぢや、一度御所に歸るまいか。

(京童の甲) さうぢや、歸つて誰ぞと代つてもらはう。

と、兩人下手へ入る。

あゝ暫時空舞臺、仕掛にて夕映の空段々暗くなり、次第に夜になる體、山の端より月さし昇る事。

此時花道より、武藏坊辨慶、大薙刀を杖に、ノツシノツと出で、よき處にて立止まり。



(辨慶) 我宿願の仔細あつて、五條の天神に祈誓を籠め、

夜毎にこの橋に出で、往來の人の太刀を奪ひ、その力を試す。雖も、未だ心を明かすべき、眞の豪傑に出

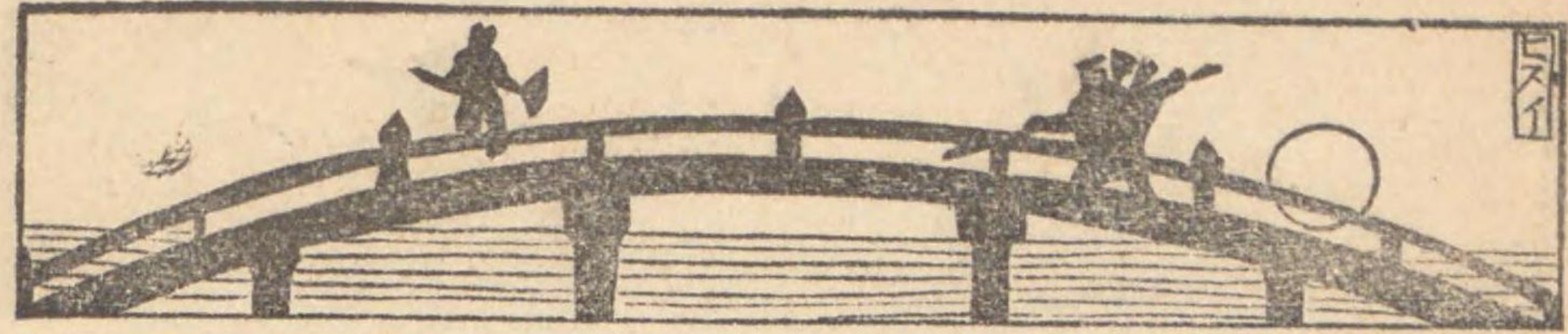
で會ひ申さぬ。今宵は己に満願なれば、何卒して今宵こそは、手答のある敵に出會うて、願を叶へ度いもの

ぢやなア。

と、本舞臺にかゝり、上手を見廻しやがて柳の木蔭に隠れる。此所へ、以前放下師を見て居た者の中から、

侍一人上手より出来る。辨慶其前に出で立ふさがり、

(辨慶) こりや待て!



(侍) へい〜〜。

ご腰をぬかす。

(辨慶) その太刀を出せツ!

(侍) へい〜〜。

ご刀を渡す。

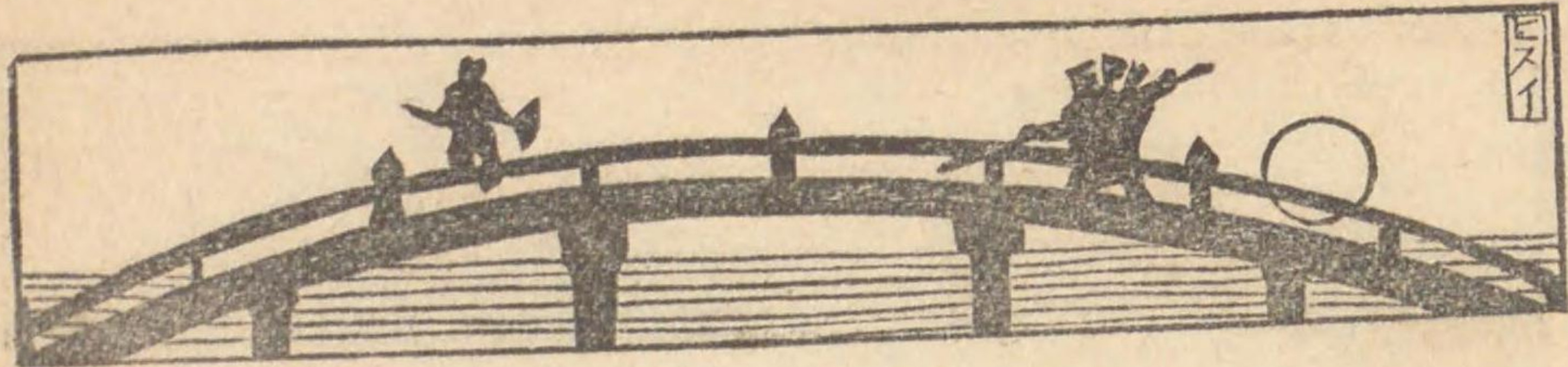
(辨慶) もうよい、行け!

(侍) へい〜〜。

ご云つても立てぬこなし。

(辨慶) 立てねばかうして立たせてやらう。

ご襟髪を取つてつり上げ、下手へ突きはなす。侍轉げ



る様に逃げ込む。暫時して又た同じ様な侍出で、同

じ様にして太刀を取られて逃げ込む。三度目に、平

家の侍鶉殿大六、大太刀、大扇子にて、橋の彼方よ

り威張つたる足ごりにて來かゝる。

辨慶また出で、その前に立ちふさがり、

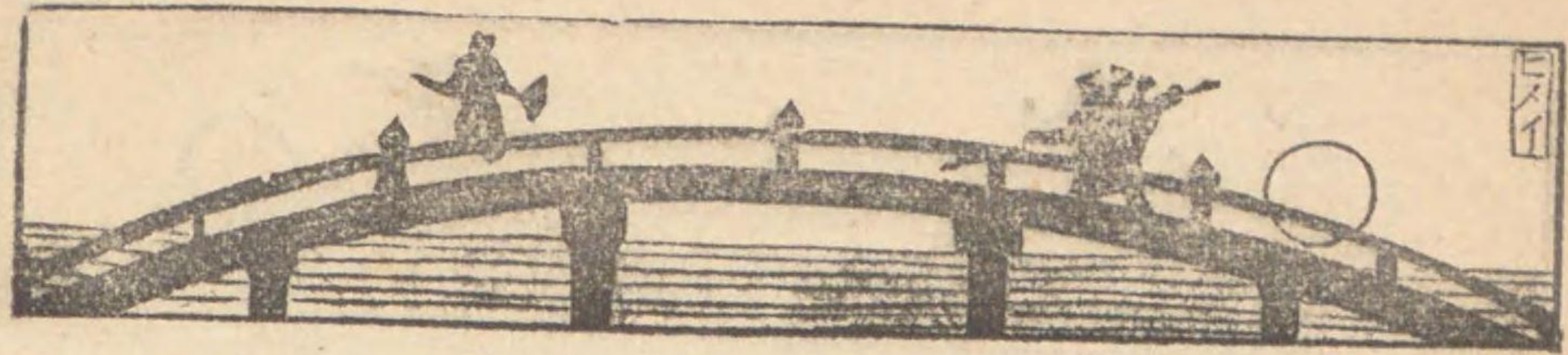
(辨慶) こりや待て!

(大六) 何ぢや。

(辨慶) その太刀よこせ!

(大六) 此奴が〜、何所のづく入坊主か知らぬが、侍様

にお向ひ申して、その魂の太刀くれさは、以ての外



無禮者奴が。それほご此太刀が欲しくば、今引きぬいて、その素首、胴から縁を放して呉れるワ。

ご、抜かうごして抜けぬこなし。今度は鞘ご腰から抜き取り、更に鞘を拂つて身構へする。辨慶少しもさはがず。

(辨慶) 分に過ぎた大太刀持つて、その抜き方も知らぬ様な、なまくら侍の魂、あまり用もないのぢやが、これも數の中には成らう。

ご、素手で二三合あしらひ、ごゞその太刀をもぎ取つて了ふ。

大六大きに驚き。

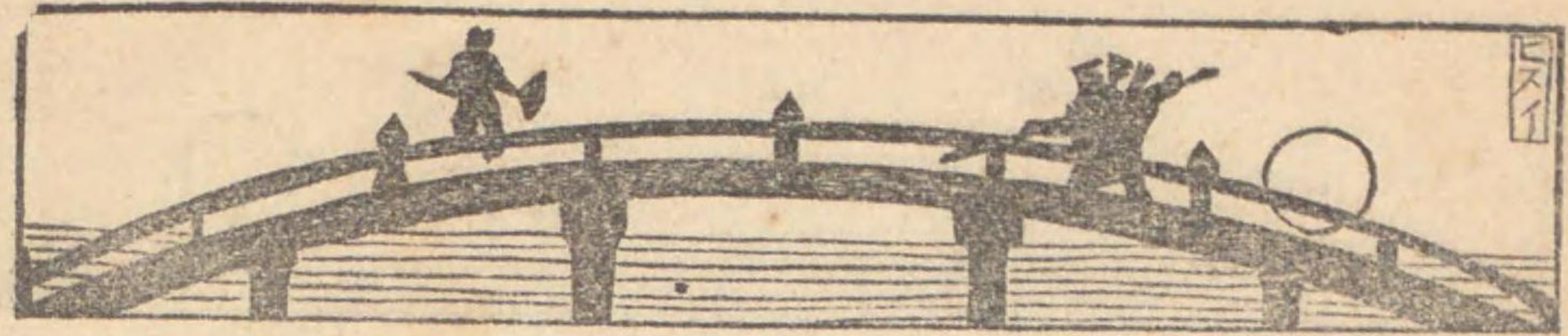
(大六) ワア、その大太刀で切られては、この身體が三つあつても足らぬ。御免ぢやく。桑原々々。

ご、一さんに花道をかけて入る。

(辨慶) ヘツ、見かけほごもない奴めが。

ご、以前の太刀二本と共に、この大太刀を把にして、柳の下に投げて置く。此時上手にて笛の音聞ゆ。辨慶聞きつけ、耳を濟ます體。

(辨慶) ハテ、心得ぬあの笛の音、更けては往來も途斷ゆべき、この五條の橋通りを、何者なれば今頃に、月を



下物のあの一曲、心憎き振舞ちやはエ。

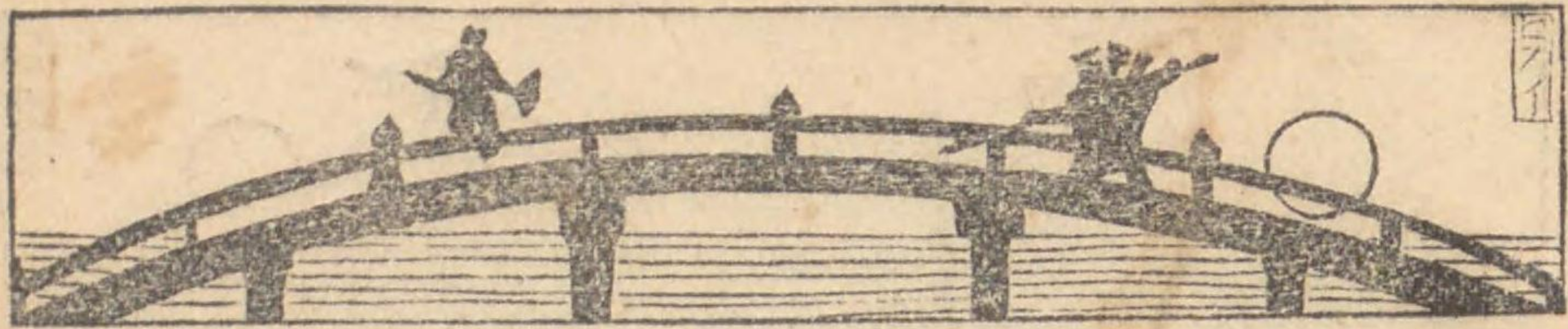
こ、我知らず橋の上へかゝる。

此時彼方より、牛若薄衣を顔から掛け、笛を吹きながら來かゝる。

辨慶は女ご思ひ、わざと避けて行かうとする。牛若笛を吹きやめ、つかくゝこ行つて、辨慶の薙刀を蹴あげる。

(辨慶) おのれ曲者!

こ、斬つてかゝる。牛若ヒラリと體をかはし、薄衣を辨慶に投げかける。牛若笛にてあしらひ、これより立



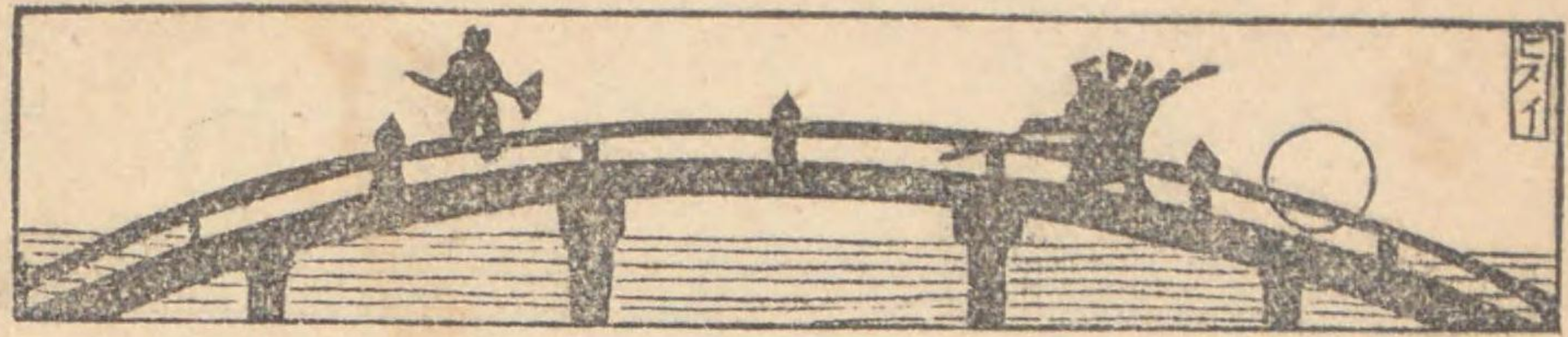
廻となる。立廻り中程より、牛若太刀にて打ち合ひ、こゝ太刀を棄て、組かゝらうとする。牛若巧に逃げまはる。その中辨慶段々疲れて平太はる。牛若襟髪を掴み。

(牛若) こりや入道、まだ來るか。

(辨慶) いや……恐入つたお手のうち……よもや、人間ごも思はれませぬが、さては天狗か、魔性の者か?

(牛若) ホ、よく云うた。如何にも鞍馬山の天狗に、教を受けた源の牛若。

(辨慶) ナニ、牛若ご仰せらるゝは、義朝殿の御子でござ



るか？

(牛若) 如何にも左様ぢや、シテその方は？

辨慶下手に両手をつかへ、

(辨慶) 私事は叡山の西塔に住む、武藏坊辨慶ご申す、荒法師に御座りまする。

(牛若) さては噂に聞き及ぶ、辨慶ごは其方であつたか。

こりやよい者に出會うたナ。

(辨慶) 私こそ此程から、五條の天神に祈願の甲斐あり、よき御大將に出會ひました。何卒是より御家來ごして、やがて平家追討の、御旗揚のその折には、必ず御供致し

たう御座りまする。

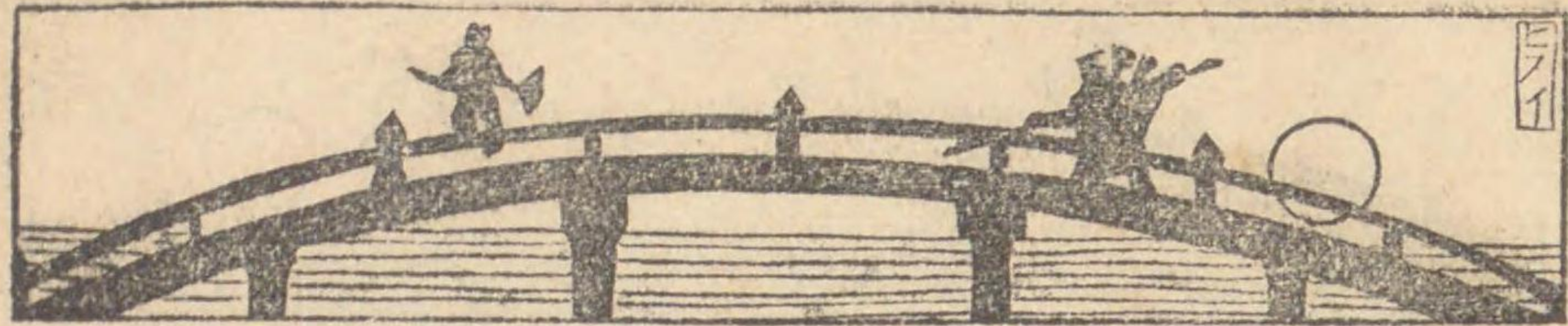
(牛若) そりや、此方からも云ふ事ぢや。今宵は月にあくがれて、思はず好い味方が出来た。これも一重に大天狗のひき合せ、こんな嬉しい事はない。それでは辨慶！

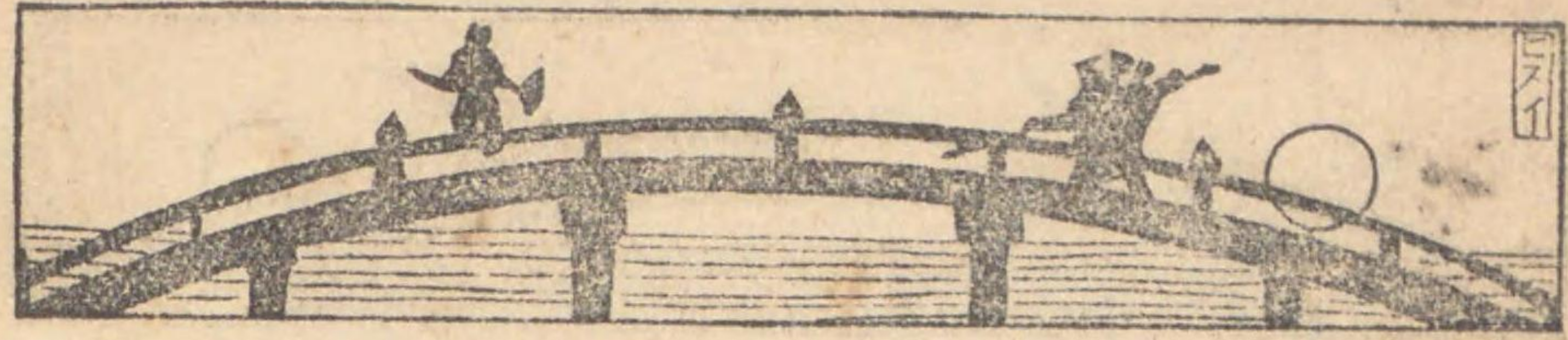
(辨慶) 牛若さま！

(牛若) きつご主従の盟を致すぞ。

ご、よろしく思入れ。

この以前より、先の大六、及び太刀を取られた侍二人、下手より忍び出で、辨慶の様子を見て居り、此時大聲にて、





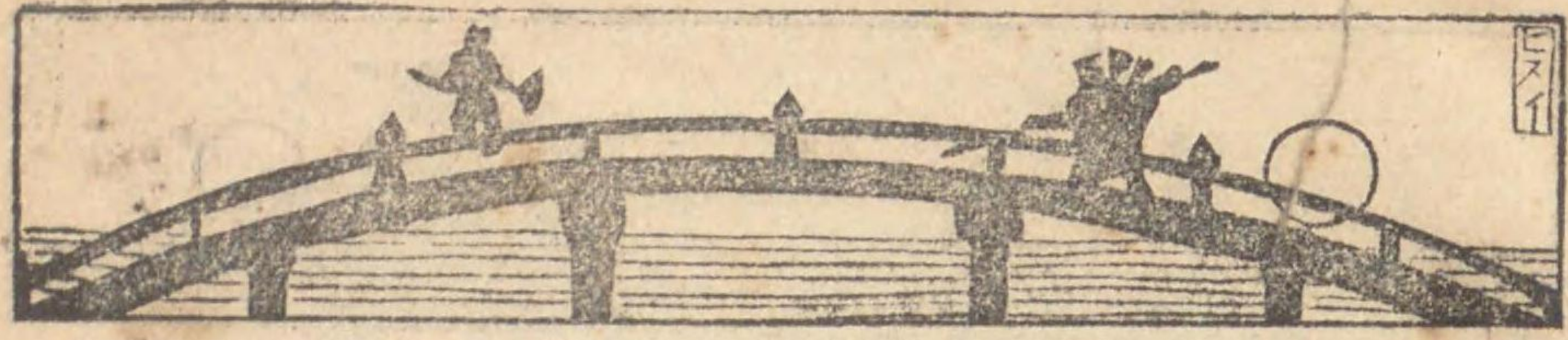
(大六) ヤイ、あれを見い、先刻の大坊主めが、あんなちさい坊んちに負けて、手をついて謝罪て居るワ。

(侍の甲) コリヤ坊主、もう此方も負けはせぬぞ、先刻の太刀はやく返せ。

(侍の乙) おれの魂を取り戻しに來た。

ご急に元氣づいて出て來る。辨慶見て冷笑い。

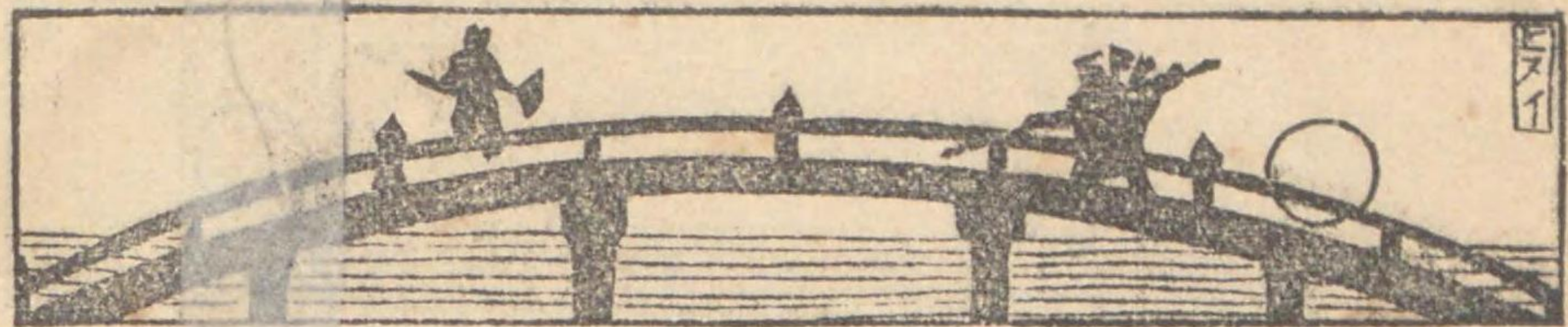
(辨慶) ハ、、、さう云はいでも其方達の、刀は此方に用はないワ。黄金作の虎鞆の、大將刀を得た上は、なまくら物の赤鯛、猫も切られぬ雑兵刀は、把に束ねて返してやるワ。勝手に持つて失せ居れい！



ご、以前の刀の把を投げ出す。三人各自わけ取り、おかしみの見得にて腰にさし、大手を振つて、花道に入る。

其間に辨慶は薄衣を取つて、牛若に着せる。牛若又た笛を吹きながら橋の上へ行く。辨慶薙刀をつき、その後から供をして行く。此模様知らせなしにて。

(幕)



をぢさんお伽噺終

明治四十三年十二月二十日印刷
 明治四十三年十二月廿六日發行

定價金七拾錢

著者 巖谷小波

發行者 東京市京橋區弓町四番地 北村溫平

印刷者 東京市麴町區有樂町二丁目一番地 中村政雄

印刷所 右同所 報文社

發行所

東京市京橋區弓町
 電話新橋四九五三番
 振替東京九五五六番

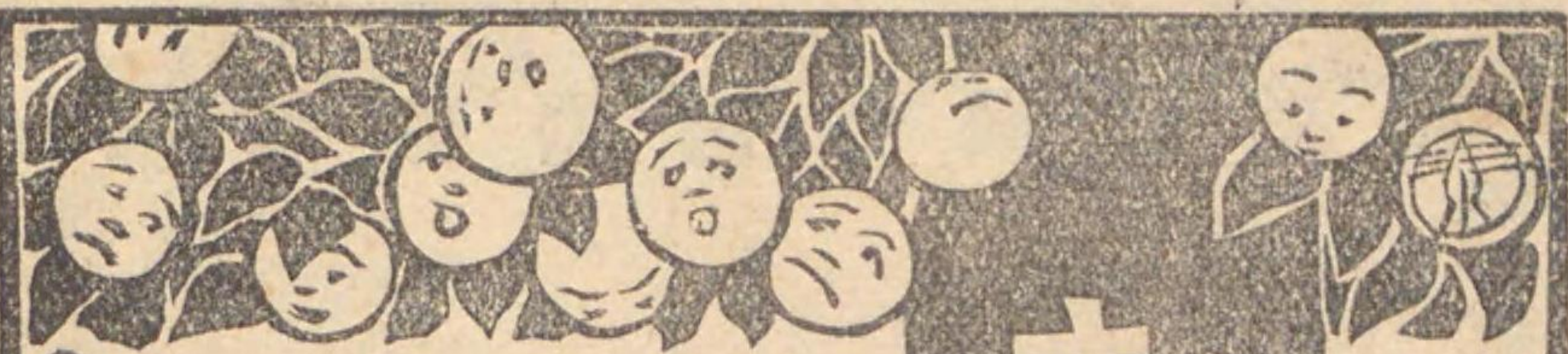
三立社

巖谷小波先生著

太田三郎君
杉浦非水君

山中古洞君
密書并装幀

お伽十八番



魔法の桶 賣卜の名人 四六判新洋装類美本
 白髯物語 剃髮城 十數度刷石版六枚入
 黄金の卵 禍の門 口繪小波先生肖像
 善玉悪玉 金の生る木 定價金六十五錢
 川の少女 月盗人 送料金八錢
 五色の羊 羊の角 東京京橋弓町
 蘇生鶏 裸の小人 三立社
 針の功名 コケコー王 振替東京
 母の行方 姫の一言 九五五六番

巖谷小波先生新作 明治四十四年一月發行

日本新五大噺

近刊 豫告

三立社發行

じくも

桃太郎後日噺
二代猿蟹譚

續花咲翁
舌切蛤

からく山
狸の記念碑

寶を取つた桃太郎、花を咲かせた花咲翁、柿の事から猿蟹合戦、恩を忘れぬ舌切雀、敵を討つたからく山。のお話は皆さん御存じでせう、けれどもこのお噺は、また市が榮えたのではありません。その續きを知りたい人は、ぜひこの本を御覧なさい。それはく面白くて、お腹を抱へて大笑。

巖谷小波先生序 武田櫻桃先生編

三版 小僧學校

四六版 製本堅牢 定價四拾錢 送料金六錢

(時事新報評) 本書は銀行會社官衙の小僧諸君を始め小中學校生徒等にして身を實業に委せるもの、補習用として之に必要な算術、簿記、作文、習字の四課を講述したる上、手形に關する講話を附載したるもの就いて讀むべし。(實業少年評) 獨習のできる様にやさしく述べたもので實業家店員及び子供の爲めに良き教科書なるを信ず實務上の参考になる事多し。

東京市京橋區弓町四番地
電話新橋四九五三番
振替東京九五五六番

三立社出版部

發行所

欠
淺

338

2

